

福井県埋蔵文化財調査報告 第101集

藤巻多珍坊遺跡

— 中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査7 —

2008

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

このたび、中部縦貫自動車道建設事業に伴い、平成14・15年度に発掘調査を実施しました藤巻多珍坊遺跡の調査成果がまとまり、福井県埋蔵文化財調査報告第101集として刊行することとなりました。

藤巻多珍坊遺跡は、その名が示すとおり、「館」跡と「坊」跡に関係する遺跡であります。「多珍坊」は、現在、藤巻集落内にある浄土真宗本願寺派善教寺の前身であり、平泉寺末坊として当地に存在したと伝承されています。さらには、調査範囲の外に、今も大規模な土塁と堀が残っています。今回の発掘調査において、室町時代の終わりごろから安土桃山時代にかけての石垣や建物などの遺構が検出され、陶磁器類や石硯などの遺物が出土しました。これにより、館跡と坊跡が存在した可能性が高まりました。

また、山裾斜面において平安時代の須恵器窯を3基検出しました。斜面をトンネル状に掘って作る地下式とよばれる構造であり、非常に残りのよい状態でした。今まで周知されておらず、「藤巻窯」と呼ぶことができる新発見の窯跡であります。窯跡からは、須恵器が多量に出土しました。永平寺町内においては、これまで中部縦貫自動車道関連の発掘調査が多数行われてきましたが、これらの遺跡から出土した須恵器は、この窯跡で生産された可能性が非常に高いものです。そのほかにも、全国的にも珍しい、鳥形を模した「形象硯」の一部や、祭祀具である「人形」や「陶馬」も出土しました。

今後、これらの発掘資料が埋蔵文化財の理解を一層深める手がかりとなることや、本書が学術の進展に寄与することを期待します。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書作成に至る間、ご協力やご支援を頂きました関係各位の皆様にご心からお礼申し上げます。

平成20年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 水 野 和 雄

例 言

1. 本書は、中部縦貫自動車道建設事業に伴い、平成14・15年度にかけて発掘調査を実施した藤巻多珍坊遺跡（福井県吉田郡永平寺町藤巻所在）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 調査は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、主査山本孝一が担当し、嘱託職員小川幹太（平成14年度）・同山本多紀（平成14・15年度）とともに実施した。
4. 調査は、平成14年7月3日～12月26日、平成15年7月2日～12月24日の期間で実施した。
整理作業は、平成16年4月1日～平成20年3月14日の期間で、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにおいて実施した。
5. 本書の編集は、主査山本が行ない、主査中川佳三・同田中勝之・同宮崎認と山本が分担し執筆した。
文責は以下のとおりである。
山本孝一 第1章～第3章、第4章第1節・第2節Ⅱ、第5章、第6章第1節、第7章
中川佳三 第4章第2節Ⅰ、第6章第2節Ⅱ
田中勝之 第4章第2節Ⅲ、第6章第2節Ⅲ
宮崎認 第6章第2節Ⅰ
6. 遺構の写真撮影は山本が行ない、遺構図版の作成は、嘱託職員久保浩一郎と山本が行なった。
7. 出土遺物の図化・図版作成は、田中・宮崎・嘱託職員日聖祐輔・久保と山本が行い、同写真撮影は、田中・宮崎・久保・山本が行なった。
8. 本書に掲載した須恵器の遺物実測図および写真は、株式会社イビソクに委託し、作成したものを一部改変したものである。
9. 本書に掲載した遺跡周辺の現況測量図は、株式会社国土開発センターに、遺構図および地形測量図は、平和測量株式会社に委託し、作成したものを一部改変したものである。
10. 藤巻多珍坊遺跡に係わる成果発表のうち、本書との齟齬がある場合は、本書をもって訂正する。
11. 本書に掲載した遺物ならびに調査に際して作成した写真・図面は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
12. 本書の挿図の縮尺は、挿図ごとに記す。
13. 本書における水系レベルの標高は、海拔高を示し、単位はmを使用する。方位は、地形図に真北、遺構図に座標北を用いる。座標は、国家座標第Ⅳ座標系に基づく。
14. 試掘・発掘調査に際しては、次の方々および機関にご協力を頂いた。
永平寺町藤巻地区・永平寺町教育委員会
15. 本書の執筆に当たっては、次の方々に有益なご指導・御助言を頂いた（敬称略・五十音順）。
岩田隆・工藤俊樹・鈴木篤英・月輪泰・富山正明・西田由美子・堀大介・水野和雄・水村伸行・望月精司
16. 発掘調査は、地元の方々の参加・ご協力を得た。遺物整理は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター整理作業員があたった。

目 次

	頁
第1章 調査経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	2
第3節 遺物整理	3
第4節 現況測量	3
第2章 遺跡の位置と周辺環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 I地区の概要	9
第1節 層序	9
第2節 遺構分布	11
第3節 遺物出土状況	11
第4章 I地区の遺構と遺物	13
第1節 遺構	13
第2節 遺物	30
第5章 II地区の概要	35
第1節 層序	35
第2節 遺構分布	36
第3節 遺物出土状況	37
第6章 II地区の遺構と遺物	39
第1節 遺構	39
第2節 遺物	59
第7章 まとめ	85
第1節 須恵器窯	85
第2節 中世遺構	85

図 版 目 次

対応挿図

図版第 1	遺跡	(1) 遺跡遠景	1
		(2) 調査区全景	1
図版第 2	Ⅱ地区 遺構	(1) 竈 1・2完掘状況	26~28
		(2) 竈 1 遺物出土状況	26
図版第 3	Ⅱ地区 遺構	(1) 竈 1 断ち割り状況	26
		(2) 竈 3 完掘状況	30
図版第 4	Ⅱ地区 遺物	(1) 灰原 3 出土遺物	47・50
		(2) 灰原 1・2 出土特殊遺物	55
図版第 5	I地区 遺構	(1) 掘立柱建物 1・2、礎石建物 1 検出状況	10~13
		(2) 掘立柱建物 1 検出状況	10・11
図版第 6	I地区 遺構	(1) 礎石建物 1 検出状況	13
		(2) 平坦面 5 遺構検出状況	17・18
図版第 7	I地区 遺構	(1) 礎石列 1 検出状況	9
		(2) 石列 2 検出状況	9
		(3) 掘立柱建物 1 柱穴 2 検出状況	10
		(4) 掘立柱建物 1・溝 1 検出状況	10
		(5) 溝 1 土層堆積状況	10
		(6) 溝 1 土層堆積状況	10
		(7) 土坑 1 半載状況	11
		(8) 土坑 2 半載状況	11
図版第 8	I地区 遺構	(1) 土坑 6 確認状況	11
		(2) 掘立柱建物 2 柱穴 1 半載状況	12
		(3) 掘立柱建物 2 柱穴 2 半載状況	12
		(4) 掘立柱建物 2 柱穴 3 半載状況	12
		(5) 掘立柱建物 2 柱穴 4 半載状況	12
		(6) 掘立柱建物 2 柱穴 5 半載状況	12
		(7) 掘立柱建物 2 柱穴 6 半載状況	12
		(8) 掘立柱建物 2 柱穴 7 半載状況	12
図版第 9	I地区 遺構	(1) 掘立柱建物 2 柱穴 8 半載状況	12
		(2) 掘立柱建物 2 柱穴 9・10半載状況	12
		(3) 掘立柱建物 2 柱穴12半載状況	12
		(4) 掘立柱建物 2 柱穴13半載状況	12
		(5) 掘立柱建物 2 柱穴14半載状況	12
		(6) 掘立柱建物 2 柱穴15半載状況	12

		(7) 掘立柱建物 2 柱穴16半載状況	12
		(8) 溝 2 土層堆積状況	10・12
図版第10	I 地区	遺構	
		(1) トレンチ 3 土層断面	8・14
		(2) ビット列 3 ビット16遺物出土状況	18
		(3) ビット列 3 ビット17遺物出土状況	18
		(4) 礎石建物 2 ビット13半載状況	17
		(5) 礎石建物 2 ビット14半載状況	17
		(6) 柱穴列 2・3 検出状況	15
		(7) 土坑 7 検出状況	16
		(8) 土坑 8 検出状況	16
図版第11	II 地区	遺構	
		(1) 窯 1・2 確認状況	25
		(2) 窯 1・2 および 灰原 1・2 完掘状況	26~29
図版第12	II 地区	遺構	
		(1) 窯 1・2 完掘状況	26~28
		(2) 窯 1 完掘状況	26
		(3) 窯 2 完掘状況	27・28
図版第13	II 地区	遺構	
		(1) 窯 3 および 灰原 3 完掘状況	30・31
		(2) 窯 3 完掘状況	30
図版第14	II 地区	遺構	
		(1) 窯 1 遺物出土状況	26
		(2) 窯 1 遺物出土状況	26
		(3) 窯 1 舟底状ビット土層堆積状況	26
		(4) 窯 1 排煙口検出状況	26
		(5) 窯 1 排煙口断ち割り状況	26
		(6) 窯 2 遺物出土状況	28
		(7) 窯 2 焼成部土層堆積状況	28
		(8) 窯 2 舟底状ビット土層堆積状況	28
図版第15	II 地区	遺構	
		(1) 窯 2 窯背部土坑土層堆積状況	27・28
		(2) 窯 3 燃焼部遺物出土状況	30
		(3) 窯 3 燃焼部遺物出土状況	30
		(4) 窯 3 焚口・灰溜め土坑土層堆積状況	30
		(5) トレンチ 5 土層堆積状況	31
		(6) 自然流路内灰原堆積状況	31
		(7) 灰原 3 遺物出土状況	31
		(8) 灰原 3 遺物出土状況	31
図版第16	II 地区	遺構	
		(1) 石垣 1 検出状況	34
		(2) 石垣 1・平坦面 2 検出状況	34
図版第17	II 地区	遺構	
		(1) 石垣 2 検出状況	35
		(2) 石垣 3 検出状況	36
図版第18	II 地区	遺構	
		(1) 落し穴 1 半載状況	32

	(2) ビット 2 半載状況	32
	(3) ビット 3 半載状況	32
	(4) トレンチ 2 西側土層堆積状況	24
	(5) 礎石 1 検出状況	34
	(6) 石垣 2 断ち割り状況	35
	(7) 石垣 3 検出状況	36
	(8) 石垣 3 断ち割り状況	36
図版第19	Ⅱ地区 遺物 (須恵器)	38
図版第20	Ⅱ地区 遺物 (須恵器)	38・39
図版第21	Ⅱ地区 遺物 (須恵器)	38～42
図版第22	Ⅱ地区 遺物 (須恵器)	43
図版第23	Ⅱ地区 遺物 (須恵器)	43・44
図版第24	Ⅱ地区 遺物 (須恵器)	44・45
図版第25	Ⅱ地区 遺物 (須恵器)	45・46
図版第26	Ⅱ地区 遺物 (須恵器)	46・47
図版第27	Ⅱ地区 遺物 (須恵器)	48～50
図版第28	Ⅱ地区 遺物 (須恵器)	51～53
図版第29	Ⅰ地区 遺物 (土師質皿・陶磁器)	19
図版第30	Ⅰ地区・Ⅱ地区 遺物 (土師質皿・陶磁器)	20・56
図版第31	Ⅰ地区・Ⅱ地区 遺物 (陶磁器・縄文土器・石器・石製品)	19～22・56・57

挿 図 目 次

	頁
第1図 藤巻多珍坊遺跡位置図 (縮尺 1 : 5,000)	1
第2図 現況測量図および調査区割り図 (縮尺 1 : 1,000)	4
第3図 福井県における藤巻多珍坊遺跡位置図 (縮尺 1 : 2,000,000)	5
第4図 遺跡周辺の地形模式図 (縮尺 1 : 100,000)	5
第5図 周辺の遺跡分布図 (縮尺 1 : 25,000)	7
第6図 Ⅰ地区 主要遺構配置図 (縮尺 1 : 200)	10
第7図 Ⅰ地区 平坦面 1 上層面遺構配置図 (縮尺 1 : 200)	11
第8図 Ⅰ地区 トレンチ 1～4 土層断面図 (縮尺 1 : 100)	12
第9図 Ⅰ地区 平坦面 1 上層面遺構実測図 (縮尺 1 : 80)	14
第10図 Ⅰ地区 掘立柱建物 1 実測図 (縮尺 1 : 40・1 : 80)	16
第11図 Ⅰ地区 土坑 1～6、糞集中 1～3 実測図 (縮尺 1 : 40)	17
第12図 Ⅰ地区 掘立柱建物 2 実測図 (縮尺 1 : 80)	20

第13図	I地区	礎石建物1実測図(縮尺1:80)	22
第14図	I地区	平坦面3遺構実測図(縮尺1:40・1:80)	23
第15図	I地区	平坦面4・5遺構実測図(縮尺1:40・1:80)	25
第16図	I地区	土坑7・8実測図(縮尺1:40)	27
第17図	I地区	平坦面5遺構実測図(縮尺1:40・1:80)	28
第18図	I地区	ピット列3、ピット18・19実測図(縮尺1:40)	29
第19図	I地区	出土土器実測図1(縮尺1:3)	31
第20図	I地区	出土土器実測図2(縮尺1:5)	32
第21図	I地区	出土土器実測図3(縮尺1:3)	33
第22図	I地区	出土石製品実測図(縮尺1:3・1:5)	34
第23図	II地区	谷部主要遺構配置図(縮尺1:200)	36
第24図	II地区	トレンチ1～3土層断面図(縮尺1:100)	37
第25図	II地区	山裾斜面部主要遺構配置図(縮尺1:200)	38
第26図	II地区	竈1実測図(縮尺1:50)	40
第27図	II地区	竈2実測図1(縮尺1:50)	43
第28図	II地区	竈2実測図2(縮尺1:50)	45
第29図	II地区	灰原1・2(トレンチ6～9)土層断面図(縮尺1:100)	48
第30図	II地区	竈3実測図(1:50)	50
第31図	II地区	灰原3(トレンチ4・5)土層断面図(縮尺1:100)	52
第32図	II地区	落とし穴1、ピット2～5実測図(縮尺1:40)	53
第33図	II地区	土坑1実測図(縮尺1:40)	54
第34図	II地区	石垣1実測図(縮尺1:80)	55
第35図	II地区	石垣2実測図(縮尺1:80)	57
第36図	II地区	石垣3実測図(縮尺1:80)	58
第37図		出土地点別器種構成図	60
第38図	II地区	竈1出土須恵器実測図(縮尺1:3)	61
第39図	II地区	灰原1・2出土須恵器実測図1(縮尺1:3)	63
第40図	II地区	灰原1・2出土須恵器実測図2(縮尺1:3)	64
第41図	II地区	灰原1・2出土須恵器実測図3(縮尺1:4)	65
第42図	II地区	灰原1・2出土須恵器実測図4(縮尺1:4)	66
第43図	II地区	竈3出土須恵器実測図1(縮尺1:3)	68
第44図	II地区	竈3出土須恵器実測図2(縮尺1:3)	69
第45図	II地区	竈3出土須恵器実測図3(縮尺1:3)	70
第46図	II地区	竈3出土須恵器実測図4(縮尺1:3)	71
第47図	II地区	竈3出土須恵器実測図5(縮尺1:3)	72
第48図	II地区	竈3出土須恵器実測図6(縮尺1:3)	74
第49図	II地区	竈3出土須恵器実測図7(縮尺1:4)	75
第50図	II地区	竈3出土須恵器実測図8(縮尺1:4)	76

第51图	Ⅱ地区	窟3出土須惠器実測図9 (縮尺1:4)	77
第52图	Ⅱ地区	窟3出土須惠器実測図10 (縮尺1:4)	78
第53图	Ⅱ地区	窟3出土須惠器実測図11 (縮尺1:8)	79
第54图	Ⅱ地区	出土焼成具実測図 (縮尺1:3)	80
第55图	Ⅱ地区	灰原1・2出土特殊品実測図 (縮尺1:2)	81
第56图	Ⅱ地区	出土器土器実測図 (縮尺1:3・1:5)	83
第57图	Ⅱ地区	出土石器・石製品実測図 (縮尺1:1・1:3)	84

表 目 次

	頁	
第1表	出土地点別製品数一覽表	60
第2表	出土土器觀察表1 (須惠器)	87
第3表	出土土器觀察表2 (中世土器)	91
第4表	出土石器・石製品觀察表	92

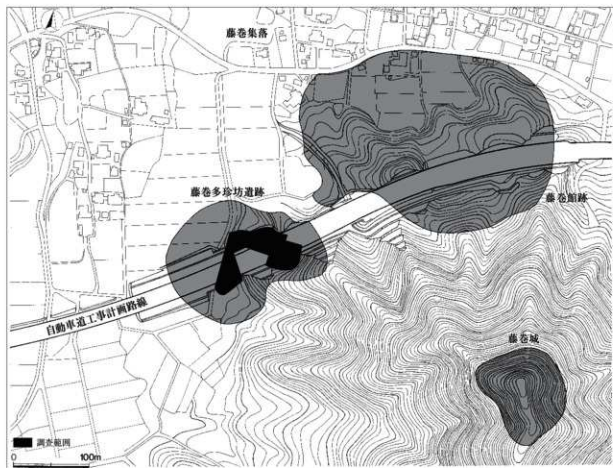
第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯（第1・2図）

藤巻多珍坊遺跡は、福井県吉田郡永平寺町藤巻字多珍坊に所在する、古代の須恵器窯跡、中世の館跡および坊跡を主体とする遺跡である。

昭和62年の高規格幹線道路網整備計画の一環として、県内においても中部縦貫自動車道の整備が具体化した。中部縦貫自動車道は、北陸自動車道福井北インターチェンジを起点として、福井市から長野県松本市に至る、総延長約160kmにおよぶ、一般国道158号の自動車専用道路である。県内では、まず、「永平寺大野道路」と呼称される、福井市玄正島町の福井北インターチェンジから大野市中津川に至る延長26.4kmの区間において事業着手することとなった。これに先立ち、「永平寺大野道路」区間内において、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文センターとする）による、遺跡詳細分布調査が実施され、平成6年度には工事計画路線内の遺跡分布状況が確定した。これにより、従来の周知遺跡以外にも、本遺跡を含めた新たな遺跡が発見された。その後、工事計画路線内に分布する遺跡について、正確な範囲や遺存状況、および時期などの具体的な内容把握のため、試掘調査を行うこととなった。

本遺跡の試掘調査は、県埋文センターにより、平成12年度に実施された。試掘調査範囲は、工事計画路線外に位置する土塁と堀に近隣した谷部および山裾部と、丘陵尾根を挟んで北東側の谷部および山裾斜面部、さらに両谷部の西側下位に位置する水田部分を対象とした。調査の結果、水田部分は近年の土



第1図 藤巻多珍坊遺跡位置図（縮尺1：5,000）

地改良などにより上面が削平されており、遺構・遺物ともに検出されなかったが、丘陵尾根を挟んだ両谷部および山裾部において、古代の窯跡に関連する灰原と須恵器片、および中世の柱穴と越前焼片などの遺構と遺物が検出された。さらに、土層断面の確認とともに、時代が異なる遺構や遺物の検出から、遺構面が2面存在すると想定された。

この結果を受け、国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所と福井県教育庁文化課および県埋文センターが協議を行い、記録保存のための緊急発掘調査が行われることとなった。調査範囲は、試掘調査範囲のうち、水田部分を除き、中央に位置する丘陵尾根部を境として北東側の谷部とその斜面部（Ⅰ地区）、南側の谷部とその斜面部（Ⅱ地区）となった。面積は3,650㎡を測るが、遺構面が上層、下層2面存在するため、調査面積は7,300㎡となり、発掘調査は、平成14・15年度の2ヵ年で行うことに決定した。

本格調査は、平成14年7月から開始した。調査経過により、Ⅰ地区南東側の谷部斜面の上位に平坦部の存在が確認されたため、急遽、この1,000㎡の面積を対象として追加の試掘調査を行った。その結果、遺構は確認されなかったが、縄文土器が出土した。このため、再度協議を行い、この平坦部を調査範囲（Ⅲ地区）とし、平成15年度にⅠ・Ⅱ地区とあわせて調査を行うこととなった。よって、平成14・15年度にわたり実施した発掘調査総面積は延べ8,300㎡となった。

第2節 調査経過

藤巻多珍坊遺跡の調査は、平成14年7月から開始した。以前から、工事計画路線内の山麓部で、国内希少野生動物植物種とされ、政令指定保護対策を受ける「クマタカ」などの猛禽類の飛翔が確認されていた。重機やベルトコンベアーなどの発掘機材の騒音により、冬季～春季にかけて行う果営行為に直接影響を及ぼす可能性があるため、年度当初からの発掘調査は見送られた。そのため、次年度の平成15年度も7月開始となった。

発掘調査区は、中央に舌状に伸びる丘陵を境として、平面が北西方向に弧をもつ「C」字状となる。このうち、北半部分の地形は、丘陵に東側と南側に囲まれた幅の広い谷部と斜面部からなる。谷部は、平面が東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、西側に向かい開口する。南半部分の地形は、丘陵に北東部が遮られる谷部と斜面部からなる。遺跡の内容についても、南半部分は調査範囲の縁辺部に中世の土塁・堀が存在し、試掘調査結果からも、中世の館跡に関連する施設とともに古代の須恵器窯の存在が予想された。対して、北半部分は、試掘調査時に柱穴などの遺構と遺物が検出されたが、南半部分と同様の遺構が広範囲に連続して分布する可能性が低いものと想定された。このため、地形や場所とともに遺跡の内容も異なると判断し、調査範囲のうち、北半部分をⅠ地区、南半部分をⅡ地区と区分して調査を行った。また、Ⅰ地区南東部斜面上の平坦面については、便宜上、Ⅲ地区と呼称して調査を行った。

調査区割りは、一辺10mとし、任意の方向で西から東へA～N区、北から南へ1～9区を配した。平成14年度の調査は、7月3日～12月26日の期間で実施した。前半は、主に表土剥ぎや水田耕作土の除去にあたり、後半は主にⅠ地区の調査を重点的に行った。以下、月ごとに実施した主要な作業内容を記述する。

7月 調査区内全域で下草刈りや清掃。現況測定の空中写真撮影。調査区全域の表土および近現代水田耕作土の除去。基準杭・調査区割杭の設定。調査区全域に排水溝を掘削。

8月 調査区全域で遺構面の再確認のためトレンチ掘削。Ⅱ地区で窠1～3を確認。Ⅰ地区で近世水田耕作土の除去。Ⅲ地区の試掘調査。

9月 Ⅰ地区で近世水田耕作土の除去。平坦面1上層面の遺構精査・遺構掘削。

10月 Ⅰ地区の平坦面2～5の遺構精査および掘削。Ⅰ・Ⅱ地区境部の山裾斜面表土剥ぎ。

11月 Ⅰ地区の平坦面4・5の遺構掘削。トレンチ4を西側に拡張。Ⅱ地区山裾斜面表土剥ぎ。

12月 Ⅰ・Ⅱ地区境部の山裾斜面遺構精査および掘削。落し穴・ピット群掘削。越冬準備。

平成15年度の調査は、7月2日～12月24日の期間で行った。Ⅱ地区を重点的に調査し、前半は中世館跡、後半は古代の須恵器窯の調査を行った。以下、月ごとに実施した主要な作業内容を記述する。

7月 Ⅱ地区の近世・近代盛土の除去。トレンチを再設定し掘削。

8月 Ⅱ地区の石垣1～3の検出および各平坦面の遺構精査および掘削。

9月 Ⅰ・Ⅱ両地区で中世上層面の空中写真測量の実施。石垣解体とともに中世造成土の掘削除去。

10月 Ⅱ地区の窠1～3、灰原1～3の掘削。Ⅰ地区平坦面1下層面遺構精査・掘削。

11月 Ⅱ地区の窠1～3、灰原1～3の掘削終了。Ⅰ・Ⅱ地区で中世下層面・古代面の空中写真測量の実施。窯跡・灰原・自然流路の断ち割り。

12月 Ⅲ地区で遺構精査。空中写真測量の実施。窠1・2、灰原1・2の補足図面の作成。

第3節 遺物整理

本遺跡の調査で出土した遺物は、コンテナバットにして60箱がある。その大半は窯跡から出土した古代（8世紀後半～9世紀初頭）の須恵器である。続いて、中世（16世紀後半～17世紀初頭）の土師質皿や陶磁器および石製品が9箱あり、縄文土器や石器、近世の遺物などが1箱ある。

遺物整理は、発掘調査終了後の翌年、平成16年度から開始した。以下、年度ごとに実施した主な作業について記述する。

平成16年度 洗浄・注記・仕分け作業を行った。

平成17年度 接合・石膏作業を行った。窠・灰原出土品が主体を占めるため、多くの器形復元個体が得られた。

平成18年度 須恵器を中心に分類を行い、遺構トレースを行った。器形復元した須恵器のうち、200点については、実測・トレース・写真撮影の外部委託を行った。

平成19年度 その他の遺物の写真撮影を行い、原稿を執筆して報告書を作成した。

なお、遺物整理は順調に進捗していたが、平成16年度の「福井豪雨」により、整理作業場所であった県埋文センター本部が被災したため、一部の出土資料や図面類が紛失あるいは消失した。特に窯跡灰原出土須恵器については、所属窯跡や層位などが不明となった資料も少なくない。また、古代の自然流路から出土した柱材や木部材、中世の掘立柱建物の柱材なども流出し、出土遺物の一部については、実測図や写真の提示が行えなかった。このため、次章以降の遺構・遺物の説明に際しては、発掘調査当時の認識や所見による場合がある。

第4節 現況測量（第2図）

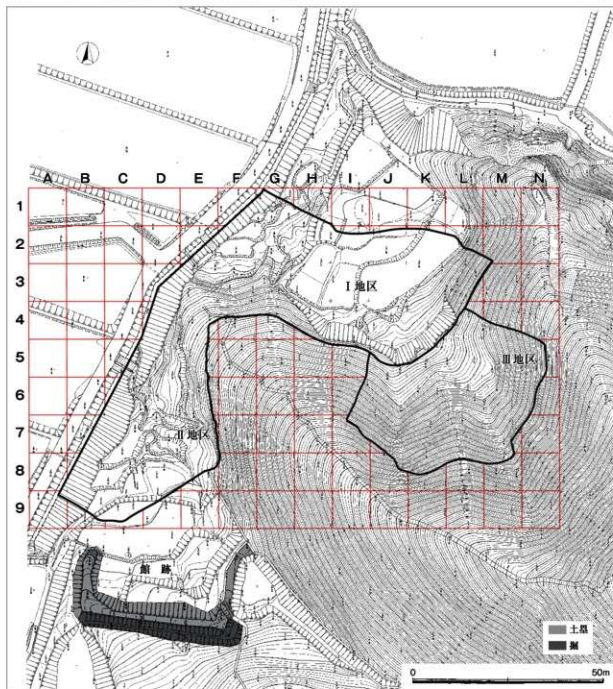
平成14年度に、調査区を含めた30,600㎡の範囲において現況測量を行った。これにより、調査区外に現存する土塁と堀および館内部の平坦面などの現状規模や形態が判明した。後世の削平やかく乱を受けている可能性もあるが、以下、現況測量において確認できた主な遺構について説明を行なう。

土塁 残存する土塁の平面は、隅部がほぼ直角に屈折し、「コ」字状を呈す。北側を開口する。南北方向東辺で丘陵斜面と連結し、西辺は削平のため消失する。東西方向で約40m、南北方向東辺で約22mを測る。標高は約111.2mで、北側の館内部の平坦面との比高差は約2mを測る。

堀 土塁外側（南側）に位置する。南北方向西側では削平のため堀外側の壁面が消失する。断面形は底面幅が狭い「V」字状を呈すと想定され、上面幅は約3～4m、深さは土塁頂部から約2.7mを測る。埋土の堆積があるため、実際は3m以上の深さを有するものと考えられる。

平坦面 土塁内側（北側）には、幅約5mを測り、「L」字状に入り組んだ形態を示す、狭い平坦面が2ヶ所確認できる。両平坦面の比高差は約2mである。この北側下方には、館内部でもっとも面積が広く、Ⅱ地区で北側端部を検出した平坦面1が存在する。

(山本)



第2図 現況測量図および調査区割り図(縮尺1:1000)

第2章 遺跡の位置と周辺の環境

第1節 地理的環境（第1図～第4図）

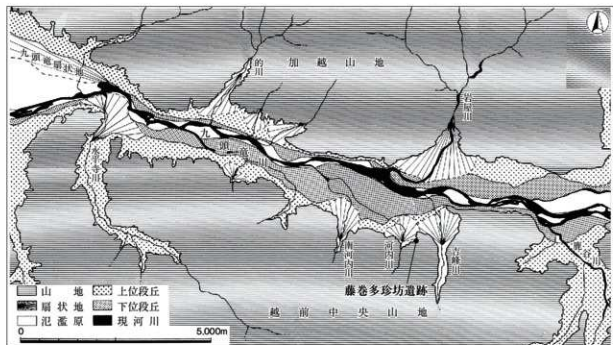
藤巻多珍坊遺跡は、福井県北部の永平寺町藤巻に所在する。福井県は、敦賀市と南越前町の間に位置する標高628mを測る木ノ芽山峠を境として、北部を嶺北地方、南部を嶺南地方として分けて呼称される。遺跡の所在する永平寺町は、嶺北地方の北部中央に位置する。

本遺跡より約1km北方には、大野市から坂井市三国町に到る、一級河川である九頭竜川が西流する。この九頭竜川中流域には、北部に加越山地、南部に越前中央山地に挟まれた、幅約15kmの地溝が存在する。この地溝が志比地溝であり、西側の坂井平野と東側の勝山盆地を連結し、東西距離は約13kmを測る。志比地溝内の九頭竜川両岸には、河岸段丘が発達し、標高約40～50mの下位段丘、標高50～70mの上位段丘の2段に大別される。また、九頭竜川には、加越山地からの約川・岩屋川などが、越前中央山地から吉峰川・河内川・南河内川・永平寺川などが合流する。これら、両山中から流出する中小河川は、下流域の上位段丘上に小規模な扇状地を形成成する。

本遺跡は、河内川下流域右岸の山麓部に所在する、標高279mを測る通称向山の北西麓部に位置する。この向山からは多くの低丘陵群が派生し、各丘陵間は谷となる。本遺跡が位置する北西麓部においても、さらに丘陵が派生し、丘陵長や幅の短い北側丘陵と尾根幅が狭く舌状に突出する西側丘陵に分岐する。この両丘陵間に存在し、西側に開口する幅広い谷部および斜面部に立地するのがⅠ地区・Ⅲ地区であり、西側丘陵の南方谷部および斜面部に立地するのがⅡ地区となる（第2図）。



第3図 福井県における藤巻多珍坊遺跡位置図
(縮尺1:2,000,000)



第4図 遺跡周辺の地形模式図（縮尺1:100,000）

第2節 歴史的環境（第5図）

藤巻多珍坊遺跡の所在する永平寺町西部（旧上志比村）では、従来からの表面採集や平成元年度～6年度に行われた県内全域に及ぶ詳細分布調査などにより、周知となった遺跡が多数確認されている。しかし、発掘調査件数も少なく、具体的な内容については不明であった。その後、平成6年に行われた、中部自動車道「永平寺大野道路」建設に伴う詳細分布調査、および平成10年度以降の発掘調査の増加により、新たな遺跡の発見とともに、遺跡の内容についても詳細に把握されることとなった。そのため、ここでは、これまでの成果¹⁾をふまえ、本遺跡の周辺に所在する遺跡についての概要を時代ごとに記す。

縄文時代 縄文時代を主体とする遺跡はほとんどない。散布地を含め、土器や石器などの遺物が少量出土する遺跡が大半を占める。その多くは、狩猟採集などの生業活動に伴うと考えられる、いわゆる「キャンプサイト」的な小規模遺跡であり、山麓部とは異なる集落立地が予想される。藤巻館遺跡（第5図3）では、尾根部に立地する縄文時代晩期後半～弥生時代中期前半にかけての小規模集落が調査された。そのほか、後期前葉の単独埋壘1基のほかに、早期後半・中期前葉の遺物が出土している。栗住波谷口遺跡（23）では、晩期後半の土坑を1基検出した。内部から1個体分の土器が出土した。包含層からは環状石斧も出土している。そのほか、発掘調査が行われた遺跡では、市荒川興行寺遺跡（4）で、土器や有蓋尖頭器をはじめとする石器、竹原弁財天遺跡（14）では中期前葉の土器や石器、浅見金道口遺跡（38）では黒曜石製の石匙などの石器、浅見堂ノ北遺跡（39）では土器と石器が出土している。

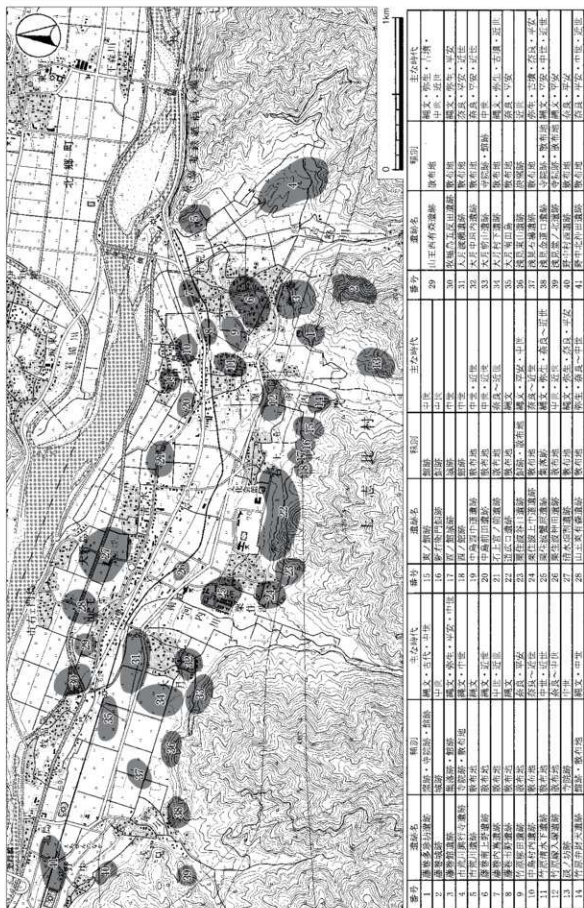
弥生時代 大半が遺物散布地としての遺跡の把握に止まる。縄文時代晩期後半～弥生時代中期前半の堅穴住居を検出した藤巻館遺跡（3）以外には、山麓部での生活の痕跡はほとんど認められない。そのため、主要な集落立地は低位段丘上である可能性が高い。

奈良・平安時代 山麓部での寺院跡や祭祀関連遺跡の存在が明確になった。しかし、一般集落の様相は不明であり、山麓部における遺物の少量出土の性格についても今後の課題である。浅見金道口遺跡（38）では、8世紀後半～9世紀にかけての多量の須恵器・土師器とともに、「寺」・「☆」などの墨書須恵器・奈良三彩陶器・硯・稜碗なども出土した。遺構は大規模な掘立柱建物1棟であった。遺跡の性格は、寺院跡などの祭祀に関連するものと想定されている。なお、出土した多量の須恵器は、主体となる時期も符合し、胎土・焼成などからも、本遺跡で検出した窯跡の製品である可能性が高い。浅見堂ノ北遺跡（39）では、8世紀後半～9世紀の須恵器・土師器とともに方形石組遺構や土坑・柱穴などが検出されている。須恵器鉄鉢・甌などの出土から寺院・祭祀関連の遺跡と考えられている。出土須恵器は本遺跡で検出した窯跡の製品である可能性が高い。そのほか、藤巻館遺跡（3）で9世紀の須恵器が包含層から若干出土している。該当する遺構はピット群などがある。栗住波谷口遺跡（23）で9世紀の須恵器・土師器が中世の土層下の包含層から若干出土している。

中世 中部縦貫自動車関連の発掘調査のなかで、主体となる時代であり、もっとも調査事例が多い。一般集落とは性格が異なる寺院跡や館跡を中心とする。これらは、平坦面や土塁、堀などの立体的な構築物が残存するものが多く、伝承や文献史料による推定地とされる場合もある。

寺院跡には、中世浄土真宗寺院跡の伝承地である市荒川興行寺遺跡（4）のほか、本遺跡と同様に平泉寺末坊の伝承地とされる大月前山遺跡（33）があり、その他、調査は行われていないが、土塁と堀が現存する辰ノ坊跡（13）がある。

館跡あるいは屋敷跡には、市荒川興行寺遺跡（4）、藤巻館遺跡（3）、竹原弁財天遺跡（14）、栗



第5図 周辺の遺跡分佈図 (縮尺1:25,000)

住波谷口遺跡(23)、東ノ館跡(15)、新右衛門館跡(16)、西ノ館跡(18) 大月前山遺跡(33)がある。いずれも山裾部や丘陵間の谷部に立地し、土塁・堀・石垣などを伴う。時期は、おおむね15世紀～17世紀初頭の時間幅に収まる。このうち、藤巻館遺跡(3)は文献史料により館主や所在地が記された数少ない館跡である。

上記の発掘調査が行われた寺院跡や館跡の遺跡では、掘立柱建物や礎石建物が多数検出され、遺構面も2面以上存在する場合がある。しかし、建物自体の性格やその存続期間といった点については、出土遺物が少ないという資料的な制約もあり、明確に把握し得た事例は少ない。この点に関しては、現在も発掘調査が行われている周辺遺跡を含め、総合的な検討を行なうことにより、永平寺町西部という地域的な枠組みの中で新たな位置づけが与えられ、より具体化するものと考えられる。

その他、城跡には、本遺跡の南東に位置する通称向山の山頂に藤巻城(2)がある。山城であり、堀切が確認されている。詳細な時期とともに、山裾部に位置する本遺跡や藤巻館遺跡(3)との関連についても不明である。

なお、一般的な集落遺跡の調査が行われていないため、集落立地や時期的動態などの把握がなされていない。寺院や館といった施設と強く関連するため、今後の調査事例の増加に期待される。(山本)

注

- 1) 永平寺町西部の旧上志比村内に所在する遺跡の発掘調査事例は、近年の中部縦貫自動車道建設事に伴うものが大半を占める。そのため工事計画路線内の大半が山麓部という、きわめて限られた立地条件下での調査であり、発掘成果が直ちに各時代における周辺地域の一般的な特徴を示すものとは限らない。

参考文献

- 青木隆佳編 2007「栗住波谷口遺跡」中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査6 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 上志比村 1978「上志比村史」
- 河村健史 2006「竹原弁財天遺跡」『年報20 平成16年度 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター』
- 工藤俊樹編 1988「鳴鹿手島遺跡」福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 鈴木篤英編 2006「浅見金道口遺跡・三重山城跡・浅見東山遺跡」中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 月輪 泰福 2004「市荒川興行寺遺跡」中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査2 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 月輪 泰 2006「大月前山遺跡」『年報20 平成16年度 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター』
- 月輪 泰 2006「大月前山遺跡」・「東ノ館跡・新右衛門館跡」『第22回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 月輪泰・宮崎認編 2007「藤巻館遺跡」中部縦貫自動車道建設事業に伴う調査5 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 日本地誌研究所編 1970『日本地誌』第10巻
- 野路昌嗣 2006「西ノ館跡・西ノ館城跡」『第22回福井県発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 福井県教育委員会 1993「福井県遺跡地図」
- 宮崎 認 2006「浅見堂ノ北遺跡」『第22回福井県発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 宮崎 認 2006「竹原弁財天遺跡」『第22回福井県発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

第3章 I地区の概要

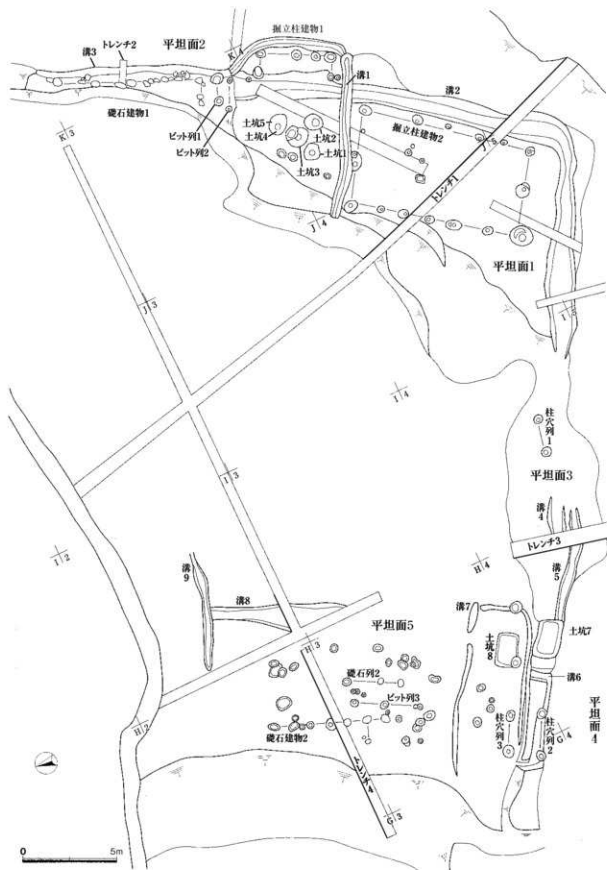
第1節 層序(第6～8図)

I地区の大半は、現状で水田となっていた。この水田は出土遺物などから近代と近世に大きく2時期に分けられ、水田区画の変更に伴い、耕作土あるいは床土のかさ上げが認められた。特に山裾部のJ3区・J2区で顕著に認められ、上下面で最大0.8mの厚さを測る。この水田は区画ごとに段状となり、西側に向かい低くなる。平坦面5の西端部では0.3m程度の厚さとなる(第8図トレンチ4-1層)。黒褐色土の床土や灰黄褐色土の区画畦には、黄褐色土などの地山ブロックが多く含まれており、かさ上げや造成の際に、山裾部の平坦面1～3の掘削が行われたと考えられる。

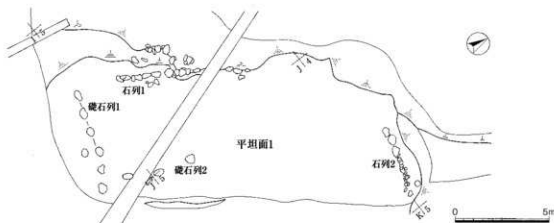
山裾直下に位置する平坦面1～4は、斜面部を削平して造成される。そのため、斜面部は急傾斜となり、平坦面2の東側および平坦面1西端～平坦面3にかけては、丘陵基盤層である山礫層や岩盤層が露出する。これに対し、丘陵基根間の谷部にあたる平坦面1やその上位のⅢ地区では、谷埋没土である山礫を含む黒褐色土・黒色土(トレンチ1-29～45層)が斜面部に厚く堆積する。I地区の大半を占める平坦面5では、水田耕作土直下が地山面となり、北方に緩やかに傾斜する。旧地形は、平坦面1西端～平坦面3の斜面部に露出する丘陵基盤層からの延長である黄色砂質土(トレンチ4-9層)が、H3・I3杭を両端として北方に尾根状に張り出している。この尾根状地形の東西両側は深く落ち込む谷となり、埋没土である黒色粘質土が厚く堆積する(トレンチ4-3～5層)。以上の平坦面1・5で認められる黒色粘質土には、丘陵基盤層である黄褐色土のブロックなどが混入しておらず、土質もほぼ均一である。このため、これら谷の埋没は、人為的ではなく、長期間におよぶ自然堆積によるものであると考えられる。遺物が出土しないことから時期は特定できないが、I地区において本格的に土地利用が開始される16世紀後半には、すでに埋没していたものと判断する。

I地区で検出した遺構確認面(以下、遺構面とする)は、平坦面1を除き1面のみである。

平坦面1(トレンチ1)では、遺構面を整地土上面に2面確認した。上層遺構面の整地土は、表土直下のぶい黄褐色土(7層)、黒褐色土(8～10・13層)、褐色土(11・12層)からなる。層厚は約0.5mを測り、ほぼ水平に堆積する。隣接する山裾斜面部の地山土を掘削し造成したと考えられ、下層の褐色土を除き、しまりや色調などが近似する。なお、北半部分は大きく削平を受けている(4層)。下層遺構面の整地土は、上層整地土直下にはほぼ水平に堆積し、灰褐色土(23・24層)、黄褐色土(25・27層)、黒褐色土(26・28層)からなる。層厚は北側で約0.4mを測る。上層と同様に、斜面部からの掘削土と考えられ、地山土と近似する。平坦面2(トレンチ2)では、遺構面を整地土上面および地山岩盤上で1面確認した。南半部分は山裾斜面の岩盤層が高く隆起しており、山裾を断面「L」字状に掘削して平坦面とする。北半部分はこの岩盤層が傾斜して低くなるため、整地土により水平に造成したものと考えられる。整地土は橙色土(8層)の単層からなる。層厚は最大0.2mである。極めて粒子が細かく、土質も均一であり、山裾斜面部に堆積する山礫を多く含む岩盤風化土ではないと判断される。整地土下には、旧地形谷部の埋没土である黒褐色土(9層)と旧谷地形の斜面部となる黄褐色土(10層)が堆積する。平坦面3・4(トレンチ3)では、整地土は検出できず地山面が遺構面となる。ただし、平坦面3は、検出した排水溝の深さが浅いことや、排水溝から斜面端部までに約1.2mの間隔があることから、上面が削平された可能性もある。



第6図 I地区 主要遺構配置図 (縮尺1:200)



第7図 I地区 平坦面1上層面遺構配置図(縮尺1:200)

第2節 遺構分布(第6・7図)

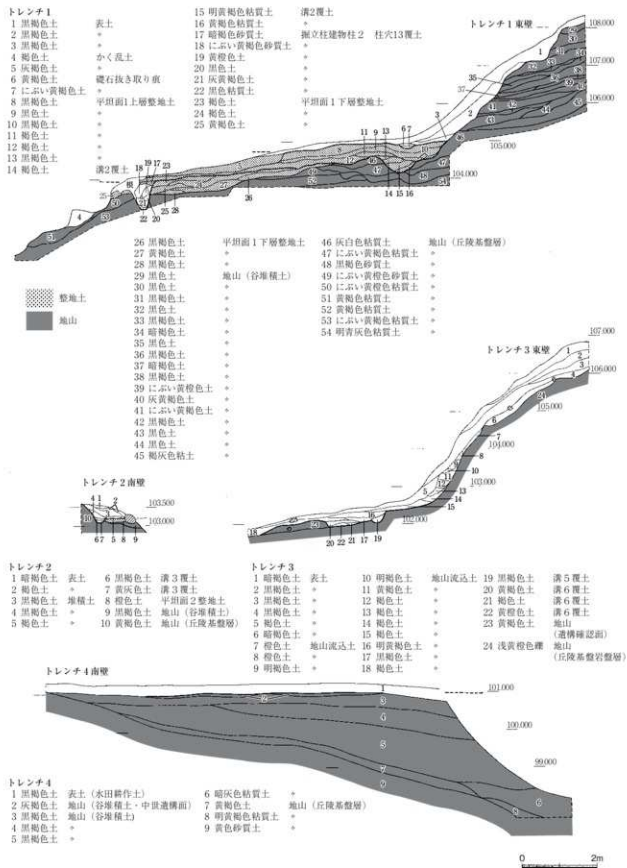
検出した遺構には、平坦面5ヶ所、掘立柱建物2棟、礎石建物2棟、柱穴列3列、礎石列1列、ピット列3列、石列2列、溝8条、土坑8基、柱穴およびピット46基がある。これらの遺構は水田により削平を受けた平坦面5の東半分を除き、各平坦面上に構築される。I地区全体の出土遺物から、おおむね16世紀後半～17世紀初頭の時間幅に収まるものと考えられる。しかし、各遺構間には、切り合い関係、遺構面の上下関係、主軸方向の差異などが認められることから、構築から廃絶までの存続期間において時間差や時期差を有すものと考えられる。

平坦面はI地区すべての山裾斜面部下に存在する。長軸方向をほぼ丘陵部に平行させ、直線的に造成を行うため、I地区全体の平面は、東西方向に長軸を持つ隅丸長方形を呈す。建物などの遺構は、おおむね平坦面の平面形態に沿って構築され、特に建物は主軸方向を同じくするものが多い。各平坦面には比高差があり、谷奥部の平坦面1がもっとも高く、順に平坦面3、平坦面2、平坦面4、平坦面5となる。残存する面積は、谷入り口部にある平坦面5がもっとも広く、平坦面2・3・4が狭い。平坦面3・4には明確な建物跡は検出しておらず、面積に相関した用途・性格差がうかがえる。

建物には、礎石建物と掘立柱建物がある。削平を受けているため、規模・配置・構成などが不明なものが多い。建物の全体規模が判明したものは、平坦面1の掘立柱建物2のみである。そのほか、今回柱穴列、礎石列、ピット列として扱った遺構には、建物あるいはこれに関連する施設の可能性がある。

第3節 遺物出土状況

出土遺物には、土師貫皿や越前焼や瀬戸・美濃などの国産陶器、青磁・染付けなどの輸入陶磁器のほかに、石硯、砥石、バンドコなどの石製品がある。おおむね16世紀後半～17世紀初頭にかけての時間幅を有す。出土量はコンテナバット3箱分と調査面積に対して極めて少ない。そのため、一般的な日常生活の場でない可能性や調査区外への廃棄行為が想定される。出土量の主体を占めるのが、表土や水田耕作土の出土遺物であり、遺構内出土遺物は少ない。また、遺構内出土遺物は、ピット列3など(ピット16・17・18)で出土した、地鎮祭りに伴うとされる完形の土師貫皿以外は、すべて破片で少量である。そのため、遺構に直接伴わず、埋土堆積中に流入した可能性が高く、出土遺物のみでは、その遺構の存続期間を正確に位置づけるには至らなかった。そのほか、K4区に位置する平坦面1の上位斜面部表土から、縄文時代後期中葉の土器片が若干出土した。Ⅲ区からの流れ込みと判断される。(山本)



第8図 I地区 トレンチ1～4土層断面図 (縮尺1:100)

第4章 I地区の遺構と遺物

第1節 遺構

I地区で検出した遺構は、主に建物とこれに関連すると考えられ、各平坦面において分離して捉えることができる。そのため、ここでは平坦面ごとに遺構の説明を行うこととする。

I 平坦面1とその遺構(第9～12図)

平坦面1はI4・I5・J3・J4区に位置する。西側部分を大きく削平される。Ⅲ地区下の斜面部を掘削して造成を行なう。南隅部を直角気味に整形することから、平面形は南北方向が長軸となる隅丸長方形を呈していたと考えられる。残存規模で南北辺11.6m、東西辺19.5mを測る。I地区のうち、最も標高が高く、上層面で104.5m、下層面で104.2mを測り、Ⅲ区との比高差は4.3mである。地山斜面部の掘削と整地土による造成が行なわれ、遺構面は整地土上面となり上下層2面存在する。下層面は斜面部直下の狭い範囲のみ地山となる。上層面では、礎石列1・2、石列1・2、焼土1を検出し、下層面では、掘立柱建物1・2、溝1・2などを検出した。なお、上層面には、下層面で建物跡に付随する排水溝が認められない。遺物は、上層遺構面の整地土および表土から出土した。破片を主体とするが、I地区の平坦面のなかで、もっとも出土量が多い。

(1) 上層面の遺構

礎石列1(図版第7、第9図)

平坦面1の南端に位置し、延長方向はN-86°-Wである。西側部は整地土ごと削平を受けており、本来はさらに延長していたと考えられる。礎石にはやや厚みのある0.3m大の楕円形の河原石を用い、約0.5m間隔で配置する。礎石の長軸方向と列方向は一致する。周辺には、同様な河原石が点在するが、かく乱を受け移動している可能性もあり、関連は不明である。遺物は周辺を含め出土していない。

礎石列2(第9図)

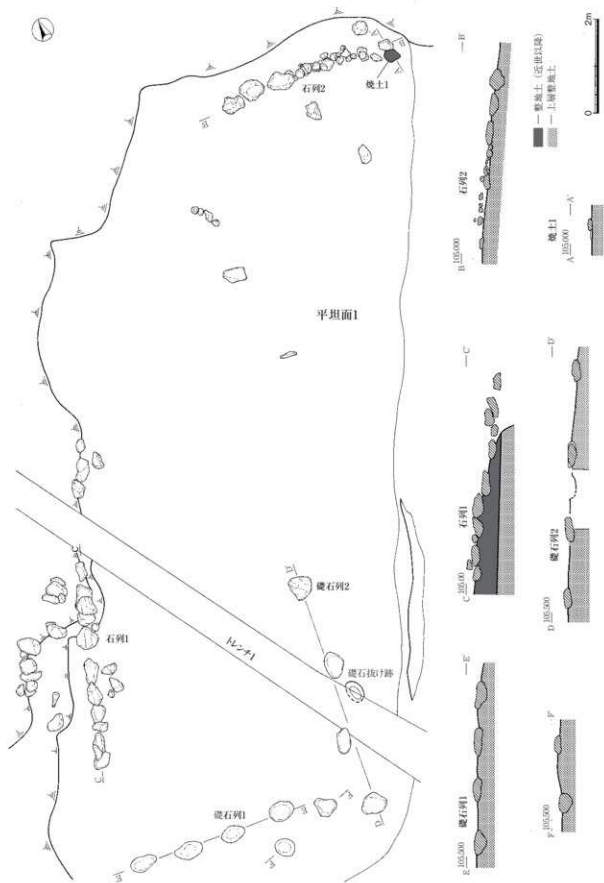
平坦面1の南端から中央に位置し、延長方向はN-7°-Eである。東側にさらに延長していた可能性がある。礎石には扁平な0.3m大の楕円形の河原石を用いるが、東端は山礫を用いる。並びに若干のずれが認められるが、約0.8m間隔で配置する。礎石列1とはほぼ直交するものの、礎石の間寸法が異なることや、隅部を共有しないことから、同一の建物を構成するとは考えにくい。その他、トレンチ1に接する部分で礎石の抜き取り跡と考えられるピットを検出したが、並びや間隔などの違いから関連しないものと考えられる。遺物は周辺を含め出土していない。

石列1(第9図)

平坦面1の西端に位置する。全長は3.5mを測り、延長方向はN-19°-Eである。東西両側にさらに延長していた可能性がある。周辺には、かく乱のため移動した礫が散在する。0.2m大の山礫を主に用いる。表土直下で検出したが、礎石列1の遺構面である整地土を削平したのちに構築される。遺物は周辺を含め出土していない。近世以降の比較的新しい時期の遺構である可能性が高い。

石列2(図版第7、第9図)

平坦面1の北東端に位置する。全長は1.9mを測り、延長方向はN-88°-Wである。西側にさらに延長していた可能性がある。西側の3カ所に0.3m大のやや扁平な山礫を礎石状に配すが、東側は0.1m程



第9図 I地区 平坦面1上層面遺構実測図 (縮尺1:80)

度の小山礫を密接して配す。東端部は山裾斜面部に接する。遺構面に沿って、西側に向かい傾斜して低くなる。礎石列1とは、ほぼ並行するもの並列せず、石列1とは直交しない。遺物は周辺を含め出土していない。山礫を用いて密接させる状態の類似点などから、石列1と近時する時期が想定される。

焼土1 (第9図)

石列2の東端に位置する。焼土範囲は直径0.16mの略円形を呈し、厚さは0.08mを測る。混入する炭化物は比較的少ない。遺構面である整地土が被熱赤色化したものと考えられる。焼土内からは遺物は出土していない。隣接する石列2の山礫には、被熱痕が認められないことから、石列2の構築時より時間的に先出する。礎石列1・2との時間的關係は不明である。

(2) 下層面の遺構

掘立柱建物1 (図版第5・7、第10図)

平坦面1の北東端に位置する。隣接する掘立柱建物2と同一の整地土上面で検出した。排水溝である溝1や西側の土坑群(土坑1～5)を付属する。東側部分以外は、遺構面が削平やかく乱を受けて傾斜しており、西側部分は東側部分と比べ、約0.5mの比高差がある。

柱穴は6基検出し、柱間は南北方向が2間、東西方向が0.5間となる。柱間寸法は南北列の0.5間が約0.5m、1間が約1.0mを測り、東西列の0.5間が約0.5mを測る。すべての柱穴の底部には、人頭大の扁平な河原石を根石として埋置する。根石の長径方向は南北列・東西列ともに柱列方向に沿う。柱穴3の根石は他のものと比べ小さい。各柱穴の深さはきわめて浅く、根石の上面が遺構確認面とほぼ同程度となる。南北列の柱穴のうち、柱穴2・5は、山裾斜面部の岩盤部分に掘削されるが、深さは他のものと比べ若干深い程度である。このため、柱穴1～6は根石設置の目的で掘削されたピットである可能性も考えられる。ただし、建物の廃絶後、遺構構築面が削平され、柱穴上面部分が消失した可能性は順序においても否定できない。

切り合い関係は隣接する掘立柱建物2の柱穴9・10を溝1が切る点、排水溝である溝2の埋没後に構築される点から、掘立柱建物2よりは構築時期が先行すると判断できる。

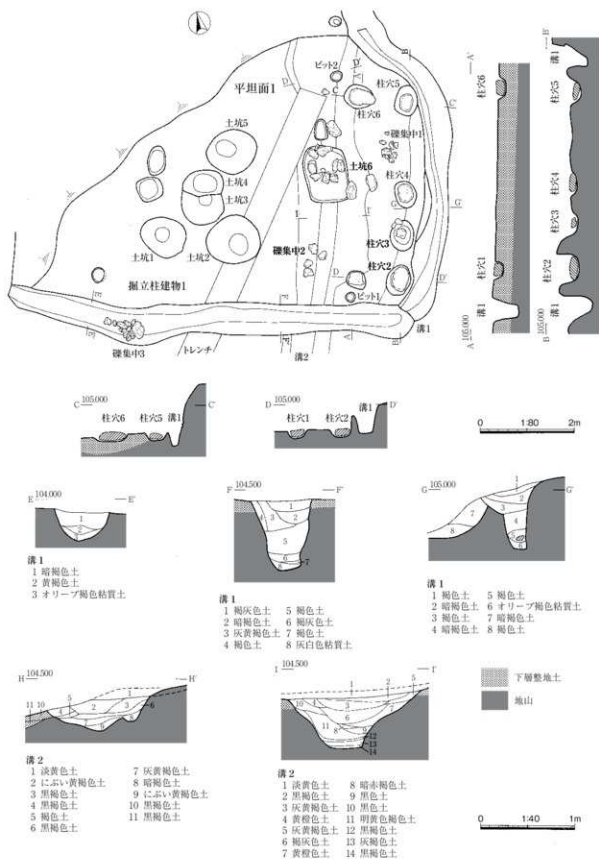
本建物の敷地を排水溝である溝1より内側部分とすれば、その規模は、残存値で南北方向約5.7m、東西方向約8.1mを測る。このことから、主軸方向はN-18°-Eを測るものと想定され、平坦面1の長軸方向、および掘立柱建物2の主軸方向とはほぼ直交することとなる。また、切り合い関係により、時間的に先行する掘立柱建物2の排水溝である溝2は、平坦面1の西側から山裾斜面部直下を巡り、本建物の中央部付近下に延長する。このため、掘立柱建物2の存続していた時期には、本建物の東端から約2m部分は山裾斜面部であり、本建物構築の際に、斜面部岩盤層を掘削して、新たに敷地造成したと判断される。また、同時に溝2も埋め戻された可能性がある。

本建物の時期は、溝1や周辺出土遺物などから、16世紀後半を上限とする。

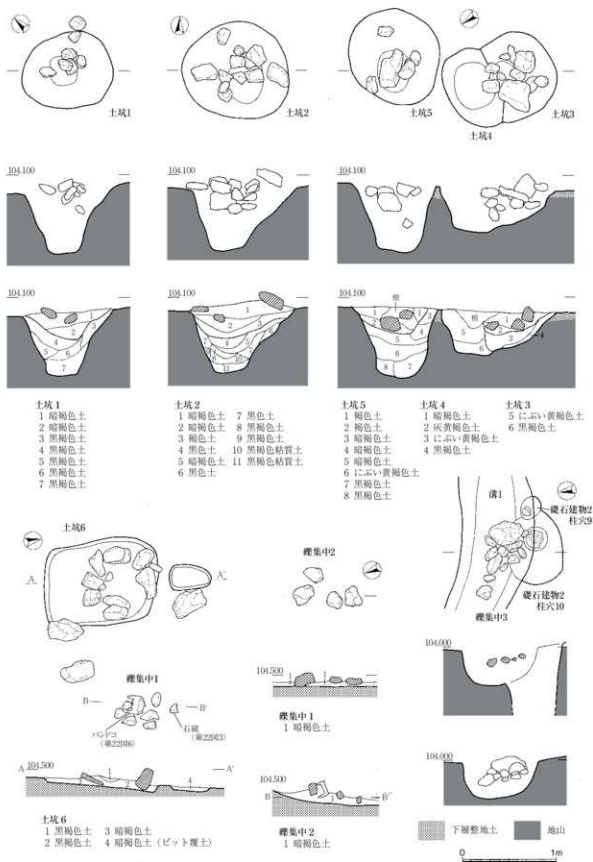
その他、柱穴1、柱穴6の付近、南北柱列の外側に、ピット1・2を検出した。上部は後世の削平を受けている。ともに直径約0.1m、深さ約0.05mを測る。覆土は黒褐色土の単層である。遺物の出土はなく、本建物との関連も不明である。

土坑群(土坑1～5) (図版第5・7、第10・11図)

掘立柱建物1の内部西側に位置する。密接して構築される土坑1～5からなる。遺構上部は削平や木株によるかく乱を著しく受ける。いずれも平面形が不整形円形を呈す。断面形は逆台形を呈すものが大半



第10図 I地区 掘立柱建物1実測図(縮尺1:40・1:80)



第11図 I地区 土坑1～6、礎集中1～3実測図(縮尺1:40)

を占め、上面径に比べ底面径が小さいものが多い。検出規模は、土坑1が 0.98×0.81 m、深さ 0.72 m、土坑2が 1.16×1.08 m、深さ 0.66 m、土坑3が 0.88×0.69 m、深さ 0.5 m、土坑4が 0.89×0.79 m、深さが 0.43 mをそれぞれ測る。いずれからも遺物は出土していないが、土坑3以外の上層から、河原石や山石などの人頭大の礫を集中して検出した。礫を含む層は、しまりの弱い暗褐色土であり、地山である黄褐色土がしみ状あるいはブロック状に混入する下層覆土とは土質が異なる。そのため、埋没過程の最終段階で凹地状となった土坑への礫集中投棄が想定される。この場合、土坑1・2・3～5は、使用と廃棄がほぼ同時期と考えられる。これら土坑群は、掘立柱建物2に付属し関連する可能性が高いため、このように複数基が同時に集中して存在するあり方から、内部に越前焼大甕を据えた、いわゆる「甕ビット」に類するものと考えられる。なお、土坑3・4の切り合い関係から、土坑3は、土坑4より前に構築され、礫を含む暗褐色土が堆積しないことから、土坑4の構築以前、つまり掘立柱建物1の存続中に、すでに埋め戻されていたと想定される。なお、土坑群の配置を掘立柱建物1の柱列と対比すれば、土坑1・2間が東西列に、土坑3・5が南北列には沿っており、土坑3・4が内側に位置する。

溝1 (図版第5・7、第10・11図)

掘立柱建物1に付随する排水溝である。柱穴列のうち南北列および東西列南側の直外側を巡り、平坦面1の北端部で途切れるため、平面形は「L」字状となる。南北方向は山裾斜面を横断し、岩盤層を掘削する。溝壁面の内部には鑿状の工具痕が顕著に残る。南北方向は、幅 0.61 m、深さ 0.72 mを測り、東西方向は、幅 0.64 m、深さ 0.76 mを測る。溝の北端部は、平坦面1・2間の比高差約 1 mの段を越え、平坦面3の溝3と浅く連結するが、切り合い関係は不明である。掘立柱建物2の溝2および柱穴9・10を切る。遺物は、南北方向の下層(第10図G-G'ライン6層)から、16世紀後半の土師質皿小片や越前焼鏃鉢片(第20図6)が出土した。

土坑6 (図版第8、第10・11図)

掘立柱建物1内側の中央南側に位置する。掘立柱建物1の柱穴確認面で検出した。平面形が隅丸長方形を呈し、規模は 1.21×0.96 m、深さは 0.09 mを測る。北側部分の覆土上面や内部に、平面形が略環状となる人頭大の河原石を8点検出した。河原石の一部には煤附着が顕著に認められる。土坑周辺にも類似した河原石が点在する。河原石が存在しない西側部分には、焼土粒と炭化物を多く含む黒褐色土が堆積する。確認面が同一であるが、河原石を含む覆土が礫集中1と近似する点、河原石の一部が、遺構確認面より若干浮いた状態である点から、掘立柱建物1に直接には伴わず、建物廃絶後に構築された可能性がある。遺物は周辺も含め出土していない。

礫集中1 (第10・11図)

土坑6の東側に位置する。掘立柱建物1の柱穴確認面よりやや上位の上層整地土中で検出した。径 0.7 mの楕円形の範囲から、集中する拳大～人頭大の河原石7点とともに、土師質皿片や石硯(第22図2・3)、バンドコ(第22図4・6)が出土した。河原石には、被熱により赤色化するものや、煤附着により黒色化するものがあり、礫間の暗褐色土には炭化物が多く含まれるが、周辺や直下での焚火の痕跡は認められない。検出層位から掘立柱建物1の廃絶後の小廃棄場と考えられる。

礫集中2 (第10・11図)

土坑6の西側に位置する。掘立柱建物1の柱穴確認面よりやや上位で、集中する人頭大の河原石を4点検出した。河原石は土坑6の覆土や礫集中1の礫間堆積土と同じ暗褐色土上に接地する。検出層位から掘立柱建物1の廃絶後の礫廃棄場と考えられる。周辺からの遺物の出土はない。

礫集中3 (第10・11図)

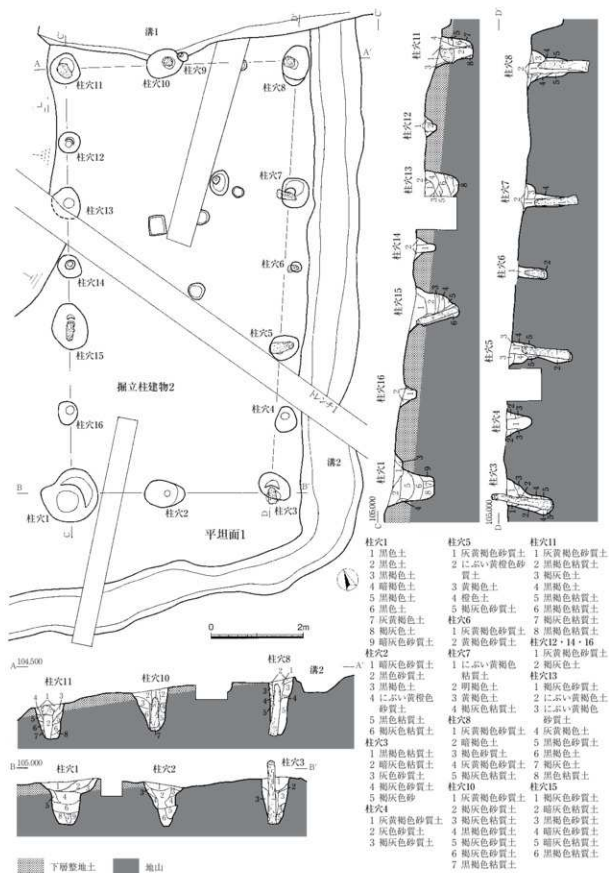
掘立柱建物1の南西側に位置する。溝1内で密集する拳大～人頭大の河原石や山石を10数点検出した。礫が含まれる溝1の中層覆土は、土坑群(土坑1～5)の多量の礫を含む上層覆土と近似する暗褐色土である。埋設途中における窪地への礫集中投棄と考えられ、覆土や礫出土状況の近似から、土坑群上層における礫集中投棄時との同時期性がうかがえ、いずれも掘立柱建物1の廃絶後である可能性が高い。なお、礫群の下位には、溝1に切られた掘立柱建物2の柱穴9・10が位置する。遺物の出土はない。

掘立柱建物柱2 (図版第5・8・9、第12図)

平坦面1の南側半分に位置し、掘立柱建物1に南隣する。掘立柱建物柱1と同一の整地土および地山上面で検出した。排水溝である溝2を付随する。主軸方向はN-24°-Eであり、平坦面1の長軸方向と平行する。柱穴は合計16基あり、このうち9基で柱根を検出した。柱間は南北方向が3間、東西方向が2間となる。南北方向には、0.5間に掘り方と柱材が小規模な柱穴(以下、支柱穴とする)を配置し、西側列は計7基、南側列は柱穴7・8間が1間となるため計6基の柱穴を配置する。柱材下端および柱穴底部中央間を柱間寸法とすれば、東西方向南側列は、柱穴1・2間が約2.2m、柱穴2・3間が約2.4mを測り、北側列は、柱穴10・11間が約2.4m、柱穴9・10間が約2.6mを測る。南北方向西側列は、柱穴11・12間が約1.7m、柱穴12・13間が約1.2m、柱穴13・14間が約1.4m、柱穴14・15間が約1.3m、柱穴15・16間が約1.9m、柱穴16・1間が約2.0mを測り、東側列は、柱穴8・7間が約2.9m、柱穴7・6間が約1.6m、柱穴6・5間が約1.6m、柱穴5・4間が約1.4m、柱穴4・3間が約1.8mを測る。以上の計測値からは、数十cm程度の数値幅があり、厳密な規格性はうかがえないが、およそ、南北方向の1間が約3mで0.5間が約1.5mとなり、東西方向の1間が約2.5mとして捉えることができる。この場合、建物の桁行と梁行で柱間寸法が異なることとなる。また、柱穴の並びは、直線的に配置されておらず、南北列東側列において、支柱穴である柱穴4・6の上面で約0.2mのずれが認められる。このことは、柱材に芯が曲がったものを用いたため、柱基礎である柱穴ではなく、立ち上がり部で柱(壁)通りを優先して揃えたためと推察される。

柱穴を検出した整地土面は建物東側が高く、西側に向かい傾斜し、最大約1mの比高差がある。柱穴の底部高も西側が高く、東に向かい低くなり、最大約0.8mの比高差があることから、建物構築当時から遺構面が傾斜していた可能性が高い。柱穴の深さは、南北方向の東側列が総じて深く、支柱穴が1～1.3m、支柱穴が0.54m、西側列の支柱穴が0.7～1.1m、支柱穴が0.26～0.44mを測る。柱穴3・5・7・15では、柱材の傾きが著しく、柱穴の掘り方と一致しない。これは、旧地形が谷にあたり、滲水性の強い地山下層の地滑りなどによる自然的な変動に伴うものと推察され、柱穴2の「く」字状に立ち上がる壁面形態に顕著に現れている。

柱材はすべて丸太材であり、樹皮が残る。柱材底面の切断痕以外の加工痕は認められない。径は0.18m～0.22mを測り、長さは最大1.38m遺存し、遺構確認面より上位に突出する。柱穴3・5・7・8では、上層整地土の掘削中に、柱材部分が腐食した小穴として確認できたことから、本建物廃絶後、柱材を残したまま、整地土による造成が行なわれたと考えられる。ただし、支柱穴である柱穴1・2・13は、掘り方が比較的大きく、覆土も柱材の痕跡が明確に認められないため、抜き取られたものと判断できる。支柱穴の覆土は、地山である黄褐色土・灰白色土のブロックを多く含むものに対して、支柱穴は柱材部分を除き、褐灰色の単層である。柱穴11では柱材内部が腐食して黒色粘質土となり、樹皮のみを検出した。柱材腐食後の窪みには人頭大の山礫が投棄されていた。柱穴9・10は隣接し、小規模な柱穴10が柱穴9



第12図 I地区 掘立柱建物2実測図(縮尺1:80)

を切るが、柱材部には至らないことから、同時に存在した可能性が高い。

すべての柱穴からは、遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。切り合い関係は柱穴9・10および溝2が、北隣する掘立柱建物1の溝1に切られていることから、両建物は時期差を有し、本建物の構築時期が古く、平坦面1造成後の初期の建物であると考えられる。この場合、本建物の北側部分には、時期的に対応する明確な遺構が検出できないため、空白地であったと考えられる。

溝2 (図版第9、第10・12図)

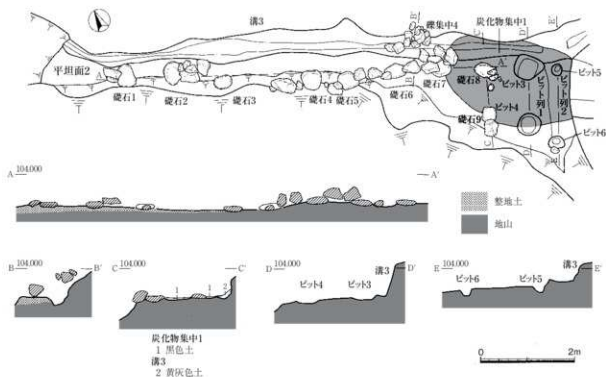
平坦面1の山裾斜面面直下を「L」字状に巡る。掘立柱建物2に付属する排水溝である。南端部分は、後世の削平のため途切れるが、西南下方に位置する平坦面3の溝4あるいは溝5と連結していた可能性がある。北端部分は平坦面1・2境となる段部において途切れ、延長しない。段部直下の地山岩盤層は西側へ向かい傾斜することから、段部に沿って自然排水された可能性がある。幅は約1.1~1.3m、深さは約0.4~0.6mを測り、断面形は逆台形を呈す。溝1と比べ浅いものの幅が広い。溝東側壁面の立ち上がりは、山裾斜面部に沿って緩やかとなる。溝底はほぼ平坦である。堆積土層の傾斜や土質から、山裾斜面部からの地山流入土が自然堆積する。ただし、掘立柱建物1の中央部下では、上層には黄褐色土の地山ブロックや地山との混合土(第10図H-H'ライン2・3層、I-I'ライン2~4層)が堆積することから、掘立柱建物1の敷地造成の際に、埋め戻された可能性が高い。遺物は出土していない。

II 平坦面2とその遺構 (第13図)

平坦面2はJ3・K3区に位置する。東側の山裾斜面岩盤層を掘削し造成される。北側・西側部分は大きく削平を受け消失する。平面形は南北方向が長軸となる隅丸長方形を呈していたと考えられる。残存規模は、南北辺約11.1m、東西辺約3.1mを測る。標高は103.3mを測り、平坦面5との比高差は2.3mである。平坦面1との境部は、比高差約1mの段となる。平坦面の下層遺構面である整地土や下層の地山も段切り状となることから、平坦面1の造成当初から存在していたと考えられる。平坦面2の中央部における堆積土層は、上層から表土、黒褐色土、褐色土、灰褐色土、橙色土、地山となる(第8図トレンチ2)。橙色土は整地土であり、地山面の傾斜に沿って、北側に向かい徐々に厚く造成される。東半部分はこの整地土上面が遺構面となる。西側部分では、整地造成は行なわれず、表土直下の地山岩盤層が遺構面となる。整地土直上層である灰褐色土は、掘立柱建物1内部の土坑群の礫を含む上層土と近似する。遺構は、礎石建物1、溝3、ピット列1・2、炭化物集中1、礫集中4を検出した。なお、整地土から遺物は出土していないが、表土中から白磁片(第19図27)が出土している。

礎石建物1 (図版第5・6、第13図)

平坦面2の全域に位置する。排水溝である溝3を付随する。北側と西側部分は平坦面2ごと削平を受け消失する。南北方向の礎石列は、礎石3~5が削平により西側へ滑落するため、直線的に並ばない。礎石1より北側への延長や、礎石3・4間に礎石が存在した可能性がある。柱間は、南北列が4間、東西列が1間となる。柱間寸法は、南北列では礎石3・4の1間で約2m、その他は0.5間で約1mを測り、東西列では礎石8・9の1間で約2mを測る。本建物の規模を掘立柱建物2と同様とすれば、主軸方向がN-13°-Eであり、平坦面2の長軸方向と並行すると考えられる。礎石は人頭大の扁平な河原石を用いるが、礎石の長軸と礎石列の方向が一致しない。また、礎石列上に沿って、礎石間に拳大~人頭大程度の河原石や山石が配置される。この東石状の礫は、遺構面や礎石直上に設置されるため、本建物に直接伴うものと考えられ、礫集中4とは時期や性格が異なる。礎石1近辺の整地土直上から土師質皿片



第13図 I地区 礎石建物1実測図(縮尺1:80)

(第19図7)が出土した。

溝3 (図版第6、第13図)

平坦部2の山裾斜面部直下に位置する。礎石建物1の排水溝である。地山岩盤層を掘削する。南東側の壁面立ち上がり部にはノミ状の工具痕が顕著に残る。溝1や溝2と比べ小規模であり、幅は0.2~0.5m、深さは0.06~0.2mを測る。南側では浅く、北側に向かい幅が狭くなると同時に深くなる。掘立柱建物1の排水溝である溝1と連結する。礎石建物1の東西方向の礎石列周辺では検出できなかった。覆土下層から土師質皿片が若干出土した。

ピット列1 (図版第6、第13図)

平坦部2の南東に位置する。礎石建物1の東西列に並行する2基の浅皿状のピット(ピット3・4)からなる。炭化物集中1直下の地山岩盤層で検出した。ピット3は、直径0.52×0.44m、深さ0.08mを測り、ピット4は、規模が0.62×0.56m、深さ0.1mを測る。列方向はN-76°-Wであり、ピット間隔は約1.2mを測る。遺物は出土していない。礎石建物との時間的・施設的関連は不明である。

ピット列2 (図版第6、第13図)

平坦部2の南東端に位置する。礎石建物1の東西列およびピット列1に並行する2基の小ピット(ピット5・6)からなる。溝3よりも低い位置にあり、平坦部1・2境の段の直下に存在する。炭化物集中1直下の地山岩盤層上面で検出した。ピット5は、直径0.36×0.28m、深さ0.16mを測り、ピット6は、規模が0.26×0.21m、深さ0.14mを測る。列方向はN-73°-Wであり、ピット間隔は約1.5mを測る。遺物は出土していない。礎石建物やピット列1との時間的・施設的関連は不明である。

炭化物集中1 (第13図)

礎石建物1の南側に位置する。遺構確認面である地山岩盤層および整地土直上で検出した。指頭大の炭化物と焼土小粒を多く含む黒褐色土が、平面楕円形を呈し、約2.7m×1.9mの範囲で分布し、厚さ0.04

mで堆積する。直下の地山岩盤弱や周辺の礎石には被熱痕がなく、地山である黄褐色土ブロックも多く含むことから、この範囲内での焚火ではなく、移動を伴う二次的堆積の可能性もある。遺物は出土していない。切り合い関係から、礎石建物1やピット列1・2の廃絶後堆積したものと考えられる。

礎集中4（図版第6、第13図）

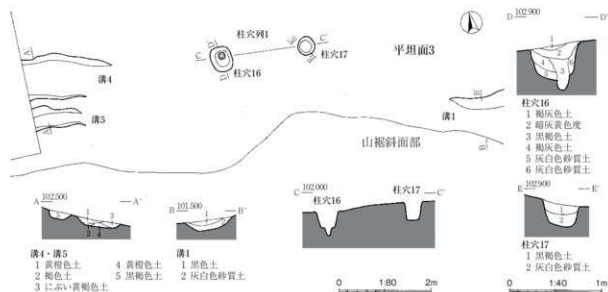
礎石6・7の南側に位置する。遺構面上層に堆積する灰褐色土および黒褐色土中で検出した。十数個の拳大～人頭大の河原石・山石が、幅約0.6mの範囲で立体的に集中する。礎石建物1の廃絶後である溝3埋没後の礎集中廃棄と考えられる。周辺からも遺物は出土していない。

Ⅲ 平坦面3とその遺構（図版第10、第14図）

平坦面3はG4・H4区に位置する。山裾斜面部を掘削して造成される。北側部分は大きく削平され消失する。平坦面1から延長する排水溝である溝1および溝4・5が本平坦面で途切れるため、遺構面も削平を受けた可能性が高い。平面形は山裾部に並行し東西方向が長軸となる隅丸長方形を呈していたと考えられ、規模は残存部で、南北辺約4.5m、東西辺約10mを測る。遺構確認面である地山の標高は102.5mを測り、平坦面5との比高差は1.5mである。平坦面1との境は、比高差が最大1.7mのやや急な斜面となる。また、整地土などは検出されず、地山である岩盤風化土の灰白色砂利が露出する。比高差から削平を受けているものの、当時から平坦面1と連結する傾斜地であった可能性もある。遺構は地山面で柱穴列1、溝4・5を検出した。表土中からは越前焼片が若干出土した。

柱穴列1（第14図）

平坦部3の東側に位置する。2基の柱穴（柱穴16・17）からなる。周辺では、この2基の柱穴しか検出していないため、時間的・施設的に関連があると想定し、柱穴列1と呼称した。列方向はN-88°-W、柱穴間隔は1.9mを測る。柱穴16は平面形が隅丸長方形を呈し、径0.56×0.44m、深さ0.54mを測る。柱材部分が深くなり、底部に段を有す。上層には柱穴全体に覆土が厚く堆積することから、柱材は抜き取られた可能性がある。柱穴17は平面形が略円形を呈し、径0.41×0.38m、深さ0.38mを測る。覆土からは柱材の痕跡は認められない。遺物は出土していない。



第14図 I地区 平坦面3遺構実測図（縮尺1:40・1:80）

溝4 (第14・15図)

平坦面3の西端部、トレンチ3付近に位置する。溝5の北側で並行し、東西方向に延びる排水溝である。地山面の削平を受けたと考えられ、全長約25mのみ残存していた。幅は0.9mで深さが0.16mを測る。覆土は山裾部の地山の流込土が堆積する。遺物は出土していない。

溝5 (第14・15図)

平坦面3・4で検出される、溝4に並行し、東西方向に延びる排水溝である。遺構上面は削平を受けている。幅0.55m、深さ0.16mを測る。覆土は黒褐色土の単層である。平坦面4の土坑7と連結する。埋土はほぼ同一であり、同時に存在する可能性がある。遺物は15世紀後半の龍泉窯の輸入染付皿片が出土した。

IV 平坦面4とその遺構 (第15・16図)

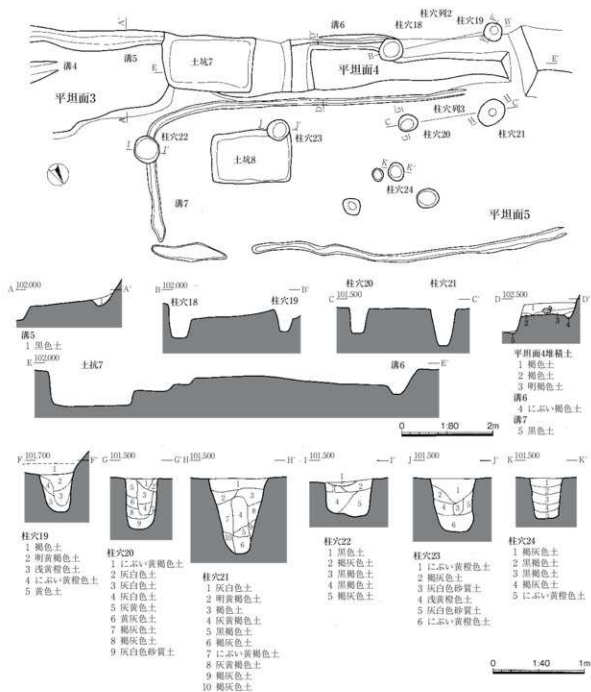
平坦面4はF2・G3・G4区に位置し、I地区山裾部の最西端となる。南側の山裾斜面部を掘削し造成される。西端部は後世の削平のため消失し、斜面となる。北端部分は段となり、直下に平坦面5の遺構群が近接して構築されることから、南北方向は後世の削平を受けていないものと考えられる。平面形は東西方向が長軸となる幅の狭い長方形を呈す。規模は、東西辺約11.2m、南北辺約1mを測る。標高は、中央部で101.5mを測り、平坦面5との比高差は0.5mである。また、東西両端部と中央部では比高差が0.24mあり、排水溝(溝6)で区画された約4.2×1mの平面長方形の部分が低くなる。遺構確認面は、表土直下の地山面となる。遺構は、土坑7、溝6、柱穴列2を検出した。なお、削平のため平坦面3との境界が明確ではないが、排水溝5と連結する土坑7から約2m東側のトレンチ3付近から標高が高くなることや、平坦面の南北方向の幅が広がることから、この付近を境界とした。遺物は、表土から輸入磁器の染付皿(第19図29)や越前焼碗(第20図1)などが出土した。

土坑7 (図版第10、第15・16図)

平坦面4の東側に位置する。平面形は東西方向が長軸となる隅丸長方形を呈し、規模が2.02×1.22m、深さは0.68mを測る。断面形は箱形を呈し、壁は急に立ち上がる。南壁は山裾斜面部を掘削する。東側で溝5と連結し、西側には本土坑の短軸方向と並行する幅0.84m、深さ0.16mの段をもつ。堆積土の観察から、溝5とこの段とは切り合い関係にはなく、覆土もほぼ同時に堆積することから、廃絶時がほぼ同時であり、使用期間も時間的に近接する一連の遺構であると考えられる。内部からは、人頭大を中心とする20数個の山礫・河原石が集中して出土した。これら多量の礫は土坑底面直上に位置することから、本遺構廃絶後あるいは埋没の最初期に、集中投棄されたものと考えられる。なお、礫には被熱赤色化するものが認められる。覆土上層には、地山である黄褐色土ブロックを多く含む暗褐色土が堆積するため、人為的な埋め戻しも想定される。排水溝である溝5と連結することや、形態などから水拵などの水溜施設の可能性はある。遺物は出土していない。

溝6 (図版第10、第15図)

平坦面4の中央部に位置する。山裾斜面部を掘削する。東西両端で直角に屈折し、平面形は北側に開口する「コ」字状となる。平坦面5との境の段部で途切れる。西側は土坑7の西側段部と連結するが、覆土の観察から、切り合い関係にはなく、覆土もほぼ同時に堆積することから、時間的に近接する一連の遺構であると考えられる。幅は0.44m、深さは0.22mを測り、西側に向かい低くなる。覆土は暗褐色土の単層である。柱穴列2(柱穴18・19)を切る。遺物は出土していない。



第15図 I地区 平坦面4・5遺構実測図(縮尺1:40・1:80)

柱穴列2 (図版第10、第15図)

平坦部4の西南側に位置する。2基の柱穴(柱穴18・19)からなる。平坦面4内部には、柱穴はこの2基しか存在しないため、なんらかの時間的・施設の関連があると想定し呼称した。排水溝である溝6に切れ、溝底で検出した。列方向はN-74°-Wであり、柱穴間隔は2.24mを測る。柱穴18は、規模が0.52×0.48m、深さ0.76mを測る。柱穴19は、規模が0.41×0.38m、深さ0.44mを測る。覆土に柱材の痕跡が認められる。遺物は出土していない。溝6に切られることから、一連の施設である可能性が高い。溝5・6、土坑7は、本遺構廃絶後に構築されたと考えられる。

V 平坦面5とその遺構(図版第6、第15~18図)

平坦面5はI地区のほぼ中央部に位置し、その面積の大半を占める。現況測量時には、西端部付近まで水田となっており、北東部では耕作土が最大約0.8m堆積していた。また、西端部分直下は、近年の土地改良に伴う削平により、比高差約2.5mの斜面および平坦面となる。このため、遺構は西側のG2・G3区で集中する以外、ほとんど検出できなかった。この遺構集中範囲では遺構面の削平はほぼ受けていない点、削平を受けている東側のH3区は、地山面が徐々に高くなる点から、平坦面5自体の範囲は、この遺構集中範囲に相当するものと考えられる。この場合、平坦部5は、規模が約18×8mを測り、平面形は南北方向が長軸となる隅丸長方形を呈していたと推定できる。また、東側には別の平坦面が存在した可能性が考えられる。遺構面は耕作土直下の地山である灰黄褐色土の上面となり、礎石建物2、礎石列3、柱穴列3、ピット列3、土坑8、溝7~9、柱穴10基、ピット12基を検出した。このうち、溝8・9は、覆土が水田耕作土である黒色土と灰褐色土との混合土であり、16世紀代の越前焼とともに、近世の遺物が出土したため、比較的新しい遺構と判断した。また、平坦面5は、分布する遺構の種類により、礎石建物などの位置する中央部(第17図)と、平坦面4直下の南側部(第15図)に大きく2分できる。

土坑8(図版第10、第15・16図)

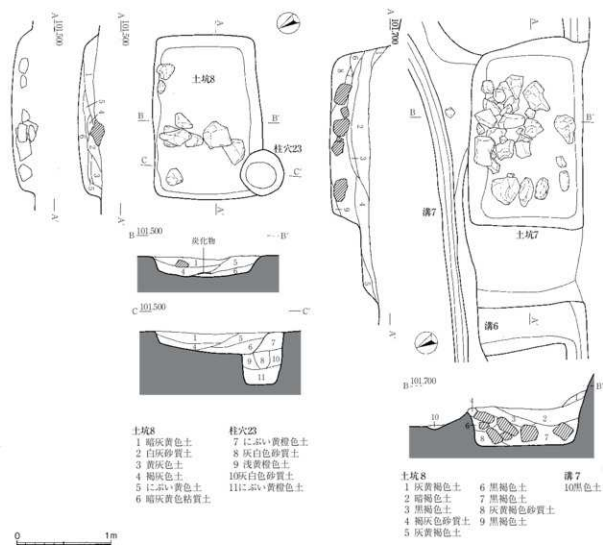
平坦部5の南端部に位置し、溝7の内側で検出した。平面形は東西方向が長軸となる隅丸長方形を呈し、規模が1.76×1.18m、深さは0.23mを測る。断面は箱形を呈し、壁は急に立ち上がる。内部から拳大~人頭大の山礫・河原石が9点出土した。これら礫は遺構底面に接しておらず、覆土最下層の堆積後、集中して投棄されたものと考えられる。出土遺物は、礫と同じ高さから16世紀後半の土師質皿片(第19図4)が数点出土した。近接する平坦部4の土坑7とは、規模・長軸方向・礫の集中投棄など類似点が多いことから、同様な性格・用途をもつものと考えられる。

柱穴列3(図版第10、第15図)

平坦部5の西南端部に位置し、柱穴列2の北側で検出した。2基の柱穴(柱穴20・21)からなる。列方向はN-73°-Wであり、柱穴間隔は約1.92mを測る。柱穴20は、平面形が略円形を呈し、規模が0.42×0.34m、深さ0.56mを測る。柱穴21は、平面形が楕円形を呈し、規模が0.62×0.52m、深さ0.83mを測る。上面径に対し底部径が小さい。覆土に柱材の痕跡が認められるが、上層には柱穴全体に覆土が厚く堆積することから、柱材は抜き取られた可能性がある。遺物は出土していない。柱穴列2とは、柱穴間隔が約0.3m短い、列方向はほぼ並行する。時間的・施設的關係は不明である。

溝7(第15・16図)

平坦部5の南端部に位置する。平面形は「コ」字状となり、隅部は直角ぎみに屈折する。西側部分は削平のため消失する。比較的小規模の溝であり、幅は0.15m、深さは±0.08mを測る。東西方向南側は、平坦部4との境となる段に並行し、6.6mを測る。南北方向東側では、柱穴22を切り、2.4mを測る。東西方向北側は根株などのかく乱などを受け、部分的に途切れるが、南側と並行し、8.6mを測る。覆土は黒色土の単層である。出土遺物はない。溝内側の隅丸長方形を呈す空間は、平坦面4と並行し、長軸規模もほぼ同様である。また、内部に存在する土坑8の長軸方向ともほぼ一致する。このため、これら遺構との時間的・施設的な関連があるものと考えられる。この場合、平坦面4の溝6に切られる柱穴列2、溝7に切られる柱穴22、あるいは、同様な柱穴群である柱穴列3や柱穴24などと、施設的な関連はなく、時間的に新しいものと考えられる。



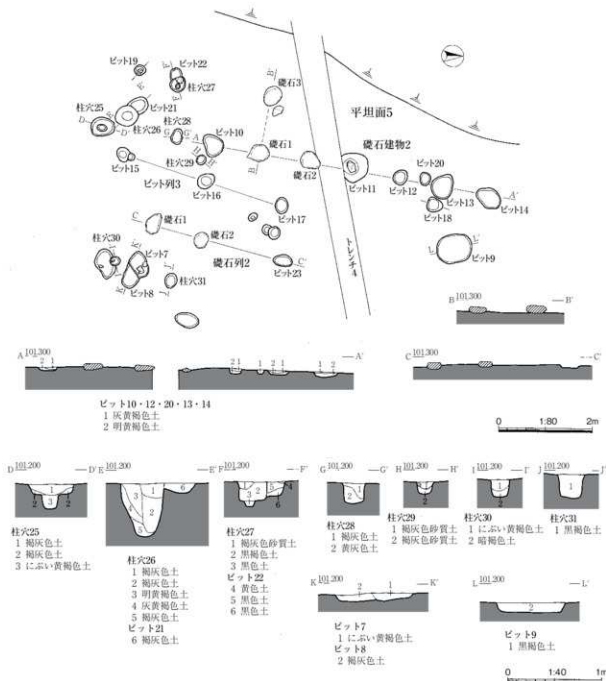
第16図 I地区 土坑7・8実測図(縮尺1:40)

礎石建物2 (図版第6・10、第17図)

平坦部5の西端部に位置する。西側部分は後世の削平を受け消失し、主に建物の東側柱列のみ残存する。礎石も部分的に消失しており、礎石抜き取り痕と考えられる浅皿状のピット(ピット10-14)を5基検出した。柱間は、南北方向が6間、東西方向が1間となる。柱間寸法は、南北方向では1間が約1mであり、東西方向では1間が約1.2mとなる。ただし、礎石1は地山面から若干浮いており、原位置ではなく、移動した可能性が高い。南北列の南側には柱穴やピットが存在することもあり、延長はしないものと考えられるが、北側へさらに延長する可能性がある。残存する礎石列の方向は $N-11^{\circ}-E$ を測り、主軸方向にあたるものと考えられる。礎石には人頭大の扁平な河原石を用いるが、礎石の長軸と柱列の方向が一致していない。礎石抜き取り跡であるピット11の底面には山石が埋置される。周辺からの遺物の出土はない。

礎石列2 (図版第6、第17図)

平坦部5の西端部に位置し、礎石建物2の東側で検出した。礎石2基と礎石抜き取り痕である浅皿状のピット1基からなる。本来はさらに延長し、建物となると考えられるが、削平などにより、部分的な検出に止まる。礎石1・2間が約1m、礎石2・ピット23間が約2mとなる。礎石2・ピット23間には



第17図 I地区 平坦部5遺構実測図(縮尺1:40・1:80)

礎石抜き取り痕は検出できなかった。礎石には人頭大の扁平な河原石を用いるが、長軸方向と柱列方向とは一致しない。長軸柱間寸法は礎石1・2間を1間とすれば1mを測り、礎石建物2と同様となる。延長方向はN-18°-Eであり、ピット列3とはほぼ並行するが、礎石建物2とは若干のずれが認められる。周辺からの遺物の出土はない。

ピット列3 (図版第6・10、第17・18図)

平坦部5の西端に位置し、礎石建物2と礎石列2の間で検出した。3基のピット(ピット15~17)からなる。いずれも平面が略円形・楕円形を呈し、直径が0.3~0.4m、深さが0.1~0.15mを測る。ピット間隔は、ピット15・16間が約1.84m、ピット16・17間が約1.7mを測る。延長方向はN-16°-Wであり、

礎石列2とはほぼ並行する。周辺にはピットが多数存在するものの、同規模で、規則的な配置で対応する他のピットが存在しない点や、各ピットの深さが極めて浅く、恒久的な建物の柱穴であるとは考えがたい点から、本ピット列は延長せず、単独の遺構であると考えられる。

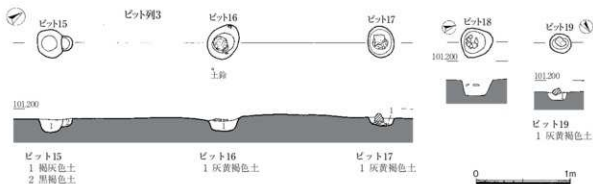
出土遺物は、土師質皿があり、ピット16・17の内部から、2枚一組の完形で出土した(第19図1・2・5)。2基とも、上位の土師質皿を伏せ、口縁部を上下に重ねて埋置する。土師質皿の出土位置や状況では差異があり、ピット16は遺構確認面と同じ高さで検出し、ピット17は底面直上で検出し、さらに土師質皿直上に準大の山礫を接置する。その他、ピット16の東側の地山直上から、上下に2分割した土鈴片が1点出土した。以上の出土状況から、土師質皿や土鈴は、「地鎮」とよばれる祭祀に伴い埋置されたとみなされる。その他、ピット16からは、別個体の土師質皿片が出土している(第19図3)。本ピット列から計4枚出土した土師質皿は、ほぼ同形態であり、16世紀後半に位置づけられることから、「地鎮」祭祀も同時期に行われたものと考えられる。ただし、前述のとおり、ピット16・17では、覆土堆積の有無、つまり、埋め戻しの前後という土師質皿の埋置段階に明確な差異が認められる。この差異が、同時的な祭祀の種類を示すのか、祭祀行為の段階としての時間差を示すのか問題となる。

柱穴・ピット(図版第6、第17・18図)

平坦面5の礎石建物2の南東側で、柱穴やピットを多く検出した。いずれも規格的な規模や規則的な配置は認められず、建物や施設を構成するものか不明である。柱穴には、掘り方が深く、柱材部の痕跡が覆土に残るもの(柱穴26)や、柱材部が深く底面に段をもつもの(柱穴25・26)がある。また、ピットには、浅皿状を呈するもの(ピット7~9など)があるが、礎石抜き取り痕としては、規模が大きい。このうち、ピット18・19は、ピット列3のピット15~17に形態や規模が類似する。ピット18は、礎石建物2のピット13に西隣し、上層から土師質皿が1枚ほぼ完形で出土した。土師質皿は口縁部を下向きに伏せられる。ピット16・17同様、「地鎮」祭祀に伴い埋置されたものとみなされる。土師質皿の時期は16世紀後半である。ピット19は平坦部5の南西側に位置し、上層から山石が出土した。その他の出土遺物はない。

以上の「地鎮」祭祀跡と想定した遺物出土状況は、本遺跡全体において、平坦面5のごく限られた範囲でのみ確認された。平坦面5周辺には多数の柱穴やピットが存在するが、遺物が出土するものは限定され、この「地鎮」祭祀跡と考えられるピット16~19のみである。そのため、このような完形の土師質皿が出土する状況は、やはり祭祀といった特殊な行為に伴う意識的な埋置の可能性が高いものと考えられる。

(山本)



第18図 I地区 ピット列3、ピット18・19実測図(縮尺1:40)

第2節 遺物

I地区で出土した遺物は、主に中近世に属するものであり、出土量は全体的に少ない。以下、種別ごとに説明を行う。

I 中近世の土器（図版第29・30、第19・20図）

中近世の土器には、土師質皿、瀬戸・美濃系陶器、輸入陶磁器、肥前系陶器、越前焼などがある。以下種類ごとに説明を行う。

土師質皿（第19図1～17）

口径の大きさにより、2つに分類することができる。1～11は口径12～13cm前後を測る一群で、内面見込み圏線が強くナデられる。器形は外側に直線的に開くものが主体をなす。6および7の色調はやや赤褐色、10は白灰色を呈する。その他はにぶい黄褐色である。12～17は口径9～10cm内に収まる一群である。12・14・16・17は口縁部に灯芯油痕が認められる。今回図示した土師器皿は、『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告I』¹⁾において分類されているD類に対応するものと考えられる。

瀬戸・美濃系陶器（第19図18～21）

灰釉皿（18） 高台径5.6cmを測り、全面に灰釉が施されている。高台は低い貼り付け高台を呈する。内面見込みに文様は施されていない。端反りの皿か。

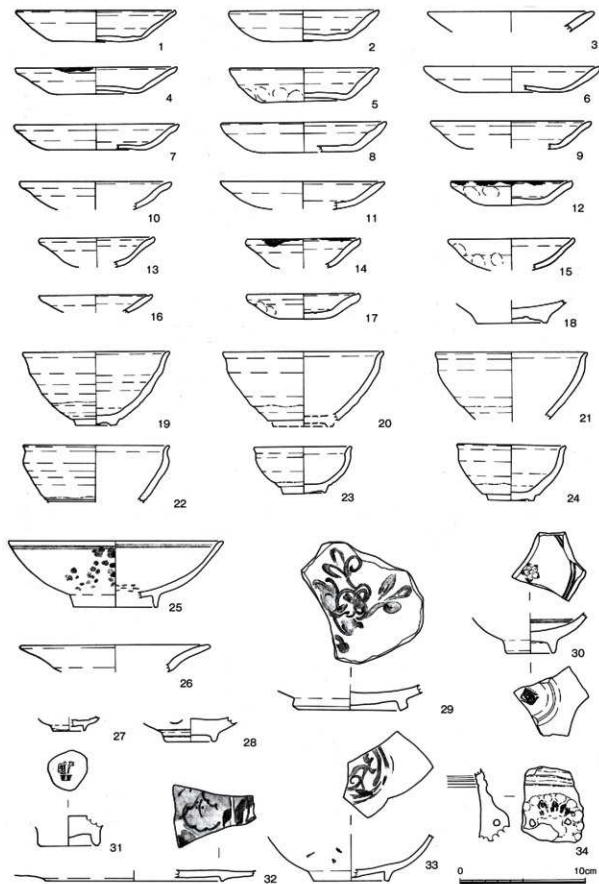
鉄軸碗（19～24） いわゆる天目茶碗である。23・24は小天目碗である。鉄軸碗で底部が残存している19・23・24においては、すべて削り出し輪高台である。また、そのほとんどが黒褐色の釉を呈するが、21・24においては茶褐色の釉がみられる。19は器高5.8cm、口径11.6cm、高台径4.0cmを測る。体部は僅かに丸みをもって立ち上がり、口縁がやや外反し玉縁状を呈する。20は口径12.5cmを測り、19とほぼ同様の体部および口縁部の作りを呈する。高台周辺に錆釉が施される。21は口径12.0cmを測る。体部はほぼ直線的に開き、口唇部は直立、口縁が外反し玉縁状になる。22は口径11.4cmを測る。体部はほぼ直線的に開き口唇部がS字状になる。23は器高4.8cm、口径7.5cm、高台径3.5cmを測る。体部はやや丸みをもって立ち上がり、口唇部がS字状になる。高台周辺に錆釉が施される。24は器高4.4cm、口径8.4cm、高台径3.6cmを測る。体部はやや直線的に開き、口唇部はほぼ直立し口縁は僅かに外反する。

輸入陶磁器（第19図25～27・29・31・33）

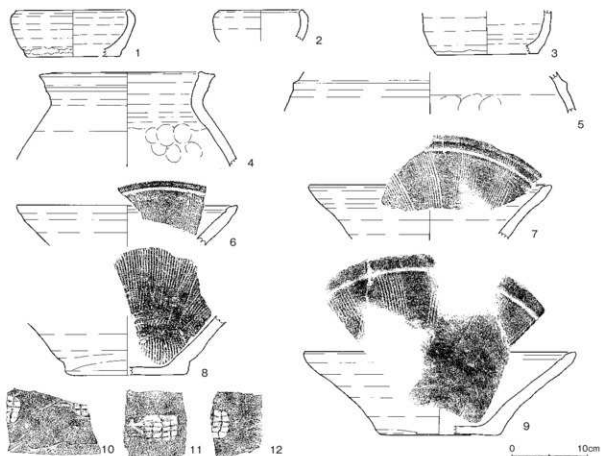
青磁（26・31） 26は皿の口縁部の一部である。色調は灰緑色で貫入を呈する。腰折れ皿か？31は高台径4.4cmを測る碗である。見込みに文様が施されているが、不明瞭である。色調は青緑色で高台内の釉は拭取られている。

白磁（27） 高台径2.6cmを測る杯と考えられる。見込みの釉は輪状に拭き取られ、外面高台下半から露胎とする。

染付（25・29・33） 25は器高5.2cm、口径17.0cm、高台径6.4cmを測る碗である。広く開いた体部を有し、やや低い高台をもつ。釉は壘付け部分を拭取る。高台内は施釉される。外面一面と内面見込み部分において、唐草文の略化と思われる文様が施されている。29は高台径9.0cmを測る福建省漳州窯系の皿である。胎土は陶器質を呈し、釉薬は乳濁色である。高台は台形で、高台壘付け以内は露胎である。33は高台径6.0cmを測る碗である。内面見込みに内界線と唐草文が描かれている。外面は文様が見取れるところが少ないため詳細は不明であるが、おそらく唐草文が施されていると考えられる。色調はやや濁



第19圖 I地区 出土土器実測図1(縮尺1:3)



第20図 I地区 出土土器実測図2（縮尺1：5）

った青白色で、壺付けから高台内面にかけて露胎である。

肥前系陶器（第19図28・30・32）

28は高台径4.0cmを測る染付の碗である。見込みには蛇目釉割ぎが施されている。30は見込みに「五弁花」が施される染付の碗である。高台径3.8cmを測り、壺付けに砂が付着している。32は高台径14.0cmを測る大皿である。高台は低く、壺付け部分のみ釉を剥ぎ取る。上記の肥前系陶器3点は近世の所産である。

越前焼（第20図1～12）

碗（1・2） 1は口径約15cm、器高6.2cm、底径約12.2cmを測る。口縁部はやや内傾気味に上に伸び上がり、端部は断面三角形を呈する。また、底部外面にはロクロ台から碗を切り離す為に使われた縄の跡が残る。2は口径約10.8cmを測るが、小片のため他の法量は不明である。口縁部および端部は1と同様の形態をとる。

甕（4） 口縁端部はほぼ水平に面をもち、口縁部全体が肥厚する形態を呈する。また、口縁部外面には緑帯の退化痕跡でもある稜が認められる。口径は約19.0cmを測る。

壺（3・5） 3・5ともに小片のため器形は明確にはないが、壺の可能性が考えられる。3は内外面ともに鉄軸が施されており（外面底部は露胎）、近世の所産と考えられる。底径約5.7cmを測る。5は、胴部に低い三角形の突帯をもつタイプである。法量は不明である。

描鉢（6～9） 6・7・9は、口縁端部が内傾して切れ、口縁断面が三角形を呈し、一定間隔の描目が施されている。9は口径35.7cm、器高11.0cm、底径16.0cmを測る。8は底径16.0cmを測り、密に描

目が施されている。今回挿録で図示したもので8のみが近世の所産である。

押印文 (10~12) 10~12ともに甕の肩部に施されている押印文である。3点の押印文は正方形の格子目とその左側に凹文の「本」という文字が施されるタイプである。同一個体の可能性あり。

その他の遺物 (第19図34)

瓦質の火鉢に付く獣面の取っ手と考えられる。取っ手には紐などを通す横方向の孔が穿たれている。

(中川)

注

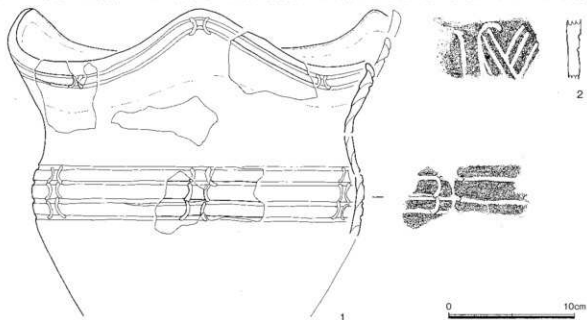
1) 以下の文献による。

小野正敏 1979「土師質土器」『特別史跡—乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ—朝倉館跡の調査』福井県教育委員会

Ⅱ 縄文土器 (図版第31、第21図)

主にⅠ・Ⅲ地区の斜面部の表土中から出土し、Ⅱ地区からの出土はない。出土量はごく少量であり、すべて破片である。以下、図化できた2個体について説明を行う。

1は平坦面1の山裾斜面部の表土から出土した。深鉢形土器であり、口縁部から胴部にかけて部分的に残存する。器形復元から、口縁部は3単位の山形波状口縁となり、波頂部はやや内湾しながら大きく開き、頸部で強くくびれ、胴部上半でやや張り、胴部下半から底部に向かいすぼまるキャリバー形の器形を呈す。文様帯は2帯構成となり、口縁部と胴部に横位展開する文様帯を配す。波底部の口縁端部は短く内屈し、波頂部に向かい内屈は弱くなる。やや幅広の口唇部は、端部の内屈に沿ってやや内湾し、幅広の無文部となる。この口唇無文部直下に2条の平行沈線を口縁形に沿って周回させ、波頂・波底部下で横位に向かい合う弧状短沈線を区切り文として配すものと想定できる。胴部には口縁部と同様に、2条一組の周回沈線を配し、波頂部下、あるいは波底部下に口縁部と同様な弧状区切り文を上下に3段施す。この胴部文様帯の上端には段などの器形的な特徴は認められず、胴部最大径が文様帯の中央部にあたる。縄文などの地文は施されず、外面はナデ調整である。内面には接合痕が顕著に残る。また、外面には口縁部から頸部にかけて炭化物が顕著に付着する。時期は、後期中葉に位置づけられる。本遺跡



第21図 Ⅰ地区 出土土器実測図3 (縮尺1:3)

から約8km東方の九頭竜川下流に位置する永平寺町鳴鹿手鳥遺跡出土の第10群土器および第11群土器におおむね比定できる1)ことから、加曾利B1式に並行する在地系土器の位置づけが与えられる。2は平坦面4の山裾斜面の表土から出土した。深鉢形土器の胴部上半片で、単独出土である。縦位楕円状の沈線区画内に矢羽根状沈線を配す。区画沈線の上端末は途切れ、蕨手状となる。時期は中期後葉に位置づけられ、越前地方に主体的に分布する大杉谷式土器に比定される。(山本)

注

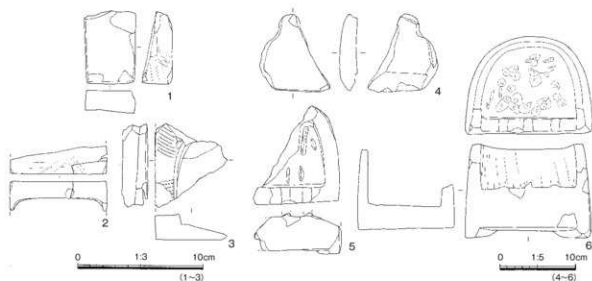
1) 以下の文献による。ただし、縄文施文の有無や区切り文の差異などが認められる。

工藤俊樹 1988「第7章 縄文時代後期前葉土器群の検討」『鳴鹿手鳥遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

Ⅲ 石製品(図版第31、第22図)

文房具に硯、研磨用工具に砥石、暖房具にバンドコがある。また、中国産か赤間産とみられる硯があり、上級階層の存在が推察される。石質は、砥石は中砥、バンドコは凝灰岩質の笏谷石、硯には粘板岩が用いられる。すべて平坦面1から出土する。硯とバンドコは、掘立柱建物1の廃絶後の礫集中1から出土しており、礫と同様に廃棄品であると考えられる。

1は、砥石。石質から中砥と考えられる。扁平な長方形を呈す。上端以外が砥面だが、裏面の作出は不十分である。2と3は長方硯で、側面は垂直に立ち上がる。2は、細い縁帯をもつ。高嶋硯と考えられる。3は、幅広い縁帯をもち、硯面との境に凸帯がめぐる。図柄不詳だが、縁帯に円弧状の線刻が上部8条、下部5条ある。また、縁帯上部で凸帯と線刻の間には、浮彫りが僅かに残る。中国製か赤間硯とみられる。4～6は、平面D字形のバンドコ。4は蓋で、窓をもたない。内面は平ノミ、他は円滑に仕上げられる。5と6は身で、上方に口を設ける。前面に上向きで、縦格子の窓をもつ。底部には、側面に沿って脚が削り出されている。また、底部内面は、丸ノミで整形される。6は、側壁内面が上方、底部外面が前方から平ノミで整形されている。(田中)



第22図 I地区 出土石製品実測図(縮尺1:3・1:5)

第5章 II地区の概要

第1節 層序(第23~25図)

II地区の地形は、北東の山裾斜面部と調査区の大半を占める谷部からなる。この山裾斜面下部周辺は谷奥部からの流水による自然流路となり、中世の一時期を除いて旧地形時から現在まで存在する。

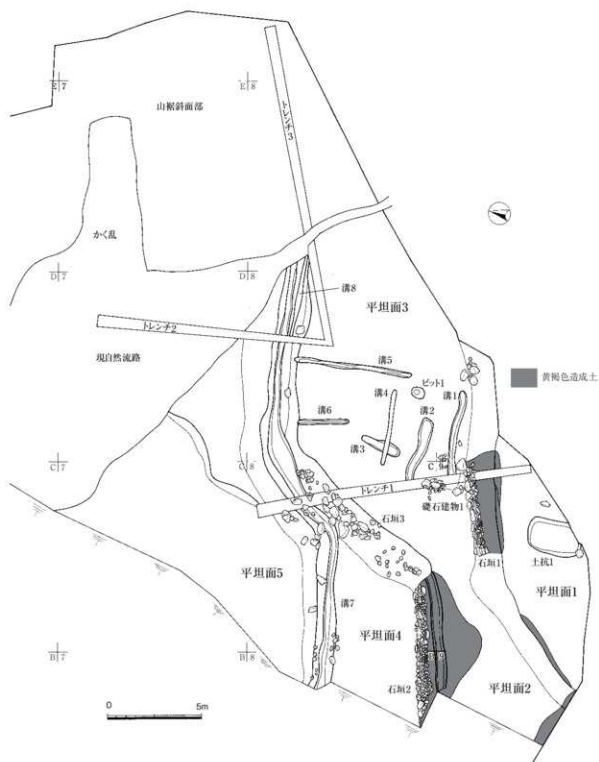
トレンチ1~3の土層観察から、東側山裾部の西側、D8・C7杭を中心として古代より前の自然流路(以下、旧自然流路とする)が流れる。この旧自然流路には丘陵岩盤層の浸食による砂利・砂(第24図トレンチ1-IV2層、トレンチ2・3-VII2層)が堆積する。さらに下層には丘陵基盤層で山裾斜面まで延長する粘質土(トレンチ1-IV3層、トレンチ2・3-VII4層)が堆積する。旧自然流路の上層にはB9区を中心に、谷部の埋没土である黒色土(トレンチ1-IV1層)が厚く堆積する。北東側のB7・C7・C8区では、この黒色土が堆積せず、旧自然流路の堆積土である砂利・砂が露出する。この黒色土が堆積しない範囲も旧自然流路であるとすれば、旧地形は谷部の広い範囲で流れていた旧自然流路の小規模定流化に伴い、流域内に腐食土の土壌化および埋没堆積により形成されたと考えられる。

その後、この旧流路内に新たな自然流路が形成され、古代において、須恵器窯に伴う灰原(トレンチ2・3-VI2)が堆積する。C8・D8区では、灰原上層に植物腐植土層である黒色粘質土(トレンチ2・3-V層)が薄く堆積し、さらに、中世の整地土(トレンチ2・3-III層)が堆積する。

中世の館に関連する平坦面の整地土は、色調と土質が異なる黄褐色土と黒色土の2層を基本とする。黄褐色土は均一ではなく、ブロック土や山礫などの含有物の差異で分層できる。主に平坦面3の北東縁辺部に堆積することから、平坦面造成の最終段階に用いられており、特に薄く累重する整地土(トレンチ2・3-III2層)に顕著である。平坦面3では、黒褐色土(トレンチ1-II3層)が間層的に堆積しており、黄褐色整地土を上層(同II2層)と下層(同II4層)に分層できる。上層土は粒子が細かく砂性があり、下層土は山石や砂利を多く含む。窯壁小塊や須恵器碎片を多量に含む土層(同II4-20・21層)を検出したため、窯3周辺の掘削土と判断できる。さらに、窯3は表土直下が床面となるため、天井までの推定高約1m前後の掘削を行なったと推定できる。なお、平坦面3の造成時に自然流路も同時に埋め立てるが、この造成は調査区外に現存する土塁と堀を構築し、谷水の取り回しが行われた後であると想定される。黒色整地土は地山土と近似し、土質もほぼ均一であるため、わずかな色調の差異で分層した。主に平坦面1上面部分および平坦面2の西南部分で堆積することから、造成の初期に用いられている。掘削場所は旧地形の土層堆積から、標高の高い調査区外南側付近である可能性が高い。このような色調や土質による整地土の選択性は、平坦面造成においてはうかがえず、造成順および掘削場所によるものと判断される。さらに、調査区内における平坦面造成は基本的に館周辺からの運搬土ではなく、館内部の原地形の掘削などの改変に伴う排出土を用いて行なわれたとみなされ、土塁が存在する標高の高い館奥部から、標高の低い北側の入り口部へ向かい、段階的に行なったと想定される。

整地土出土遺物には、須恵器細片の他に、16世紀後半~17世紀初頭の時間幅をもつ土師質皿・越前焼・磁器の小片が若干ある。このため、造成時期下限を17世紀初頭に位置づけるのが妥当である。

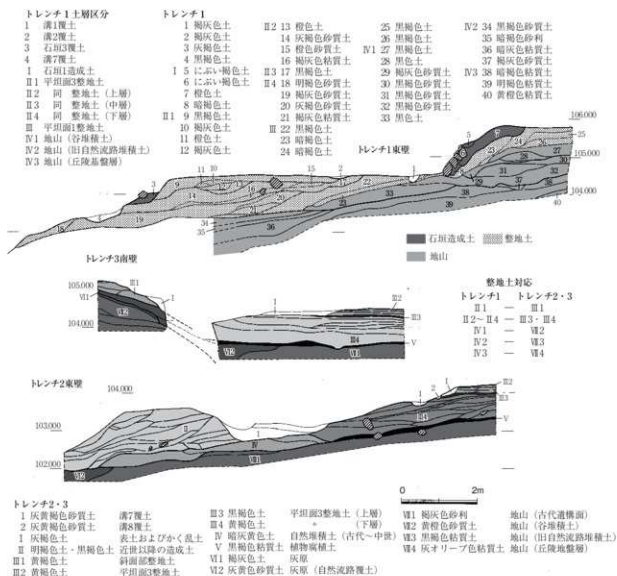
以上から、II地区の遺構面は自然流路埋没後に造成される中世の整地地面以外は、表土直下の地山面が遺構面となる。つまり、谷部が中世の整地地面で1面、山裾斜面部が縄文時代および古代の地山面で1面、斜面部と谷部の境が古代の地山面と中世の整地地面で2面となる。



第23図 II地区 谷部主要遺構配置図(縮尺1:200)

第2節 遺構分布 (第23・25図)

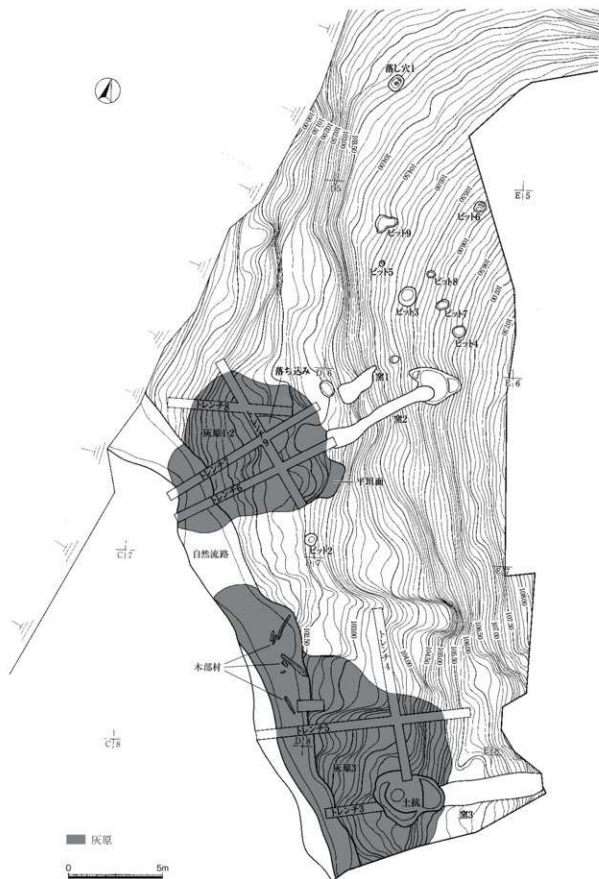
II地区は、地形から山裾斜面部と谷部に大きく2分でき、分布する遺構の時期と内容が異なる。山裾斜面部は、さらに、D4・5区を中心とする傾斜度が比較的緩やかな尾根先端斜面部と、D6～8区を中心とする傾斜度が強い尾根南斜面部に分離できる。尾根先端斜面部では、縄文時代と考えられる落とし穴を単独で検出した。尾根南斜面部では、8世紀末～9世紀初頭の須恵器窯3基と時期・用途ともに不



明なピット6基を検出し、斜面裾部で窯と同時期と考えられるピットを1基検出した。斜面部直下には、16世紀後半までの自然流路を1条、および窯に伴う灰原を2ヵ所検出した。谷部では16世紀後半~17世紀初頭の館に伴う平坦面を5ヵ所と石垣3基、建物の可能性がある礎石3基、土坑1基、ピット1基を検出し、その他、比較的新しい溝7条検出した。明確な建物などを検出できなかったが、現況測量図(第2図)からも、館本体は調査区から南方に存在するものと考えられる。

第3節 遺物出土状況

遺物には、まず8世紀末~9世紀初頭の須恵器を中心とした窯関連遺物があり、遺跡出土物の9割を占める。主に窯体下位の山裾斜面部と自然流路に堆積する灰原から出土したが、窯体内部にも良好な遺物が多く遺存していた。次いで土師質皿、越前焼などの陶器、輸入・国産陶磁器がある。16世紀後半~17世紀初頭の時間幅を有するが、破片を主体とし、遺物量はきわめて少ない。主に館関連遺構で出土するが、遺構内や整地土中の出土遺物はほとんどなく、多くは表土出土である。その他、縄文時代の石器が、自然流路下層から2点、平坦面3の礎石1の周辺礫に混在して1点出土している。(山本)



第25図 II地区 山裾斜面部主要遺構配置図 (縮尺1:200)

第6章 II地区の遺構と遺物

第1節 遺構

II地区で検出した遺構は、主に古代の窯跡と中世の館跡、およびこれらに関連する遺構である。これらの遺構は、調査区内の地形により、おおむね時期や内容が異なり、分離して捉えることができる。そのため、ここでは地形ごとに遺構の説明を行うこととする。

I 山裾斜面部の遺構

窯1 (図版第2・3・11・12・14、第25・26・29図)

D6区に位置し、窯2の1m北側に並列する。立地する山裾斜面の傾斜は32°を測る。構造は地下掘り抜き式である。焚口周辺に後世の削平を受けるが、焼成部後半～排煙口にかけての天井が崩落せず残存していた。付属施設として舟底状ピットを有す。なお、窯体の平断面形からは焼成部と燃焼部を明確に分離できないため、本窯では床面における舟底状ピットの位置や、最終操業時の硬化面の範囲をもって燃焼部とした。

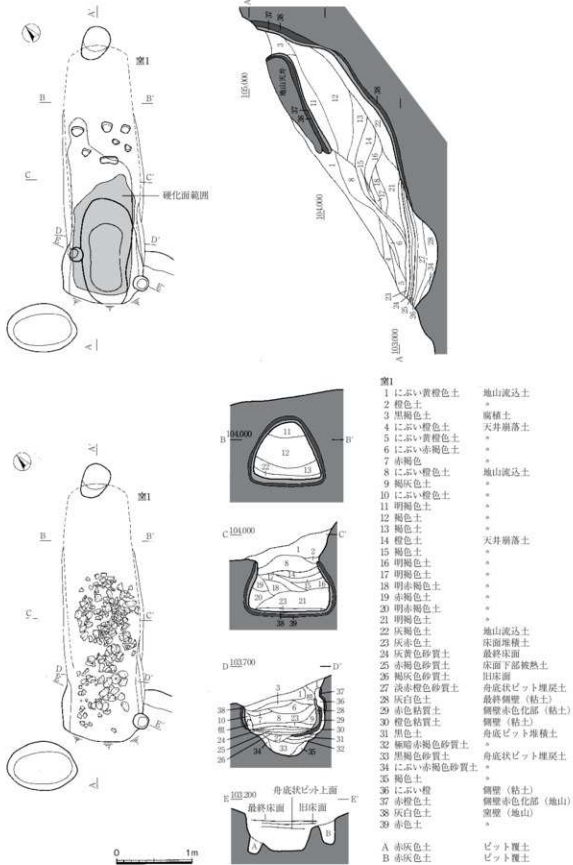
規模・形態 窯体全長が検出値で3.81m、床面最大幅が1.06mを測り、窯2・3と比較してもっとも小規模である。窯体施設の比高差(床面～排煙口上端)は2.06mを測る。窯体は等高線に直交せず、山裾斜面下方の自然流路に直交するように掘り込まれ、主軸方向はN-42°-Wである。窯体の平面形は燃焼部南壁中央で若干膨らむ以外、ほぼ直線的であり、奥壁が丸みをもつ長方形を呈す。床面の傾斜は燃焼部から焼成部中央までほぼ水平であり、そこから34°の傾斜で立ち上がり、奥壁につながる。天井高は、焼成部中央でもっとも高く0.83mを測り、奥壁付近では0.61mと低くなる。側壁は奥壁付近では内側に強く傾斜するため、天井の幅がほとんどなく断面形が隅丸三角形を呈す。焼成部前半では床面から短く直立し、緩やかに傾斜する。燃焼部ではやや長く直立する。

排煙口・奥壁 排煙口は窯体天井に開口し、径0.46mを測る。煙道部は明確な煙突状ではないが、奥壁から屈折し、開いて立ち上がり、長さ0.63mを測る。奥壁は垂直に立ち上がり、長さ0.47mを測る。排煙口上端面には被熱による地山赤色化部が厚く認められ、特に奥側で顕著である。

焼成部 床面は岩盤風化土であり、半還元により灰白色化を呈し、硬く焼き締まる。中央部付近に焼台(置台石)設置のためと考えられる浅い窪みを7ヶ所検出した。床面の傾斜が強くなる奥壁付近には、明確には認められないが、排煙口からの流れ込みと考えられる堆積土(第26図22層)から、焼成時に棚板状として使用されたと考えられる須恵器甕の大形破片が2点出土している。側壁および天井の地山灰白色部は剥離のため部分的に凹凸が認められる。

燃焼部 西側壁には最終操業時の窯壁である粘土による改修壁(28層)と、その外側の被熱赤色化部(29層)があり、さらに外側にも、地山とは異なる粘土壁(30・36層)と、その被熱赤色化部(37層)がある。東側壁は地山壁のみであることから、西側壁のみの改修で最低2回行なわれたと考えられる。

床面には吸炭し黒味を帯びる最終操業時の硬化面(24層)を検出した。砂性があり、焼き締まるがもろく、両側壁下が部分的に剥離する。この硬化面直上には、部分的に黒色の炭化灰が付着するが、明確な灰層のみの堆積は検出できなかった。硬化面直下には、同質土と考えられる被熱赤色化した砂層(25層)が堆積する。さらに下位で、旧床面となる黒味を帯び焼結した砂層(26層)を検出した。硬化面数



第26図 II地区 窠1実測図(縮尺1:50)

から、床面の改修は最低2回行われたと考えられる。その他、旧床面(26層)の下部は薄く被熱赤色化するとともに、直下には最終操業時の被熱赤色化部(29層)が西側壁から延長する。このため、西側壁の改修と床面の改修との対応関係については、土層観察から西側壁の最終改修が、床面改修の2回分に対応すると判断され、竈体改修からみた操業期間は大きくは3期を想定できる。

舟底状ピット 上下2面の床面とその被熱赤色化部の直下で検出した。平面形は竈体に沿った楕円形を呈し、規模が残存値で1.38×0.62m、深さは0.37mを測る。底面や壁面には被熱の痕跡はない。覆土上層には焼成時に関連する灰を多く含む黒色土(31層)や被熱赤色土(32層)が斜傾して堆積する。これらの堆積土は層厚が薄いものの、混合土ではなく、ほぼ均一な土層である。覆土下層(33~35層)は、均一な土層ではなく、層の境界も明瞭ではないことから、ピットの埋戻土と考えられる。また、旧床面(26層)直下の検出面において、上層堆積土(31・32層)を切って掘り返された跡(27層)も確認した。なお、下層(33層)から須恵器小片が若干出土した。

この舟底状ピットの機能については、従来から、大型品の搬入出のためと、防湿のための2つが想定されている。本竈においては、舟底状ピットの上位に、最終床面と旧床面にあたる2面の硬化面が残存することから、防湿機能がより可能性が高いものと判断される。

そのほか、舟底状ピット北側付近、および西側壁直下に2基のピットを検出した。2基ともほぼ同規模であり、直径約0.2m、検出面からの深さは、北側が約0.2m、南側が約0.3mを測る。覆土には焼成に関係する炭化物や焼土を多く含む赤灰色土が、それぞれ単層で堆積する。用途などは不明であるが、舟底状ピットや側壁などに切られることから、2基とも竈埋没後に掘削されたのではなく、竈操業中あるいは竈構築以前に掘削され、操業期間の早い段階で埋没したのと考えられる。

焚口部・前庭部 燃焼部より前方、西側部分にあたる竈体入り口部分周辺は、削平のため明確ではなく、最終焼成時にかき出された灰層も検出できなかった。その他には、竈体残存部から約3m西側の灰原下層の地山面において、落ち込み状の平坦面を検出した(第25図)。この平坦面は平面形が竈体側に弧をもつ半円形を呈し、東西方向が約1.3m、南北方向幅約2.4m、深さは約3.2mを測る。底面は南北方向がほぼ平坦であり、西側に向かい緩やかに傾斜する。内部には本竈に伴うと想定した灰原(第29図灰原Ⅹ層・Ⅹ層)が堆積する。竈体からやや離れるが、人為的な造成による灰溜め穴などの竈関連施設である可能性が考えられる。

竈体内埋土 燃焼部で検出した最終操業時の床面である硬化面(24層)直上には、多量の遺物を包含する灰赤土(23層)が堆積する。硬化床面の範囲とはほぼ重なって堆積する状況から、排煙口から流れ込んだ堆積土ではないと判断でき、竈内部で形成されたものと考えられる。土質は砂性がほとんどなく、色調とは異なり、炭化物や焼土粒の包含は比較的少なく、竈壁塊を若干含む。よって、焼成時にすべて形成したのではなく、最初期の天井崩落土が混合したのと考えられる。包含する遺物の出土位置には、高低差が認められることから、天井崩落により遺物が移動し、混在した可能性が高い。その他、明確な灰層のみの堆積は認められない。焼成後の製品取り出し(竈出し)後に竈体内部の整理を行い、灰層の大半は除去された可能性がある。

この床面直上土(23層)が形成・堆積した後は自然堆積となる。まず、床面が傾斜する焼成後半半の床面直上に、排煙口からの地山流込土(22層)が堆積する。しまりが弱く、地山より灰色が強い。その後、天井崩落土が堆積する。地山窯壁の灰白色化部(38層)や赤色化部(39層)を多量に含む土層を崩落単位とすれば、天井は一度に崩落せず、焼成部前半部の天井が3回連続して崩落する(下層から21、17・

18、14～16層)。その後、地山流込土が排煙口から水平堆積し(11～13層)、天井崩落部分からも堆積する(8層)。続いて、燃焼部の残存する天井が崩落し(4～7層)、最終的に、窯体の窪地に地山流込土が堆積(1層)、あるいは、煙道部以下の埋没により、小穴となった排煙口に植物腐植と関係する黒色土(10層)が堆積して完全に埋没する。このうち、天井崩落後の堆積土(8層)はほぼ均一であり、周辺の地山と比較して若干灰色を呈すことや、同じく、排煙口からの堆積土(11～13層)が厚く堆積することから、ごく短期間の堆積ではないと考えられ、その後燃焼部天井が崩落することから、人為的な天井の崩落や埋め戻しは行われていないものと想定される。

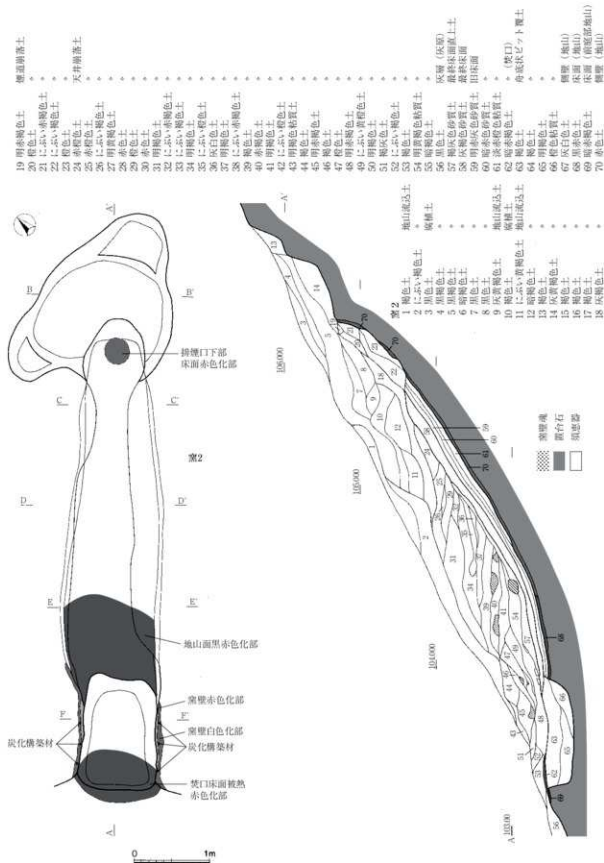
遺物の出土状況 遺物は焼成部前半から燃焼部にかけて多量に出土した。主に坏や坏蓋などの小型品を中心として、若干の甕・壺などの大型品からなり、総数176点を数える。小型品は軟質で、吸炭し黒味がある完形品が多く、大型品は接合復元できない大形破片を主体とする。置台石や置台粘土は出土していない。出土位置には、床面直上の堆積土(23層)中や最終操業時床面(24層)直上を主体とする。この床面直上土(23層)は、前述のとおり、焼成時に直接伴わない可能性があるため、遺物の多くは廃棄時の原位置を保っていないものと考えられる。焼成部中央付近では、床面から0.2～0.3m上位の天井崩落土(21層)から出土するものも若干ある。また、甕などの大形破片は、天井崩落土(21層)、排煙口からの堆積土(22層)から出土するものがあり、焼成部中央～後半で焼成時に棚板状に使用されていたものが土層堆積に伴い移動してきたものと考えられる。そのほか、舟底状ピットの下層から須恵器片が数点出土したが、天井崩落後の地山流込土(1・7・11～13層)からの遺物の出土はない。

以上、窯体内堆積土や遺物出土状況から判断した遺物の位置づけは、最終操業時の焼成品であり、窯体崩落後の窪地への流れ込みや廃棄などの二次的な移動には伴わないものと判断される。さらに、窯使用用途中における焼成直後の取り残し品や遺棄品ではなく、廃絶を前提とする窯体内部へ廃棄された不要品であると想定される。

窯2 (図版第2・11・12・14・15、第25・27～29図)

D6区に位置し、窯1の1m南側に並列する。構造は地下掘り抜き式である。排煙口や天井は崩落するが、焚口と前庭部はほぼ残存していた。付属施設として窯背部土坑と舟底状ピットを有す。なお、窯体の平面形からは、燃焼部と焼成部が明確に分離できないため、本窯では平面形態を優先し、舟底状ピット奥側付近の側壁に認められる弱いくびれ部を焼成部境とし、奥側を焼成部、手前側の舟底ピットが存在する範囲を燃焼部とした。窯1と比べ、焼成部長は約2倍、焼成部幅は約1.2倍となる。

規模・形態 窯体全長は7.62m、最大幅は1.33mを測る。窯跡施設の比高差は3.93mを測る。窯体は窯1同様に等高線には直交せず、山裾斜面下方の自然流路に直交するように掘り込まれ、主軸はN-47°-Eを測る。窯体の平面は全体的に幅の狭い長方形を呈す。側壁は焼成部中央から丸味をもつ奥壁に向かい幅が狭まる。焼成部の北側壁でやや膨らみ、舟底状ピット付近の側壁幅が若干狭まることから、弱いくびれ部として認識できる。床面の傾斜は、焼成部前半が若干の傾斜を有すもののほぼ水平であり、焼成部中央から32°の傾斜で立ち上がり、奥壁につながる。焼成部の断面形は左右対称ではなく、床面の傾斜や側壁立ち上がりに差異が認められる。奥壁付近では、床面が南側でやや高くなり、側壁がやや直立もしくは内湾して立ち上がる。側壁傾斜角度から天井幅が狭く推定され、断面形は高さのある隅丸三角形を呈すと考えられる。焼成部中央では、床面が北側でやや高くなり、側壁がやや傾斜もしくは短く直立したのち内湾して立ち上がる。側壁傾斜角度から天井幅はやや広く、断面形は緩やかな弧状を呈すと考えられる。焼成部前半部では、側壁は床面から屈折し、直立あるいは内傾して直線的に立



第27図 II地区 竈2実測図1 (縮尺1:50)

ち上がる。燃焼部の舟底ビット付近では、側壁が直立して長く立ち上がる。

排煙口・奥壁 排煙口は窯背部土坑内に半円状で検出した。窯体天井に開口したと考えられる。推定径0.38mを測る。煙道部は明確な煙突状ではなく、短い奥壁から角度を変えやや直線的に立ち上がり、長さ0.26mを測る。奥壁は焼成部とはほぼ同じ傾斜で立ち上がるため、明確に認識できないが、両側壁の下場が延長し連結する部分からの立ち上がりを奥壁とした。この場合の高さは0.08mを測る。

窯背部土坑 平面が楕円形を呈し、窯2の主軸と直交する南北方向が長軸となり、規模が 0.202×1.86 m、深さが0.57mを測る中央土坑と、これに連結する北西・南東側の2カ所の張り出し状の土坑からなる。中央土坑内部に排煙口をもつ。窯体に接する中央部の土坑の断面形は、壁面が直線的に立ち上がり逆台形を呈し、底面はほぼ水平である。張り出し状の土坑は中央部の土坑より浅く、階段状となる。土層観察によれば、両土坑は切り合い関係にはなく、同時に埋没する。覆土はしまりのない黒色土を基本とし、天井崩落後の窪地となった本窯の後半部にも連続して堆積する。また、排煙口に近接する南東側の壁面には、半還元した灰白色化と被熱赤色化が認められる。このため、本土坑は窯2天井崩落以前には埋没しておらず、時間的・用途的にも一連の施設であったと考えられる。

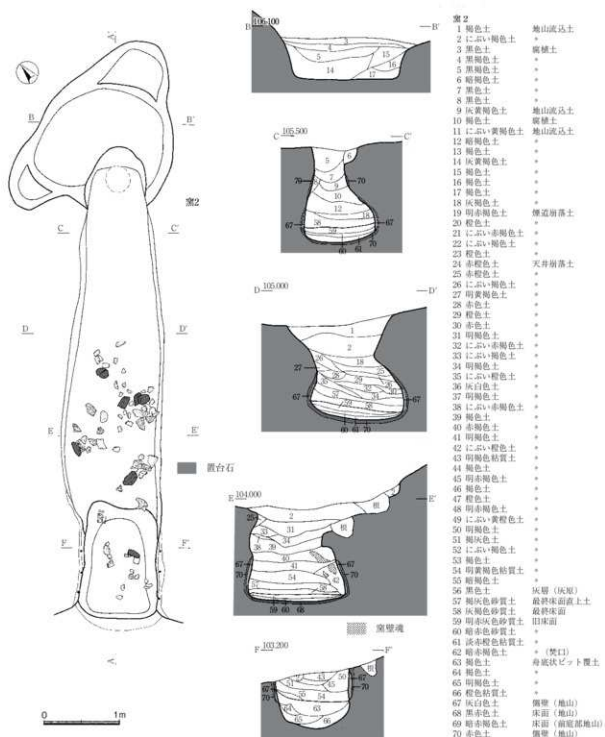
窯背部土坑は排煙口での作業に伴う作業場として使用されたと考えられており、以上の状況から、本窯での用途もこれに相当するものと想定される。

焼成部 側壁は改修が認められず、地山壁のままである。部位で被熱色調が異なる。焼成部後半は半還元により灰白色化し、壁面には顕著な凹凸がない。焼成部後半から下方は還元により青灰色化し、壁面が硬質化するものの、剥離のため凹凸が著しい。壁面外側の被熱赤色化部の範囲も窯1と比べ厚く、色調も赤味が強い。奥壁上部から排煙口では、灰白色化部は部分的に崩落し、赤色化部が露出する。

床面には、燃焼部から焼成部前半まで褐色砂質土(57層)が堆積し、この下層で奥壁付近まで還元により青味をおびる褐色砂質土(58層)が堆積する。この直下にも同質土が堆積し、被熱赤色化する部分(59層)と、吸炭し内部が黒色化する部分(60層)となる。これらの砂質土は焼結するがもろい。特に、最上層(57層)はややしまりが弱く、焼成部前半で厚く堆積し、焼成部後半に向かい途切れることから、焼成後に下層土(58層)が剥離し、下方へ流れ堆積した土層の可能性がある。このため、最終作業時の床面は下層砂質土(58層)上面に想定した。また、旧床面には、最終床面(58層)時の被熱により酸化したと考えられる明赤灰色砂質土(59層)を想定した。以上から、床面の改修は最低1回行なわれたと考えられる。なお、硬化面(58層)直上には明確な灰層は検出していない。これら砂質土(57~60層)の下位には、焼成部後半で被熱赤色化した粗砂を多く含む淡赤橙色粘質土(61層)が堆積し、この粘質土直下と焼成部前半で岩盤風化した地山となる。地山面は被熱赤色化して硬く締まる。特に焼成部前半は黒赤色を呈し、その範囲は側壁の還元青灰色化範囲とはほぼ重なる(第27図)。また、奥壁下の床面には径0.35mの円形の範囲で赤色化が顕著に認められた(第27図)。崩落した排煙口の直下にあたるものと考えられる。また、焼台(置台石)設置のための窪みは、明確には認められなかった。

燃焼部・焚口 側壁は部分的に青灰色を呈すものの灰白色が大半を占め、焼成部前半部分の状況とは異なる。被熱温度が低いためと考えられる。明確な改修跡は認められない。舟底状ビット上面には、焼成部から延長する硬化床面(58層)と焚口で灰層(56層)と被熱赤色化する床面(62・69層)を検出した。この硬化床面と灰層および被熱赤色化床面との層位的関係は、舟底状ビット上面中央部で途切れるため確認できなかった。また、旧床面(59層)は舟底状ビットに切られるため、検出できなかった。

そのほか、舟底状ビットに並行する両側壁上端面で炭化材列を検出した。片側3カ所で0.25~0.3m間



第28図 II地区 窯2実測図2 (縮尺1:50)

隔で並列する。壁面に沿っており、地山側壁端面の被熱赤色部と灰白色部の境に位置する。炭化材は長さ約0.04m、径約0.02mの棒状を呈し、垂直に刺し込まれる。これらは、燃焼部の仮設天井を支える構築部材の可能性が指摘されており、本来、生木であったものが、焼成時に被熱で炭化し、仮設天井除去後、差込部分のみが残存したと考えられる。しかし、仮設天井を焼成前に構築し、焼成後に除去とした場合、構築部材も焼成回数と同等数の設置が必要となる。このため、焼成後に必ず構築材を抜き取る場合に限り、本例は最終操業時の構築材となるが、周辺に抜き取り痕を明確には検出できなかった。よっ

て、本例の片側3本の計6本の構築材跡は、たとえば片側1本の2本一組による全3回の仮設天井構築といった、複数回の焼成に伴う構築材の累積の結果であるとも考えられる。

舟底状ビット 平面形は窯壁に沿った隅丸長方形を呈し、規模が1.46×0.94m、深さは0.36mを測る。短軸方向は窯体下場とほぼ同じ幅となる。底面や壁面の被熱は認められない。奥側には焼成部から延長する最終床面(58層)が上面を覆う。また、手前側には焚口の被熱床面(62層)が上面を覆う。両床面は連結しないため、窯出し時に部分的に掘削を受けた可能性もある。旧床面(59層)を切って構築される。覆土上層には、床面流出土とした灰褐色砂質土(57層)や窯壁小塊、灰層や焼土が混じる不均一な褐色土(63層)が水平に堆積する。下層には壁面である地山のブロックを含み、やや砂性がある明褐色土(65層)が水平に堆積する。両層は混入物の違いはあるが基本的に同質である。以上から、最終焼成時以前に掘削され、少なくとも前回焼成後に埋め戻されたと考えられる。このため、本窯においても、その用途は窯1同様に防湿機能である可能性が高い。

前庭部 焚口の窯体側壁は、手前の入り口に向かい傾斜して低くなる。舟底状ビットの前方壁面付近で側壁延長部が「ハ」字状に開いて床面に接地し、内側は平坦面となる。この平坦面が小規模な前庭部にあたるものと考えられ、南北幅で1.74m、窯体主軸に沿う東西幅は0.51mを測る。この直下から緩やかな傾斜地となり、灰原が形成される。この「ハ」字状に開く低い側壁と焚口側床面も被熱赤色化する。被熱床面には堆積土あるいは焼土化した床面形成土(62層)と地山(69層)がある。しかし、赤色部の厚みも薄く、半還元する灰白色部は認められないため、燃焼部よりは低温であったと考えられる。この被熱床面(62・69層)直上に、最終焼成時の灰層(56層)を検出した。

その他、本窯から0.6mの南方の山裾斜面部で半円状の平坦面を1カ所検出した。斜面部を掘削して構築され、床面はゆるやかに下方に傾斜して山裾斜面部とつながる。南北幅が1.9m、深さが0.2mを測る。覆土には本窯に対応する焼成後のかき出しに関連した焼土・炭化物を多く含む灰層(第29回灰原Ⅱ・Ⅴ層)が堆積する。焚口下方には、小規模な前庭部と想定した狭い平坦面しかなく、直下から緩やかな傾斜が始まり灰原が形成されることや、灰原内に整地や盛土などの造成が認められないため、この半円状の平坦面が作業場にあたるものと考えられる。

窯体内埋土 最終操業時の床面である硬化面(58層)および流出土(57層)直上には明確な炭化灰層は存在せず、天井崩落土が厚く堆積する。窯壁を多く含む土層を崩落単位とすれば、まず燃焼部～焼成部前半(54、50～53、49～46、45～43層)、次いで焼成部(39～41、34～38、31・32、26～30、18・24・25)もしくは排煙口・煙道(19～23層)が崩落する。その後、窯背部土坑とともに焼成部後半に、植物腐植土と考えられる黒色土(3～8・10層)や地山流込土(9・11～18層)が厚く堆積する。最終的に、やや灰色をおびる地山流込土(1・2層)が窪地を覆い完全に埋没する。このうち、焼成部天井崩落土は大別5回の崩落単位が認められ、初期の燃焼部崩落土のため、ほぼ水平に連続して堆積する。各崩落土間には地山流込土が間層として堆積しないことから、天井は比較的短期間のうちに窯体前方から連続して崩落したものと判断できる。また、焼成部後半は灰色を呈す地山流込土(1～2・9・11～17層)や腐植土である黒色土(3～8・10層)が堆積することから、天井崩落後は長期間窪地のままであったと考えられる。

遺物の出土状況 遺物は主に燃焼部から焼成部前半にかけて、最初期の天井崩落土(54層)や最終床面流出土(57層)から出土した。旧床面(59層)上面での出土はない。出土量は全体的に少ない。甕・壺などの大型品と坏や坏蓋などの小型品がある。完形品はなく、接合しない破片資料が主体となる。甕

や壺の大形破片は、棚板状に二次的に使用された可能性がある。須恵器の他には、置台石や置台粘土も出土した。置台石は人頭大の川原石を中心とするが、拳大のものもある。また、丸味を帯び扁平なものは少なく、稜をもつ角礫が多い。置台粘土は人頭大で丸味をおびる。出土分布は焼成部前半の南壁付近に集中する傾向が認められるが、おおむね点在する。そのほか、舟底状ビット内にも若干出土するが、小型品の破片を中心とするため、焼成前の埋め戻しの際に混入したものと判断される。

以上の出土状況から、窯体内は最終焼成後の窯出し直後の状況と想定される。遺物はその際に残置されたものであり、大形破片などは次回の焼成時に使用する焼成具であった可能性がある。この場合、本窯は操業途中に天井部が崩落し廃棄されたと考えられ、窯1の多量の廃棄遺物から想定される天井崩落前の窯廃棄とは性格が異なる。

灰原1・2 (図版第2・11、第25・29図)

窯1・2は隣接して並存するため、それぞれ形成された灰原も平面的に重なって形成されたと考えられ、厳密には分離して検出できなかった。そのため、窯1・2の両窯に対応する灰原という意味で、灰原1・2として呼称する。C6区に位置し、窯体下方の山裾斜面部に堆積する。窯1下方のC5区周辺は一部削平を受けて消失する。平面は窯1・2の主軸方向に沿って最大径をもつ不整形円形を呈し、0.9×0.8mの範囲で分布する。層厚は分布範囲の中央部で最大厚となり約0.45mを測り、下方では0.35mとなる。灰原が堆積する山裾斜面部は、トレンチ8下方が傾斜角度33°を測り、もっとも傾斜が強く、窯1主軸方向のトレンチ7以南は傾斜角度13°を測り、比較的緩やかとなる。堆積土は、色調・質・含有物などの差異により、大きくは11層に区分できる。その内容は下記のとおりである。

灰原Ⅰ層 (1層) 褐灰色土である。表土直下の灰原最上層に位置し、主に中央から北側にかけて堆積する。表土を多く含むことから、かく乱を受けている可能性もある。

灰原Ⅱ層 (3～6層) 黒色土を中心とする。窯2から下方約1.5mの範囲で、主に南側の半円状の平坦面直上に堆積する。窯2最終操業時のかき出した灰層と考えられる。

灰原Ⅲ層 (7・8層) 灰黄褐色土を中心とする。指頭程度の大粒の炭化物を多量に含む。窯2から1m下方の小範囲でのみ堆積する。窯2のかき出し土に想定される。

灰原Ⅳ層 (9層) 暗灰色土で、色調や土質はほぼ均一である。窯1・2から約4m下方の中央部に堆積する。

灰原Ⅴ層 (10層) ぶい黄橙色土で、炭化粒を多量に含む。窯2から南側約2m下方でのみ検出した。

灰原Ⅵ層 (11～13層) ぶい黄褐色土を中心とする。大粒の炭化粒を多量に含む。窯1から約4m下方で、北側に向かい堆積する。

灰原Ⅶ層 (14～16層) 灰黄色褐色土を中心とする。上層土(14層)は大粒の炭化粒を若干含む。下層土(15・16層)は地山流込土である。窯1から約2.5m下方の落ち込み状の平坦面内に堆積する。

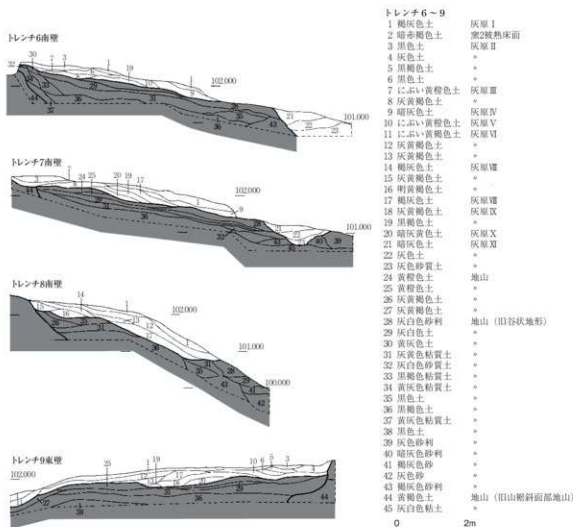
灰原Ⅷ層 (17層) 褐灰色土である。黄褐色土と炭層とのやや均一な混合土であり、炭化物を多量に含む。窯1から約3m下方に北側に向かい厚く堆積する。

灰原Ⅸ層 (18・19層) 黒褐色土を中心とする。主に窯1・2の中間から約1m下方に堆積する。

灰原Ⅹ層 (20層) 暗灰色土である。窯1から約2m下方に堆積し、灰原ではもっとも初期に堆積する。

灰原Ⅺ層 (21～23層) 灰色土・砂質土を中心とする。自然流路の覆土である。出土遺物は小破片のみであり、上方斜面の灰原からの滑落品である可能性が高い。

以上が大別した灰原堆積土の内容である。各土層において、遺物出土量および須恵器の形態・器種における差異は顕著には認められなかった。なお「陶製人形」(第55図2)は窯2より約4m下方の南西



第29図 II地区 灰原1・2 (トレンチ6～9) 土層断面図 (縮尺1:100)

側のIV層土中から出土した。灰原と窯本体の関係については、II層(3層)が窯2最終焼成時である灰層であることは、焚口部の被熱赤色化部(2層)の直上に堆積することから明確である。このII層以外は、窯体と連続して堆積しないため、直接各窯に帰属させることができない。そのため、窯かき出し土を中心とする灰原堆積土は運搬などにより、遠方へ廃棄されず、基本的に焚口から下方斜面部に順に押し出されて堆積するものと仮定した場合、堆積位置や堆積順および切り合い関係から、上層のII層～V層は窯2、より下層のVI～X層は窯1に伴う灰原と想定される。XI層はその堆積場所が自然流路内であるため、窯本体と直接対比できない。

以上の想定から、窯1と窯2の時間的先後関係については、窯1が先行して操業を開始し、廃絶後、窯2が操業を開始したものと考えられる。

なお、II層(3層)以外には明確な灰層のみの堆積は認められない。前述のとおり、灰原の大半は地山に近似し、砂性がほとんどない黄褐色土と多量の大粒炭化物との混合土として堆積し、その混合比率により色調が異なる。堆積時にはすでに混合土となっていると考えられるが、この黄褐色土は窯操業時のどの段階で形成され、灰層と混合したのかは不明である。

その他、灰原形成時の地山(24～27層)は層厚が薄く、西側で途切れることもあり、窯掘削土による盛土の可能性も想定した。しかし、しまりが強く、土質が均一でブロック土を含まない点、遺物が出土

しない点から、旧地形時の山裾斜面部の崩落土であると判断した。

窯3 (図版第3・13・15、第25・30図)

D8・E8区に位置する。並列する窯1・2の南側に存在し、直線距離で約18m離れる。構造は地下掘り抜き式と考えられる。窯体の大部分が中世の館(平坦面3)造成の際に大きく削平を受け消失し、焼成部床面の一部と燃焼部および焚口のみが残存する。構築される周辺の山裾斜面は岩盤層が主体となり、岩盤風化土が主体となる斜面の窯1・2とは異なる。窯体後半部は東側調査区外に延びており、焼成部後半から煙道部が残存するものと推測される。付属施設として、舟底状ピットと灰溜め用の土坑がある。本窯では、焼成部境のくびれ部と、床面の傾斜の変換点がほぼ一致することから、これをもって焼成部境とし、焼成部と燃焼部を区別した。窯2と比べ、規模はほぼ同様であると推測されるが、焼成部の傾斜が緩やかである点、舟底状ピットが小規模で形態が異なる点、焼成部境と床面傾斜変換点が一致する点などに差異が認められる。出土遺物から窯1・2より時間的に後出すると判断できる。

規模・形態 規模は削平のため検出値とする。窯体全長は6.38m、最大幅は焼成部の残存する床面で1.33m、側壁が残る燃焼部で1.12mを測る。窯体は山裾斜面下方の自然流路に直交するように掘り込まれ、主軸はN-68°-Eを測る。平面は残存する焼成部上半と燃焼部の側壁幅から、焼成部中央部から両端に向かい幅が若干すぼまる長方形を呈すものと推定される。また、燃焼部は直線的に伸びることから、焼成部境に弱いくびれ部をもつ可能性が高い。床面の傾斜は、燃焼部がほぼ水平であり、焼成部が21°の傾斜で緩やかに立ち上がる。調査区東端壁面で確認できる断面から、焼成部後半の天井高は推定で約1mとなる。側壁は左右対称ではなく、北側壁は床面から内傾して立ち上がるが、南側壁は直立したのち強く内傾する。側壁の傾斜角度から天井幅は狭く、断面形は隅丸三角形を呈すものと考えられる。燃焼部は直線的に開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈す。

排煙口・奥壁 調査区外東側に延長するため、不明である。表土の落ち込みから、天井の崩落が予想される。

焼成部 床面が1面のみ残存する。窯体主軸に直交してほぼ水平に削平されたため、残存する床面両端は側壁下端隅部であると想定される。床面は地山であり、灰白色に半還元し、硬く焼き締まる(第30図39層)が、下部の被熱赤色化は顕著ではない。床面には、焼台設置用の窪みなどは検出できなかった。

燃焼部・焚口 焼成部境付近の壁面は強い熱を受け、還元による青黒色を呈す地山壁(37層)とともに、外側の赤色化部(38層)も顕著に認められる。床面には硬化面を上下2面検出した。最終操業時の床面である上層硬化面は、焼結した明赤褐色土(28層)であり、内部は吸炭により黒味を帯び、下部は被熱によりさらに赤色化する。直上には最終焼成時に伴う灰層(18層)が堆積する。この床面直上および灰層中から遺物が若干出土した。なお、硬化面に後続する灰黄褐色土(27層)は、後述する土坑の堆積土(23~26層)と同様に多量の大粒炭化物を含むことから、最終焼成以前の灰層と考えられる。旧床面である下層硬化面は焼結した赤灰色砂質土(31層)であり、内部は吸炭により黒色化する。舟底状ピットに切られる。直上には焼成時の灰層(29層)が堆積する。この下層床面直上および灰層中からは、須恵器を主体とする多量の遺物が出土した。以上から、床面の改修は最低1回認められる。側壁の改修は残存する側壁下部では改修は確認できず、構築当初の地山壁のままである。

舟底状ピット 焼成部境付近の燃焼部後方に位置する。平面形は窯体主軸方向に直交する南北方向に長軸をもつ楕円形を呈し、両側壁に接する。規模は1.16×8.1m、深さは0.08mを測り、窯1・2のものと比較して小規模あり、長軸方向も異なる。旧床面である硬化面(31層)を掘削する。覆土は単層(30

層)で、炭化物・焼土粒とともに地山岩盤土のブロックを含み均一ではない。上面には最終操業時の床面(28層)が覆う。このことから、旧床面時の焼成後に硬化面をはずし、掘削あるいは掘り返されたのち、上層の最終床面かさ上げ時に埋め戻されたものと考えられる。

前庭部 焚口手前には、前庭部と認識した段状の施設とこれに連結する大形土坑を検出した。前庭部は平面形が焚口方向に弧をもつ半円形を呈す。窯体主軸方向を中心として左右対称ではなく、やや北側に広がる。規模は、窯体主軸方向が1.14m、南北方向が1.8m、下層床面からの深さは0.17mを測る。焚口に接する壁面のみ被熱赤色化する。大形土坑は平面形が楕円形を呈し、南北方向が長軸となる。規模は3.06×2.28m、深さは下層床面から1.08mを測る。底面は窯体主軸上に位置するが、上面径に対して極めて狭く、断面形はすり鉢形を呈す。西南側に段を有す。これら両遺構には、同一覆土が流れ込み堆積することから、時間的・機能的にも一連の遺構であると考えられる。覆土(21・23~27・32層)には大粒の炭化物を極めて多量に含むことから、本土坑は灰溜め用の施設と考えられる。この堆積土は灰層(炭化物)と地山に近似する黄褐色土との混合土であり、砂性がなく、焼土粒や窯壁塊をほとんど含まない。他質土による間層も挟まず、炭化物の含有量もほぼ同量であるが、黄褐色土の混合割合による色調の違いにより、上下4層に分層できる。さらに、燃焼部に残る灰層を含め、床面との対応を想定すれば、最終焼成時の灰層(18層)、最終床面に対応する灰層(20・21・23・24層)、下層床面最終焼成時の灰層(29層)、下層床面に対応する灰層(26・27層)、下層床面以前の灰層(32層)の4区分できる。なお、土坑底面付近に堆積する最下層(34~36層)は、炭化物をほとんど含まず、土質や色調が地山土(41層)と近似するため、土坑掘削時或使用初期の流込土あるいは壁崩落土と考えられる。

そのほか、土坑内で最終床面時の灰層(23層)堆積後に掘削された柱穴状のピットを1基検出した。窯体主軸延長上に位置し、規模は径0.29m、深さ0.42mを測る。内部からは人頭大の山礫が出土した。覆土は周辺の堆積灰層と同様である。柱穴とすれば、この灰溜め土坑の覆土最上層である灰層(21層)が上面に堆積することや山礫の出土から、比較的短期間のうちに柱材を抜いたものと考えられる。同時に、灰層形成に時間的段階が存在することとなり、最終床面時の灰層は上層(20・21層)と下層(23・24層)に分離される。なお、周辺には同様のピットは検出できなかったが、灰層中の掘り込みのため、遺構識別が困難であり、確認できなかった可能性がある。

窯体内埋土 焼成部後半で調査区外に延長する埋土(15層)が残存していた。この埋土は床面直上に堆積し、窯壁塊をほとんど含まず、地山に近似する色調や弱いしまりから、地山流込土であると考えられ、窯1・2でも類似堆積土が認められる。窯廃後の初期に排煙口から流れ込んで堆積したと推察され、この時点では天井が残存していた可能性が高い。

遺物出土状況 遺物は主に燃焼部から出土し、新旧の床面ごとに分離できる。最終操業時の床面直上(28層)とその灰層(18層)からは、須恵器の小型品を主体とし、酸化により赤色化した破片が若干出土した。窯出しの際に遺棄されたものと考えられる。下層床面(31層)とその灰層(29層)からは、同じく小型品を主体とする須恵器が多量に出土した。特に完形品の坏蓋が多い。焼成不良品ではないものの、焼き歪みが顕著に認められる。これらは、床面改修のかさ上げ時にもそのまま残存していたこととなり、窯出し後の遺棄と考えられる。そのほか、焼成部後半の床面直上に残存する堆積土(15層)からは、須恵器甕の大形破片が1点のみ出土した。棚板状に二次使用が想定され、地山流込に伴い前方に移動したのと考えられる。なお、前庭部や土坑内に堆積する灰層(20・21、23~27層)からの出土遺物は比較的少ない。遺物出土の主体は自然流路内に堆積する灰原3となる。このことから、本窯において

は、不用品とかき出した灰層の廃棄場所が異なる可能性もうかがえる。

灰原3 (図版第13・15、第24・25・30・31図)

窯3に対応する灰原という意味で、灰原3と呼称する。C7・D7・D8区に位置し、窯体下方の山裾斜面部から自然流路内にかけて堆積する。窯3窯体同様に中世の削平を部分的に受ける。南側はさらに調査区外に延長する。分布範囲は焚口から下方に向かい半円形に広がるが、自然流路内で途切れ、以西には広がらない。自然流路内では流出のためやや北側に広がる。南北方向が16.4m、東西方向が8.4mを測り、層厚は、山裾斜面部が0.42m、自然流路内が0.66mを測る。堆積面の傾斜角度は、窯3下方に位置する灰溜め用の土坑下が21°、トレンチ4の自然流路上位が17°を測る。堆積土は、色調・質・含有物などの差異により、大きくは5区分できる。その内容は下記のとおりである。

灰原Ⅰ層 (2・3層) 焼土層 (2層) および灰層 (3層) で構成される。灰溜め用の土坑の北側のみ堆積する。

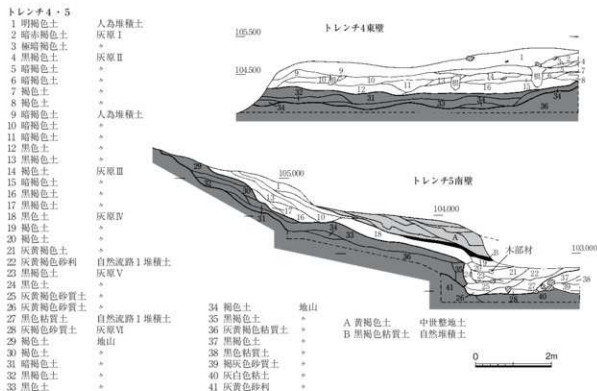
灰原Ⅱ層 (5～8層) 暗褐色土を中心とする。灰溜め土坑の上層土 (第30図23・24層) に対応する。

灰原Ⅲ層 (14～17層) 黒褐色土を中心とする。ほぼ均一な土層である。

灰原Ⅳ層 (18層) 黒色土を中心とする。植物腐植土層を主体とする。

灰原Ⅴ層 (19～21・23～26・27層) 暗褐色砂質土および砂利である。自然河川の堆積層であり、遺物の出土がもっとも多い。左岸肩部からの地山の流れ込みを間層として、上層 (19～21層)、中層 (23～26層)、下層 (28層) に細分できる。

以上が大別した灰原堆積土の内容である。出土量はⅤ層がもっとも多く、Ⅱ・Ⅳ層が次ぐ。Ⅰ・Ⅲ層は出土遺物が少ない。なお、窯3から約10m北西の自然流路内において、Ⅴ中層から、長さ0.5～1.8mの柱状の加工部材および板材が約5mの範囲内から集中して出土した (第25図)。この加工部材は窯操業に関連する構築部材の可能性がある。出土層位から窯3の操業期間内に埋没するが、比較的重さがあるため、上流から流出したものではないと判断される。出土状況から集中廃棄とともに灰原縁辺での水漬け保存の可能性も考えられる。

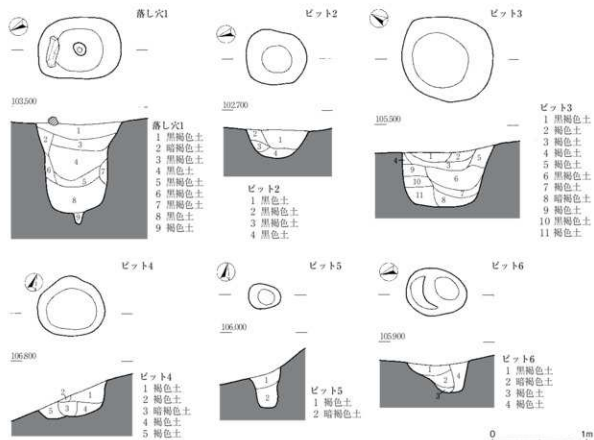


第31図 II地区 灰原3 (トレンチ4・5) 土層断面図 (縮尺1:100)

堆積順および切り合い関係による各層の時間的先後関係については、まず、窯3北側の山裾斜面の落ち込み部にⅢ層および自然流路内のV中・下層が堆積したのち、自然流路上位斜面にⅣ層土とこの流込土と考えるV上・中層が堆積する。そののち、窯体近辺にⅡ層、次いでⅠ層の順に堆積する。Ⅰ層は最上層であり、最終床面時の灰原となる。その直下のⅡ層も、灰溜め用の土坑上層堆積土(第30図23・24層)とはほぼ同一であるため、その堆積段階から最終床面時に対応する。また最初期に堆積するⅢ層と後半に堆積するⅡ層では、窯3の近辺では連続して堆積するが(第31図トレンチ5)、北側では遺物を含まず、灰原ではない地山流込土の間層(トレンチ4-9~13層)が堆積する。このため、堆積時間差はⅠ層・Ⅱ層間と比べれば長いものと考えられ、Ⅲ層は窯3下層床面時に対応すると想定できる。また、Ⅱ層の西側上面は中世の削平を受けた可能性があるが、Ⅳ層土直上には遺物を含まない薄い植物腐植土(トレンチ4-B層)が堆積する。この土層は自然流路の左岸上面まで連続して堆積する(第24図トレンチ2-V層)自然堆積層であり、この上面から中世の盛土による造成が行われる。そのため、Ⅳ層およびⅤ層の堆積段階で、この周辺での灰原形成は終了したこととなり、最終床面時の灰原であるⅠ層・Ⅱ層の堆積範囲は極めて狭いものとなる。さらには、最上層のⅠ層土は最終操業時の灰原である可能性がより高くなる。

落し穴 (図版第18、第32図)

D 4区に位置し、標高約103.4mを測る丘陵尾根斜面部で単独検出した。遺構上面の削平は認められない。規模は0.88×0.67m、深さは底面が0.93mを測る。平面形は隅丸長方形を呈す。主軸方向はN-19°-Eであり、等高線にほぼ平行する。断面は壁面崩落のため上部でやや開く他は、壁面がほぼ直立



第32図 II地区 落し穴1、ピット2~5実測図(縮尺1:40)

する。底面中央部には、直径0.12m、底面からの深さ0.13mの小穴が1ヵ所付属する。この底面の小穴は逆茂木状の杭設置のためと想定されるが、内部には木質部が残存しておらず、覆土が地山流込土を主体とするため、杭材を撤去した可能性もある。その他、遺構上面北側で、短軸方向に平行する長さ約0.3mの細長い山石を検出した。直接遺構に伴うものか不明である。覆土には、しまりが弱く、植物腐植土と考えられる黒色土が主に堆積し、黄褐色土などの地山ブロックはほとんど含まない。このため、人為的な埋め戻しではなく自然堆積と考えられる。出土遺物はない。時期は縄文時代と考えられる。

ビット群（ビット3～9）（図版第18、第32図）

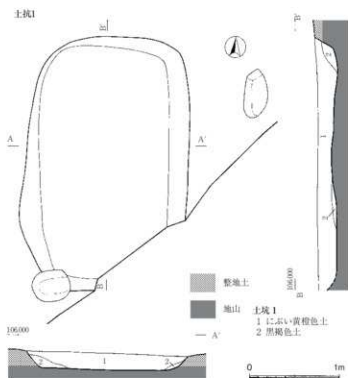
D5区に位置する。落し穴の南側、窯1・2の北側の山裾斜面部で7基検出した。ビット3～9からなる。規模の規格制や配置の規則性は認められない。土坑状（ビット3）、柱穴状（ビット5・6・8）、浅皿状（ビット4・7・9など）のものがある。遺物の出土はなく、用途や時期も不明である。

ビット2（図版第18、第32図）

D6区に位置し、窯2の南側、山裾斜面下端の傾斜変換点付近に存在する。単独で検出した。規模は0.63×0.58m、深さは0.29mを測る。平面は楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈し、壁が開いて立ち上がる。底面付近からサワクルミが2点出土した。自然流路肩部で山水が染み出る場所に構築されることから、果肉を剥くために、クルミを水付けて保管する穴、つまり広義の貯蔵穴である可能性が高い。出土したクルミは取り残しと考えられる。遺構検出面は中世の造成面より下位の地山面であることから、時期は窟跡と同様の8世紀末～9世紀初頭に位置づけられる。

II 谷部の遺構

平坦面1（第2図・第23図）



第33図 II地区 土坑1実測図（縮尺1:40）

B9区に位置する。館関連の遺構のなかで、もっとも標高が高く、約105.5mを測る。北側中央部で縁辺が屈折する。調査区内は北側のごく一部の範囲であるが、現況測量図（第2図）によれば、東西幅約29m、南北幅約14mを測り、館関連施設のなかで最大の面積を有す平坦面である。建物などの存在が予想されるが、調査区内では土坑1と礎石の可能性のある川原石を2点検出したに止まる。遺構面は表土直下の整地土上面の1面である。

土坑1（第33図）

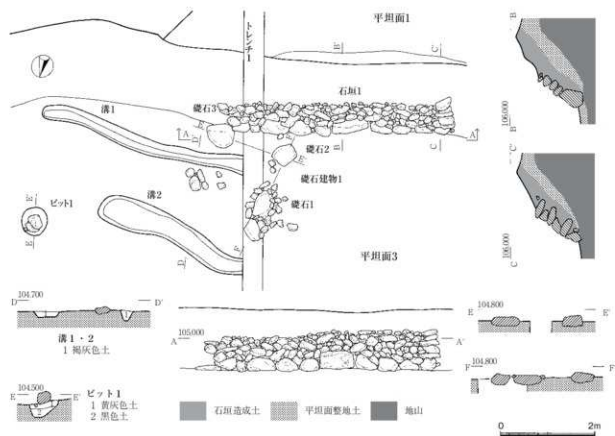
B9区に位置し、平坦面1内に存在する。整地土上面で検出した。南側の一部は調査区外に延びる。平面形は隅丸長方形を呈し、南北方向に長軸をもつ。規模は2.88×1.86m、深さは0.18mを測る。覆土は焼土塊と大粒の炭化物を多量に含む黄褐色土のほは

単層である。この黄褐色土は遺構面からやや盛り上がり、遺構掘り方よりやや広がる点や周辺には被熱痕や焚火跡は認められない点、覆土が周辺の遺構面である地山黒褐色土ではない点から、この覆土のみが他所から移動され、埋め戻されたと考えられる。出土遺物はない。

そのほか、周辺で人頭大の扁平な川原石を2点検出した。川原石の長軸方向が一致しないため、別個の礎石建物の隅礎石となる可能性がある。

石垣1 (図版第16、第24・34図)

平坦面1の北側斜面部に存在する。全長49m、高さ0.88mを測る。延長方向はN-68°-Eであり、傾斜角度は56°を測る。形態は基段に直径約0.4-0.7mを測る大形の山礫を配置し、上段に拳大~人頭大の山石を密接して積み上げる。その際に、礫の長軸を傾けて組むものが多い。西端部は扁平な山石・河原石の側面を表面として5段積み上げ、端面を揃えて直線的に積み上げる。石垣の上端部は揃わず、西端部が0.2m程度高い。石垣造成土(裏込土)には基段部のみ暗褐色土(第24図トレンチ1-8層)を用いるが、上段部には橙色土(同7層)を用いて、地山傾斜に沿って平坦面上端まで一度に造成する。この橙色土は石垣部にもみ用いられ、石垣2の造成土(裏込土)と近似する。また、平坦面3の造成土(整地土)とは明確に異なり、粒子が細かく、色調も明瞭であることから造成土の選択性もうかがえる。造成土の範囲は、西側では石垣西端部に沿って直線的に途切れるが、東側では石垣残存部以上に延びる。石材の欠落も認められることから、かく乱により石垣のみ消失したものと判断される。石垣上端部から平坦面1までは約0.32mの造成土のみの斜面部となる。また、石垣が存在する範囲では、斜面上端部は造成土により断面が山形となり、平坦面1より約0.12m盛り上がる。同様な例は、本石垣より3.5m西側



第34図 II地区 石垣1実測図(縮尺1:80)

でも認められ、同時に薄く橙色土の盛土が残存するため、この部分にも石垣が存在していた可能性がある。石垣中や造成土中から遺物は出土していない。

平坦部2 (図版第16、第23図)

A9・B9区に位置する。平坦面1北西側斜面下に存在する。北西部分を大きく削平される。平坦面3とは標高が同じで連続するが、石垣1西端部と石垣2東端部付近の幅が狭くなることから、この部分から西側を平坦部2、東側を平坦部3と分離した。傾斜堆積する地山に整地が行われる。本平坦面上には遺構は検出していない。斜面部に石垣2が構築される。遺物は表土から土師質皿片(第56図2)と越前焼の小片が出土した。

平坦部3 (図版第16・18、第2・23・24・34図)

C8・D8・C9区に位置する。平坦部2の西側に存在する。II地区の検出した平坦面のうち、もっとも面積が広い。標高は約104.5mを測り、平坦面1との比高差は約1mである。D8区を中心とする西側山裾部は、整地土である黄褐色土を掘削した場所と考えられる。その際に、窯3およびその周辺も地山岩盤層まで掘削し緩斜面とする。北側縁部はC8杭の南側で屈折し、現況測量図(第2図)によれば調査区外も含め、平面形が北側辺約15m、南側辺約25mを測る台形を呈している。この北側縁部を中心として黄褐色土の整地造成が行なわれる。C8区西側部では山裾斜面から北西側に向かい、緩やかに傾斜する整地土が累重する。(第24図トレンチ2・3-III層、第31図トレンチ4-A層)。この下位には自然流路が存在し、大規模な造成により埋没させる。遺構面は表土直下の整地土上面の1面のみであり、石垣1周辺で遺構が集中し、礎石建物1・溝1〜7・ピット1を検出した。整地土からの遺物は、窯3周辺の掘削時の整地土(第24図トレンチ1-20・21層)から須恵器片が多く出土した以外は、越前焼や土師質皿の小片が出土したのみである。その他、表土から土師質皿片(第56図1・4・5)や越前焼小片が若干出土した。

礎石建物1 (図版第16・18、第34図)

平坦部3の西側、石垣1の北側に存在する。礎石1〜3からなる。いずれも掘り方は検出できず、礎石幅の半分ほどが整地土に埋置される。礎石1は最大径0.6mを測る、楕円形の川原石を配し、北側には最大径0.44mの山石も並置する。周辺には拳大から人頭大の山石を配置するが、これらに混在して縄文時代の磨製石斧(第57図2)が出土した。礎石2・3はともに、扁平な円形の山石を単独で配置する。礎石3は石垣1の東端部に一部重なる。また、礎石1の西側、礎石3の北側に山石が数個集中することから、礎石1と同様な周辺隙をもつ礎石であった可能性もある。礎石1・2間は約1.2m、礎石2・3間は約1.4mを測る。小型建物の可能性が高いと考えられるが明確ではなく、各柱方向は石垣1〜3と平行や直交もしない。また、礎石2は整地土に含まれる自然石である可能性も否定できない。

溝1〜6 (第24図・第34図)

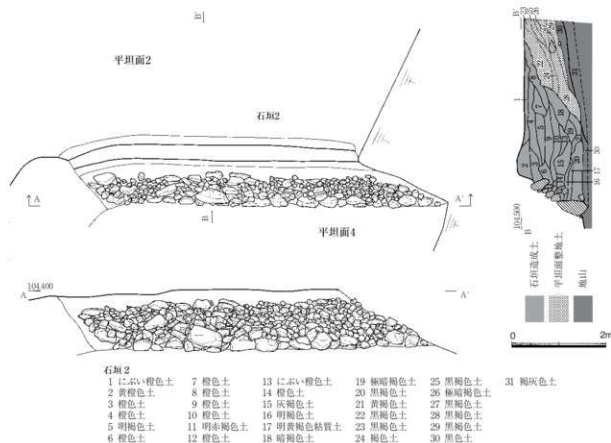
平坦面3のほぼ中央部に存在する。いずれも途切れる。形態や覆土により、溝1〜3と溝4〜6に2大別でき、それぞれは切り合わない。溝1〜3は不定形で部分的に蛇行する。幅が0.4〜0.7m、深さが0.16〜0.22mを測る。覆土は整地土をしみ状に含む灰褐色土であり、焼土粒や炭化物を若干含む。溝4〜6は幅狭で直線的に延びる。幅0.4、深さ0.08〜0.12を測る。覆土は灰褐色土である。切り合い関係は溝3が溝4を切る。遺物はいずれも出土していない。覆土の灰褐色土は表土に近似しており、溝の方向なども平坦面や石垣の方向と一致しないことから、館関連の遺構ではなく、近世以降の比較的新しい遺構である可能性が高い。

ビット1 (第34図)

平坦部3のほぼ中央部に存在し、整地土上面で単独で検出した。平面が楕円形を呈し、規模が0.58×0.52m、深さは0.36mを測る。上層に人頭大の山石が2点配置される。覆土は整地土に近似する黒色土を基本とし、ほぼ水平に堆積する。柱材などの痕跡は認められない。遺物は出土していない。

石垣2 (図版第16～18、第35図)

平坦面2の斜面部に存在する。延長方向はN-77°-Eであり、石垣1とはほぼ並行する。石垣の傾斜は58°を測る。西側部分は後世の削平のため消失するが、検出値で全長6.7m、高さが1.1mを測る。形態は基段に径約0.3～0.5mのやや大形の山礫を配置し、上段に拳大を中心とする山石の長軸を傾けて積み上げる。基段以外にも部分的に大形礫を配置する。石垣上端は水平ではなく、西端部が約0.2m高い。石垣3斜面部と接する東端部はかく乱を受けており、基段の石材を欠失する。また、石垣1の西端部のような意図的な石材選択や配置は認められない。石垣造成土(裏込土)には、橙色土など(1～21層)を中心に用いる。地山斜面から石垣までの造成範囲は、石垣下端では約1.6m、上端では約3mを測る。石垣1より広範囲で厚く、石垣と平坦面を同時に造成した可能性がある。また、土質や色調の差異による造成単位が明確であり、ほぼ水平に順次堆積する。この造成土は石垣部しか用いられておらず、石垣東端の石垣3との接合部では直線的に途切れる。石垣上端から平坦面2までは約0.2mの石垣のない斜面部となる。また、石垣が存在する範囲において斜面上端部は、造成土により断面台形の上端幅が0.3m、高さ0.16mの突出部となる。石垣中からは磁器小片が、盛土最下層(20層)からは越前焼播鉢片(第56図7)が出土した。播鉢の時期はおおむね16世紀後半に位置づけられる。



第35図 II地区 石垣2実測図(縮尺1:80)

石垣3 (図版第17・18、第24・36図)

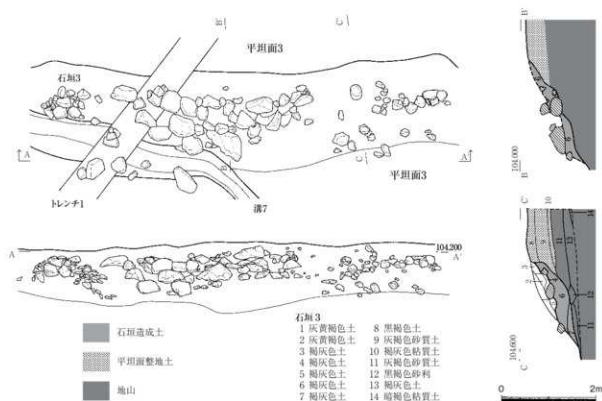
平坦部3に北西斜面部に存在する。延長方向は $N-31^{\circ}-E$ であり、石垣1・2とは列方向が平行や直交もしない。かく乱を受けており、礫の移動や欠失が顕著に認められる。平坦部3の北西側斜面全体におよぶと考えられ、西端で石垣2と接する。検出値で全長が9.6m、高さが1mを測る。傾斜角度は 30° である。中央部付近には、比較的大形の0.5~0.7m大の川原石を中心とする石材が集中し、東西両側は拳大程度の山石がまばらに残存する。石垣1・2で認められる基段列の大形礫も認められない。石垣造成土(裏込土)は灰褐色土(第24図トレンチ1-3層、第36図6層)である。土層観察から、水平堆積する平坦部3の盛土および地山を掘削して、造成土を込め石材を配置する。中央部の大形石材集中部分では、積み上げではなく、並置されるものも認められる。遺物は出土していない。石垣1・2と比較して、形態や構造および造成土などが大きく異なるが、時間的・施設的関連は不明である。

平坦部4 (図版第17・18、第23図)

B7・B8区に位置し、石垣2・3の下位に存在する。西側部分は削平により消失し、北側端部は傾斜し溝16が東西方向に走る。石垣2・3の形状にあわせて、西端部と南端部が屈折する。標高は103.2mを測る。地山を掘削し整地される。遺物は表土中から越前焼小片が1点出土したに止まる。

溝7 (第23・36図)

平坦部3・4の北側縁辺部に存在する。幅が0.5~1.0mを測り、深さが0.2mを測る。小規模の排水溝と考えられる。東側部分は後世の削平を受ける。標高が高い東側の平坦部3部分では幅が狭い。覆土は東側部分では粘性の強い灰黄色褐色土で、西側は砂利を多く含む灰褐色砂質土である。この覆土の違いは、構築面の造成土に関連するものと考えられる。なお、東側部分では、より小規模な溝(溝8)が並列して部分的に存在する。いずれからも遺物は出土していない。(山本)



第2節 遺物

Ⅱ地区で出土した遺物には、窯跡や灰原出土の須恵器や窯関連遺物、および中世の館跡周辺で出土した土師質皿および陶磁器類があり、これに若干の石器・石製品が加わる。以下、種類ごとに説明する。

I 須恵器

藤巻多珍坊遺跡では、3基の登り窯が検出され、それに伴う2カ所の灰原から、膨大な数の須恵器が出土した。

窯1の窯体内には、最終操業に伴う製品が出土し、本窯群の器種構成・操業時期を示す好資料といえる。また、灰原1・2からは、少数ながら特殊な製品も出土した。

3号窯からは、完形品に復元できる製品がもっとも多く出土しており、窯1・2とは器種構成に異質な点が見られる。特に耳付瓶が突出して数多く出土しており、窯1・2とは様相が異なる。

なお、出土遺物の整理作業においては、残存率の高い個体を優先して図化作業を行った。報告に際しては、これらを優先して掲載した。

本節では、窯1～3で製作された製品の器種構成に配慮しつつ、各窯の製品特徴を捉えながら、出土須恵器について報告を行う。なお、藤巻窯の資料は、平成16年福井豪雨の際、多大な被害を受けており、一部資料が遺失していることを考慮願いたい。

(1) 出土須恵器の器種と構成

窯1～3から出土した須恵器の器種には、坏A・B、皿A・B、壺A・B、坏蓋、高坏、壺蓋、壺、横瓶、平瓶1)、長頸瓶、耳付瓶、鉢、甕に加えて、陶馬、人形、鳥形製品などの特殊品、焼成具としては、破損品の転用品、専用焼台、粘土塊などがある。なお、長胴甕は、本来、土師器で記載すべきところであるが、出土品は完全に須恵質の製品ばかりであり、他に土師器を併用して焼成した痕跡は認められないため、甕類として同一に取り扱っている。

特殊品、焼成具を除く、破片を含めた通常製品の出土総点数は第2表の通りである。また、出土地点ごとの出土品の構成比率を示すグラフが、第37図である。食膳具については、皿、無台坏類、有台坏類、蓋に区分し、坏と壺の区別はしていない。

まず、各出土地点の様相を述べておく。

窯1からは最終操業に伴うと考えられる製品群が出土している。しかし、出土した製品は、一部であり、最終操業時の構成が完全に反映されていない。

窯2の出土品は、操業後の廃棄品であり破片を中心とする。窯1・2が操業していた期間の廃棄品の平均的な数値を示しているのが、灰原1・2のものである。窯3は、窯の焚口付近から灰原の製品を含めている。灰原出土品は、自然流路を中心とし、層序分離は困難であったため、すべて一括して取り扱っている。

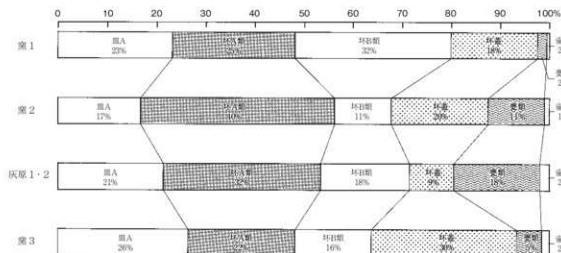
以上の注意すべき要素を考慮しても、おおよそ生産の傾向は把握できよう。

第37図のように、窯跡群の器種構成は、食膳具の生産比率が非常に高い特徴がある。

窯1の比率は食膳具が9割を占める。あくまで残存していた製品の比率であり、本来の生産数を示す値ではない。しかし、もっとも平均的な灰原1・2の比率を見ても食膳具が全体の8割を超える。

第1表 出土地別製品数一覧表

	皿A	坏A類	坏B類	坏蓋	甕類	壺類	高杯	耳付瓶	不明	総点数
窯1	38	41	52	29	3	1	0	0	178	342
窯2	16	38	11	19	11	1	0	0	93	189
灰原1・2	385	577	327	163	317	34	2	1	5242	7048
窯3	753	621	445	843	145	45	6	6	3667	6531



第37図 出土地別器種構成図

窯3では、甕など貯蔵具の生産比率がさらに減少する。特に、皿Aの比率は、全体の生産比率で見ると微増であるが、無台坏、有台坏が減少する中で、生産数が増加し、食膳具の中心となっている。

器種構成については、時期的な問題もたぶんに含まれている。このため、もう一度、後に取り上げることにして、次に出土製品の報告を行う。

(2) 窯1出土の須恵器

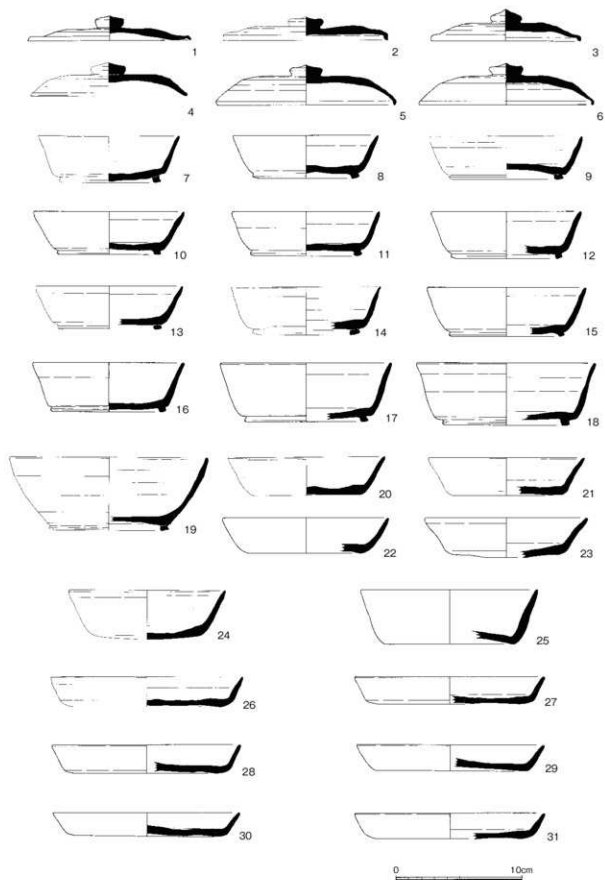
すでに報告したとおり、窯1からは、最終焼成時品と推定される一群が存在する。これらから報告を行う。

窯1から出土した器種には、坏A・B、皿A、碗B、坏蓋、壺蓋、壺、甕がある。破片を含めた個体数は、坏A41点、坏B52点、坏蓋29点、皿A38点、碗B1点、甕3点、壺1点、壺蓋1点、不明178点である。先にも述べたが、福井豪雨の際、出土状況で確認できる遺物の内、約30点を遺失している。上述の出土器種および点数には、これらは含まれていない。

坏蓋 (図版第19、第38図1～6)

出土品全体で考えると、蓋は、法量で、I群(口径10.4～13.8cm、器高2.0～4.0cm)、II群(口径14.0～16.8cm、器高2.0～5.0cm)、III群(口径17.0cm～、器高2.5～5.0cm)に大別できる。III群には、口径20.0cmを超えるものも含まれているが、確認されたのはわずか2点である。

器形からは、口縁部から天井までが扁平な器形の扁平タイプ、平坦な天井をもつ平笠タイプ、ほとんど天井に平坦面のない山笠タイプに大別できる。これらのタイプは、法量別による各群にすべて存在している。このうち、窯1からは、主にI・II群の製品が出土している。宝珠形つまみをもち、すべての個体に、回転ヘラ切り後、天井の回転ヘラ削りが施される。内面に仕上げナデも認められる。



第38圖 II地区 窯1出土須惠器実測図(縮尺1:3)

坏B (図版第19、第38図7～18)

7～14のような、口径12.0cm以下の小型品と、15～18のような、口径12.0～14.2cmの中型品が出土している。すべて底部は回転ヘラ切り後未調整で、底部内面に仕上げナデを施すもの(11・16)もわずかに存在する。底部から口縁部への立ち上がりは直斜状に伸びる。高台はすべて貼り付けによる。形態は踏ん張る形のものが多いが、15のように直線的なものも存在する。16には、底部外面に放射状に並んだ爪形圧痕が認められる。

埴B (図版第19、第38図19)

1点だけ出土している。口縁の立ち上がりは内湾するが、あまり広がらない。底部は糸切りで、痕跡が明瞭に残っている。底部は水平で直線的である。高台は貼り付けで、丁寧な回転ナデで仕上げられる。

坏A (図版第19・20、第38図20～25)

口径12.4～13.0cm、器高3.0cm前後のものをもっとも多く出土している。底部から口縁部への立ち上がりは直斜状に伸びるものが多い。底面はほとんどのものが水平であるが、丸みをおびるもの(23・24)も存在する。底部はヘラ切り後、仕上げナデが施されるものも多い。

皿A (図版第21、第38図26～31)

口径15.0cm前後、器高2.1～2.3cmのものをもっとも多く出土している。底部から口縁部への立ち上がりは直斜状に伸びるものが多く、あまり広がらない。底部はやや薄い。底部はヘラ切り後、仕上げナデが施されるものもある。

(3) 窯2、灰原1・2出土の須恵器

窯2出土品は、窯1よりも少なく、図化不能な細片が多い。また、灰原1・2出土品との接合関係も多く認められる。よって、灰原1・2出土品とあわせて報告を行う。

坏蓋 (図版第19、第39図1～4)

I～III群すべての法量の製品が出土している。もっとも出土数が多いのはII群である。器形では、平笠タイプがもっとも多い。宝珠形つまみをもち、ほぼすべての個体に、回転ヘラ切り後、天井の回転ヘラ削りが施される。内面に仕上げナデも認められる。

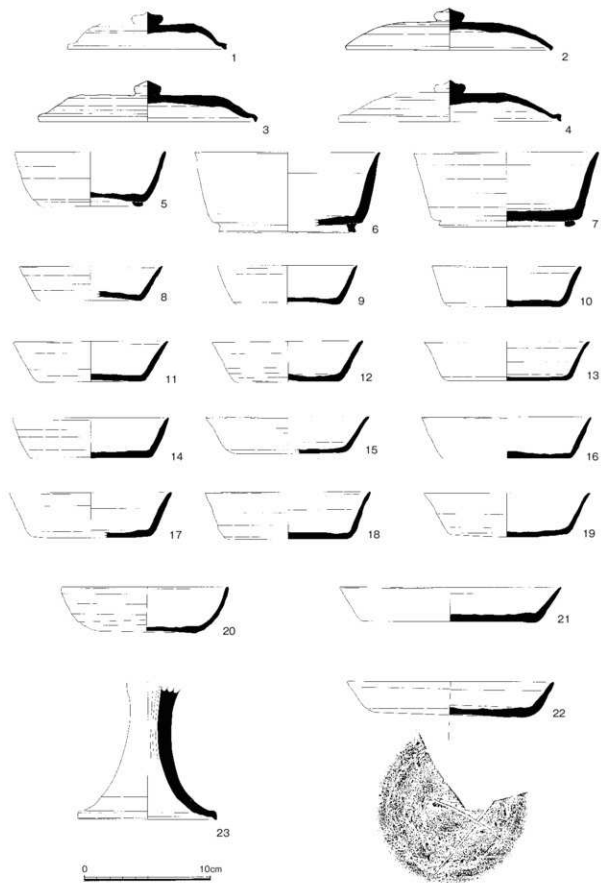
重ね焼きについては、IIa類、IIb類とも確認できる²⁾。ただし、図化不能であったが、窯2出土品のうち1点にI類重ね焼きを示す降灰痕が残存していることを確認している。

坏B (図版第19、第39図5～7)

出土品でもっとも多いのは口径14.0cmの中型品である。ここでは、それ以外のものを選別図化している。36は、口径11.8cmの小型品で、高台底面にスノコ痕が認められる。底部はやや薄い。37・38はともに器壁全体が厚く、口縁の立ち上がりも直斜状である。藤巻窯出土品ではもっとも古相を示す。38は底部外面にスノコ痕が残存している。

坏A (図版第20、第39図8～19)

口径11.0～13.0cm、器高3.0cm前後のものをもっとも多く出土している。底部から口縁部への立ち上がりは直斜状に伸びるものが多いが、口縁端部で外反する個体も多い。底部はヘラ切り後、仕上げナデを施される個体も多い。また、一部にはヘラ削りも認められる。少数ながら、底部にスノコ痕が認められるものも存在する。



第39図 II地区 灰原1・2出土須恵器実測図1 (縮尺1:3)

椀A (図版第20、第39図20)

少量出土している。口径は13.0cmである。口縁の立ち上がりは内湾するが、あまり広がらない。器壁は薄い。底部はヘラ削り調整である。明らかに坏Aと異なり、金属器の影響を受けた可能性がある。

皿A (図版第21、第39図21・22)

口径15.0cm前後のものも多く出土する。しかし、21・22のように、口径16cmを超える製品も一定量出土している。底部は1号窟出土品と比較しても厚く、器壁全体がふ厚い。底部は仕上げナデが施される個体が多い。また、スノコ痕も多数見受けられる。やや古相を示す製品である。

高坏 (図版第21、第39図23)

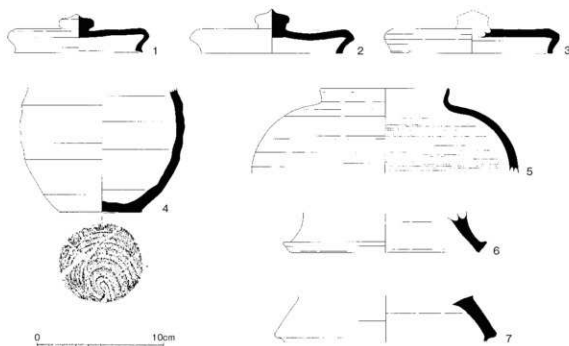
出土数は極めて少ない。図化し得たのは1点のみである。23は、底径10.8cmである。脚部内面には、絞りの痕跡が認められる。

壺蓋 (図版第21、第40図1～3)

出土数は少ない。口径は、10.0cmから12.7cmとばらつきがある。1は、口縁端部に内傾面を持ち、くぼみがある。天井にはヘラ削りが認められる。1・3は、内面に仕上げナデが認められる。

壺 (図版第21、第40図4～7、第41図1・2)

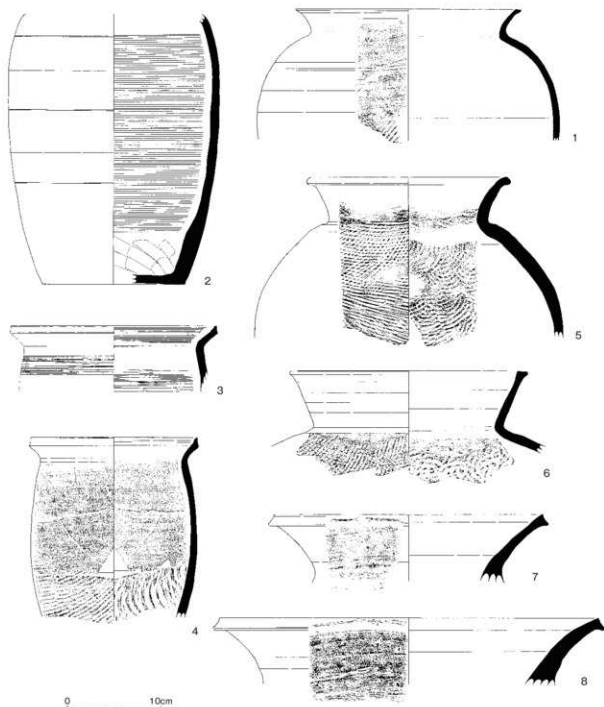
第40図4は、底部に糸切り痕が明瞭に残る。肩部以上を欠損するが、胴部のつくりからすると、長頸瓶の可能性が高い。5は、短頸壺である。内面にカキメが認められる。口縁部は、やや外反する。6・7は、壺脚部である。短頸壺もしくは、瓶類の脚部と思われる。第41図1は、外面に沈線が2条施され、つくりとしては短頸壺に近い。しかし、口縁部が大きく外反し、端部がつまみ出される。内面はタキを回転ナデで消している。2は、外面にナデ付けの痕跡があるため、双耳の耳付瓶と思われる。外面に沈線が3条みられる。窟1・2では唯一の耳付瓶である。



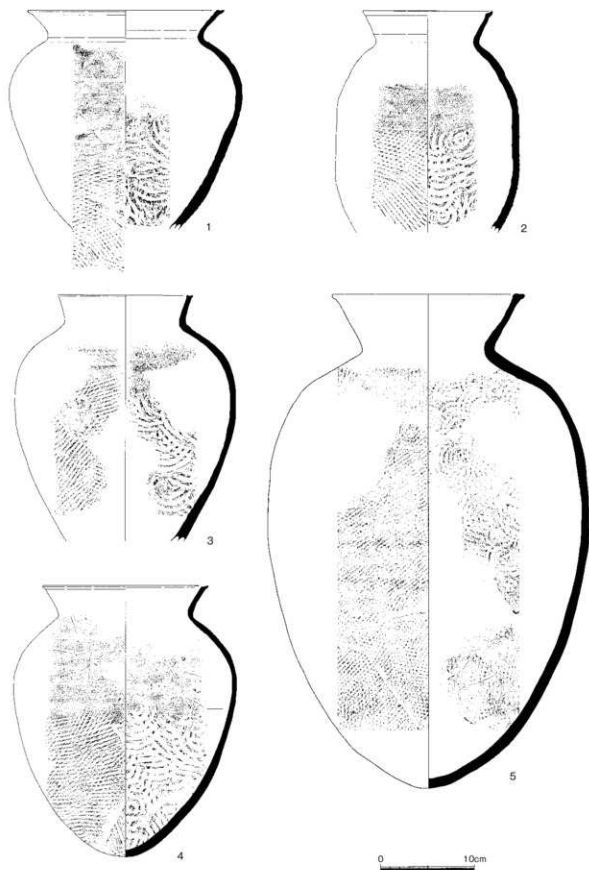
第40図 II地区 灰原1・2出土須恵器実測図2 (縮尺1:3)

甕 (図版第21、第41図3～8、第42図)

第41図3・4は、土師器長胴甕である。口縁部は上方へ立ち上がる。胴部上半をカキメ、下半をタタキで調整する個体が多い。第41図5～8、第42図1～5は、中・大型の甕類である。第41図8は、窯1・2出土品で唯一口縁部に波状文が施されている。第42図1～4は、肩部付近の調整がカキメなどタタキを消す調整が施されている。土師器製作との関連がうかがわれる。第42図5は、胴部が非常に長い。長胴甕とも言える個体であるが、口縁部のつくりや、調整方法は一般的な甕とかわりはないのでここでは甕に含めておく。



第41図 II地区 灰原1・2出土須恵器実測図3 (縮尺1:4)



第42図 II地区 灰原1・2出土須恵器実測図4 (縮尺1:4)

(4) 窯3出土の須恵器

窯3と灰原3出土品は、もともと復元可能な製品が多く、図化し得たものももっとも多くなっている。食膳具では、壺が一定量含まれる。また、壺類では、瓶が増加する。

坏蓋 (図版第22～24、第43図、第44図)

I～Ⅲ群すべての法量の製品が出土している。すべて宝珠形つまみを持ち、無鈕化された製品は存在しない。外面は基本的に天井ヘラ削り調整が大半であるが、一定量ケズリの確認できない個体が含まれる。また、第43図15、第44図10には、沈線が施されるなど、やや特異なものも含まれている。

坏蓋で確認できる重ね焼きの方法はⅡa類とⅡb類のものが2:1の割合で確認できる。Ⅰ類のものは、1点も確認できなかった。

第44図1は多数の破片が癒着しており、焼台に転用されていたようである。

坏B (図版第24・25、第45図、第46図1～3)

窯3では、窯1・2と比較すると、口径12cm以下の小型品が増加する。法量を問わず、すべて貼付高台であるが、高台は踏ん張る形態のものが減少する。口径15.0～16.0cm中型品では、口縁端部で外反する形態のものも多い。また、第45図10のように、沈線を1～2条めぐらせる製品も確認できる。これは、壺にも認められる共通の特徴である。

皿B (第46図4)

皿Aに高台がつくタイプである。藤巻窯の中でも3号窯で2点のみ確認できた。貼付高台で、高台のつくりが薄く、高さがある。

壺B (図版第25、第46図5～9)

5は、口縁内面に沈線が施されている。高台の直径は小さく、高台端部も丸く仕上げられている。明らかに坏Bとは異なるため、壺に含めておく。金属器の影響品の可能性が高い。

6～9は、口縁の立ち上がりか内湾するいわゆる壺である。6～8は、窯1・2では確認できない器種である。7のような小型で、口縁端部を鋭くつまみあげる個体が少量存在している。高台のつくりも薄い。図化していないが、この小型壺に沈線を施す個体が確認できる。

高坏 (図版第26、第46図10～15)

坏部は2点存在する。逆蓋状の坏部で、口縁端部を折り返すもの(10)と、扁平で口縁端部をわずかに外反させ、丸く仕上げるもの(11)がある。

坏A (図版第26、第47図1～10)

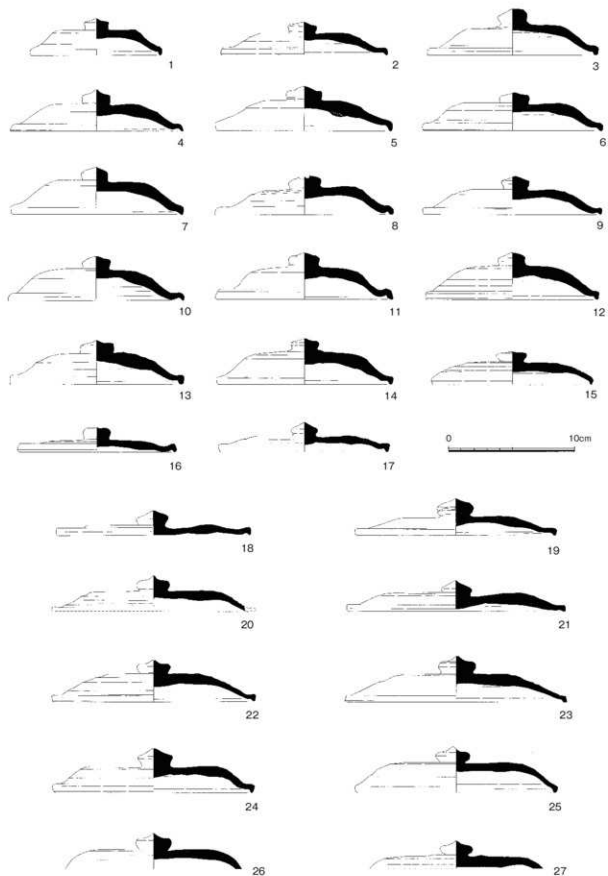
底部はヘラ切り後未調整のものと、仕上げナデを施されるものが存在する。口縁端部が外反する個体が多い。窯1・2と比較して、口縁部が大きく広がるものが多い。

皿A (図版第4・26、第47図11～21)

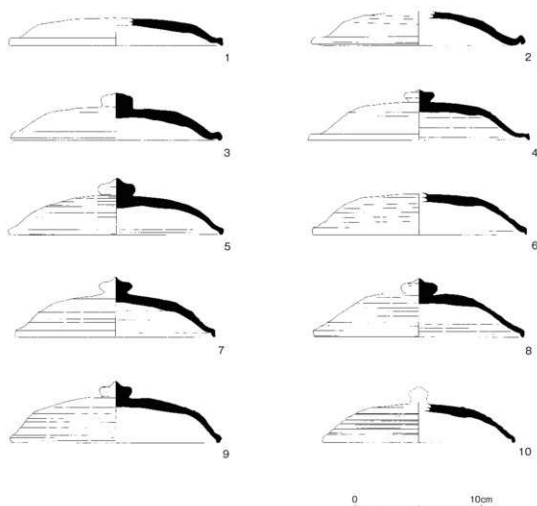
口径15.5cm以下の製品と、口径16.0cmを超える製品にまともが見られる。底部にスノコ痕が残っている製品が多い。10枚以上の重ね焼きが確認できる。

壺蓋 (図版第27、第48図1～2)

セット関係にある短頸壺の出土数にたいして出土数が少ない。形態的に窯1・2と大きな変化は見られないが、やや器高が高い。1は、破片が癒着しており、焼台に転用された可能性が高い。



第43図 II地区 窯3出土須恵器実測図1 (縮尺1:3)



第44図 II地区 窯3出土須恵器実測図2（縮尺1:3）

短頸壺（図版第27、第48図3～10）

なで肩で、丸みの強いもの（3～7）と、肩がはるもの（4～9）がある。前者は口縁部が直立せず、わずかに外反する。7・8・10などの脚がつくものが多いが、9のように平底のものも存在する。沈線が施されるものも存在するが規則性はない。器高15.0cm以下の小型品も存在するが、細片のため、図化は出来なかった。

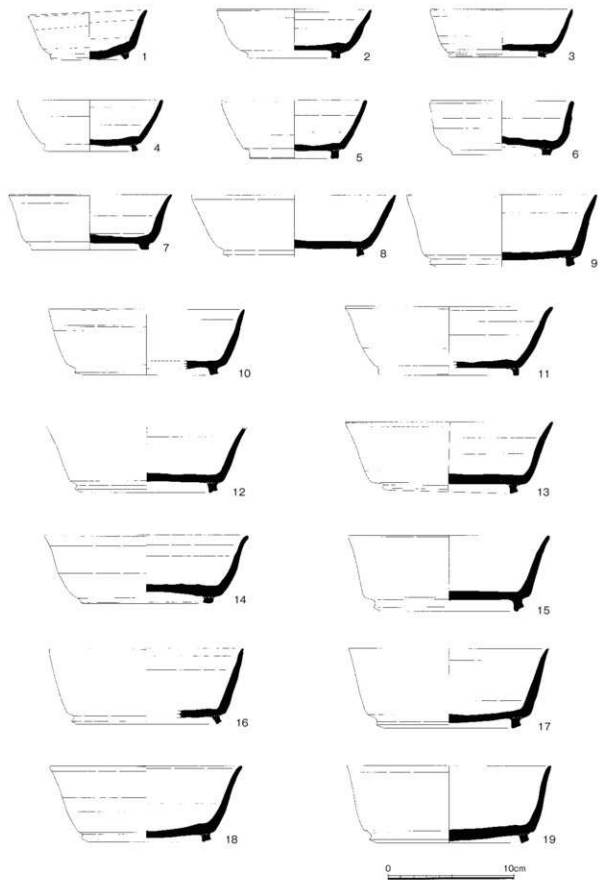
長頸瓶（図版第27、第49図1～8）

耳付瓶とともに、3号窟で増加する器種である。

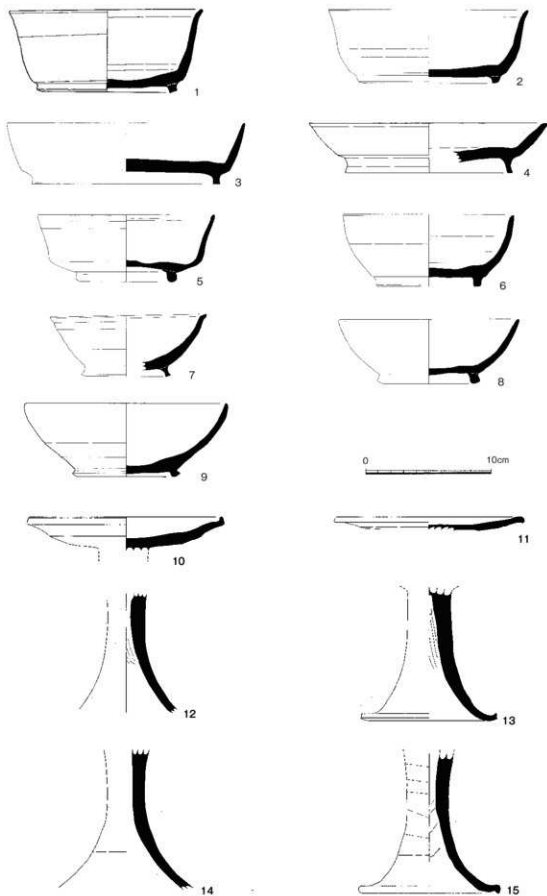
器高20.0cm程度の小型のものが多い。胴部は肩が張り、底部で窄まる器形である。口縁部は、外端面に連続するもの（1・2）と、上方へつまみ出されるもの（3・7）がある。確認できるものでは、ほとんどすべてに脚がつく。底部はナデ調整されるものが大半であるが、3にのみ、糸切り痕が明瞭に残っている。

沈線が施される個体は少なく、1・7に認められる程度である。

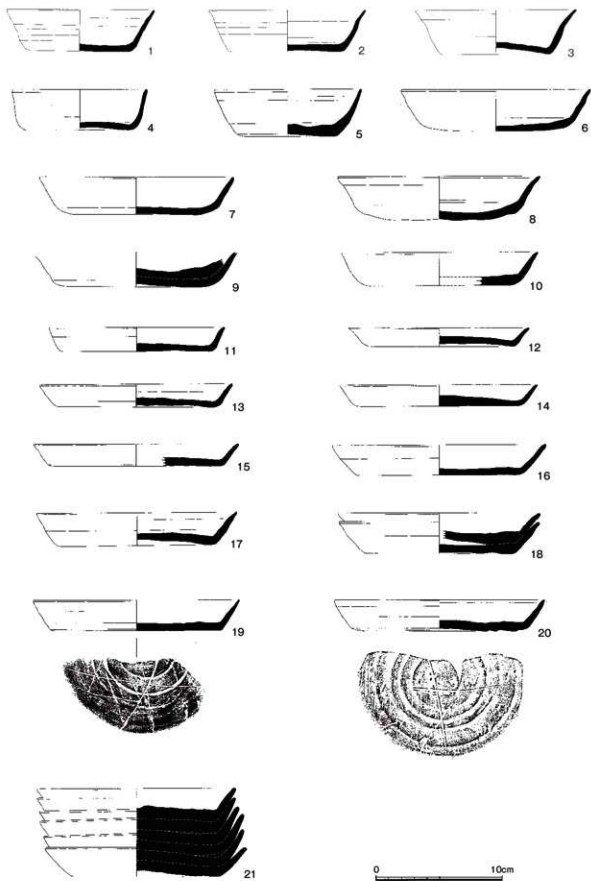
6は、肩部に1条貼り付け突帯がめぐる。頸部以上、底部を欠損するため詳細は不明であるが、残存部分からは、耳の痕跡は確認できない。東海系の影響を受けた製品とも考えられる。8は、耳付の可能性が高いが、残存部分では、耳の痕跡は認められないため、長頸瓶に含めておく。



第45図 II地区 窯3出土須恵器実測図3 (縮尺1:3)



第46図 II地区 窯3出土須恵器実測図4 (縮尺1:3)



第47図 II地区 窯3出土須恵器実測図5 (縮尺1:3)

耳付瓶 (図版第4・27、第49図9～12、第50図1～4)

双耳のもの(第49図9、第50図2・3)と、上下で90度方向を違った四耳のもの(第49図12、第50図1・4)の2タイプが確認できる。第49図9のような小型品も存在するが、器高43.0cm前後で、規格性が高い製品である。第50図2・3は、同一工人の製作品である可能性が高い。

耳部分は、上下端部を切り取って中央に方形の突起を作り出すもの(第49図9～12、第50図1)と、突出部分に波形の突起を作り出すもの(第50図2～4)がある。

胴部沈線については、装飾の意図もあるだろうが、耳の取り付け位置にほぼ対応しており、割付線の役割を果たしているものと推定される。

長胴壺 (図版第28、第51図1～3)

口径は、17.0～19.0cmである。灰原1・2出土品と比較しても、調整方法等は、あまり大きな変化は見られない。3点とも完全に須恵質化している。

広口鉢 (図版第28、第51図4)

底部まで残存していたのは1点だけであった。口径は20.4cm、器高は15.0cmである。口縁部径と胴部最大径が、ほぼ一致する。外面はカキメで調整される。頸部で鋭く屈曲し、口縁端部は外側につまみ出される。

直口壺 (第51図5～7)

3点とも胴部上半までしか残存していない。残存部分の調整方法は短頸壺に近く、外面は回転ナデ調整される。灰原1・2でも同様の製品が確認されるため、少数ながら、一定の需要に応じ、生産されていたようである。

横瓶 (図版第28、第51図8～10)

口径約9.0cm、器高21.0～23.0cmのものがまとまって出土している。大型のものは確認できなかった。胴部の閉塞は、片面円盤閉塞の手法が確認できる。外面はカキメが施されるが、部分的である。

壺 (図版第28、第52・53図)

第52図1～4は、長胴のもの、第53図1～6は中・大型品である。

長胴のものは、口縁端部を下方に突出させるものが多い。第52図4は底部までほぼ完存している。口径19.3cm、器高48.5cmをはかり、このタイプでもっとも大きい。第52図3以外は胴部が内外面ともタタキ調整である。

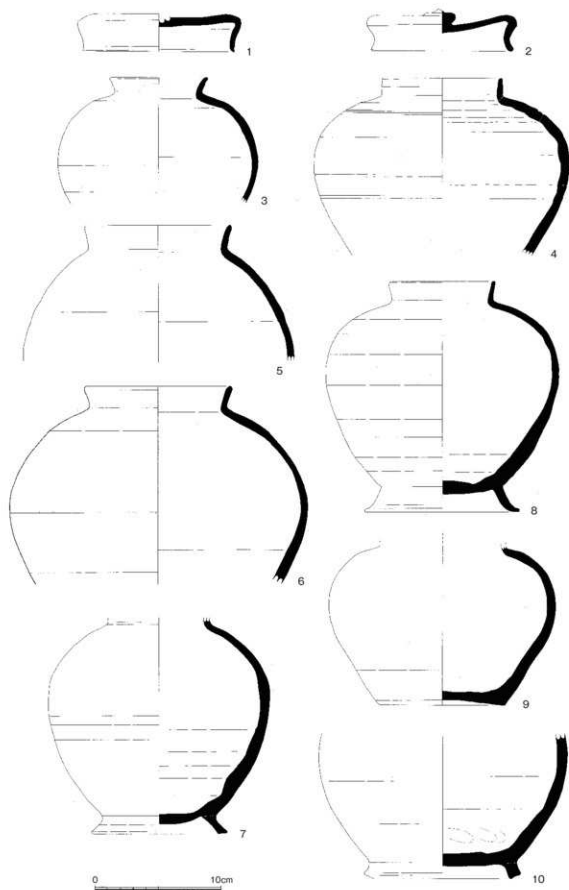
第53図1～6のいわゆる貯蔵用の壺には、第53図1・6のように、口縁部に断面三角形の突帯を1～2条めぐらせる製品が多い。また、窯3では、口縁部に波状文等の加飾は認められなかった。また、第53図5を除く5点には、灰原1・2出土破片との接合関係が認められる。

(5) 焼成具 (第54図)

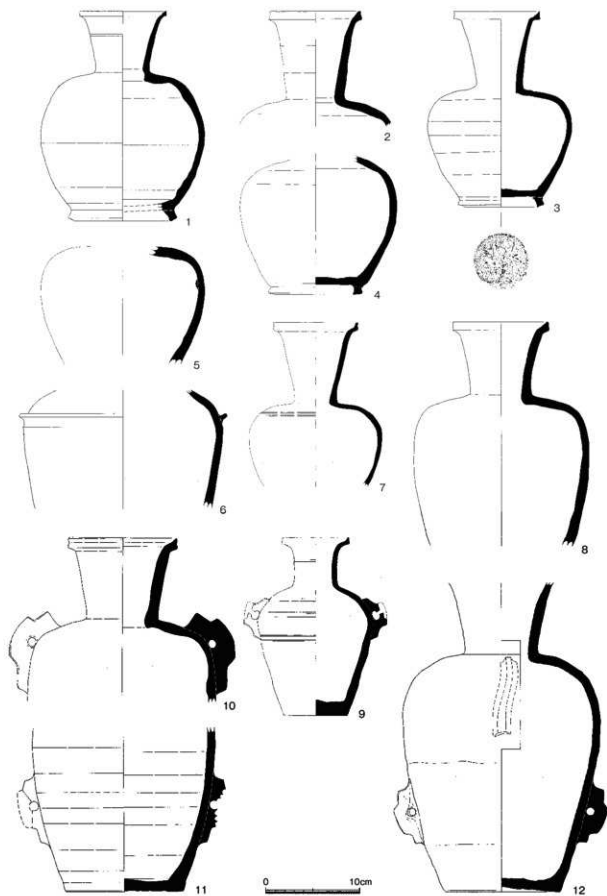
ここでは焼成具を、器種を問わずまとめて報告する。

1～3は、専用焼台である。使用時の状態ではなく、製作時の状態で統一図化した。1は、壺着痕・剥離痕が顕著で、使用されている。回転ナデによる調整である。2・3は、底部回転ヘラ切りである。3には、底部にスノコ痕が認められる。

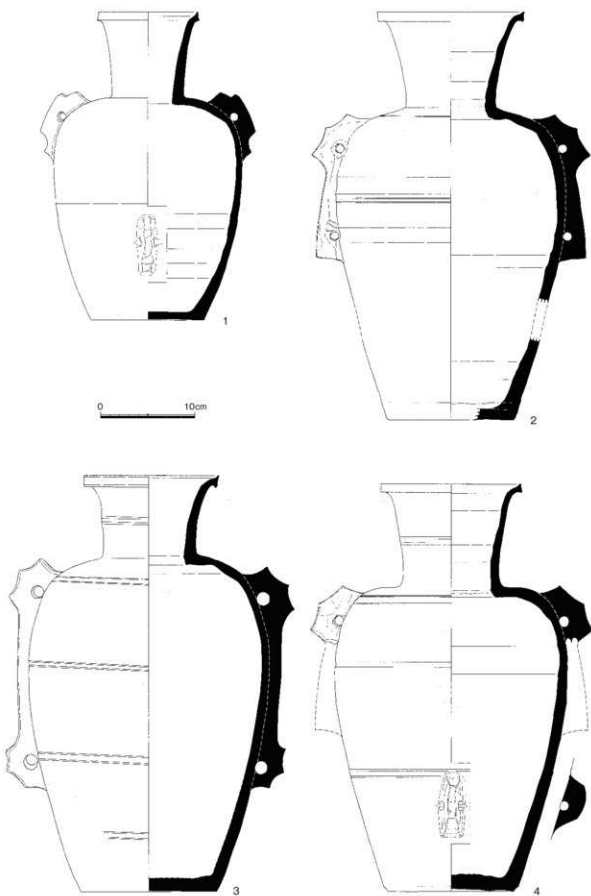
4は、透孔が確認されないため、小型壺の転用品と思われる。5は、粘土塊で窯壁が付着している。6は、焼台と思われるが、多数指圧痕が残っており、非常に粗雑なつくりである。



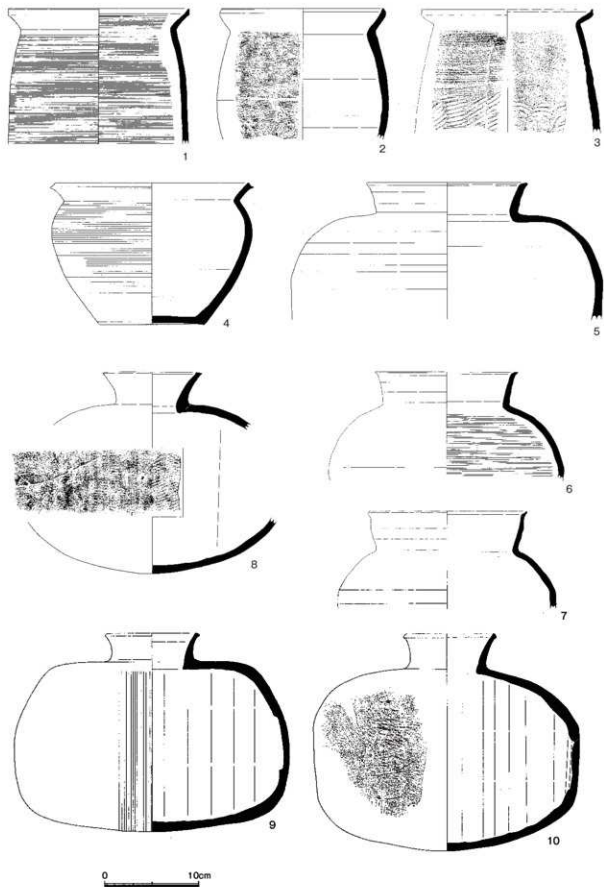
第48図 II地区 窯3出土須恵器実測図6 (縮尺1:3)



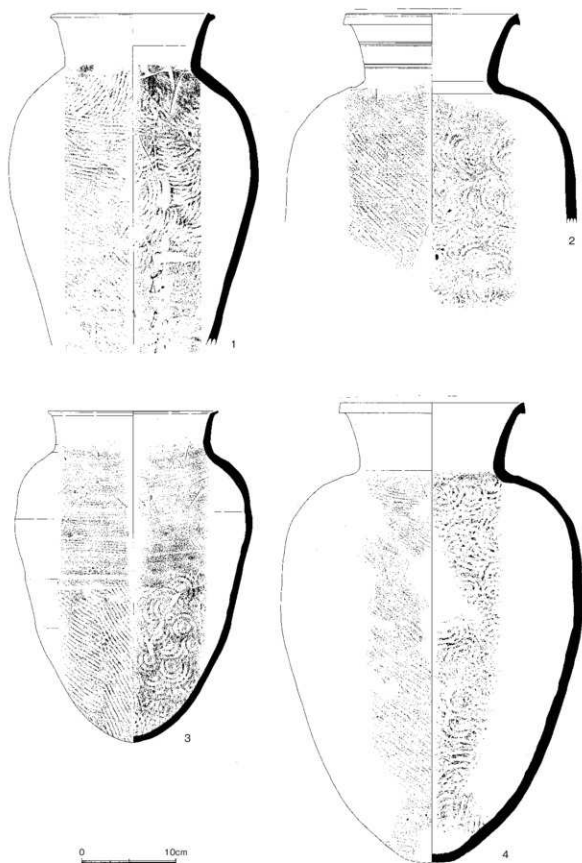
第49圖 II地区 窯3出土須恵器実測圖7 (縮尺1:4)



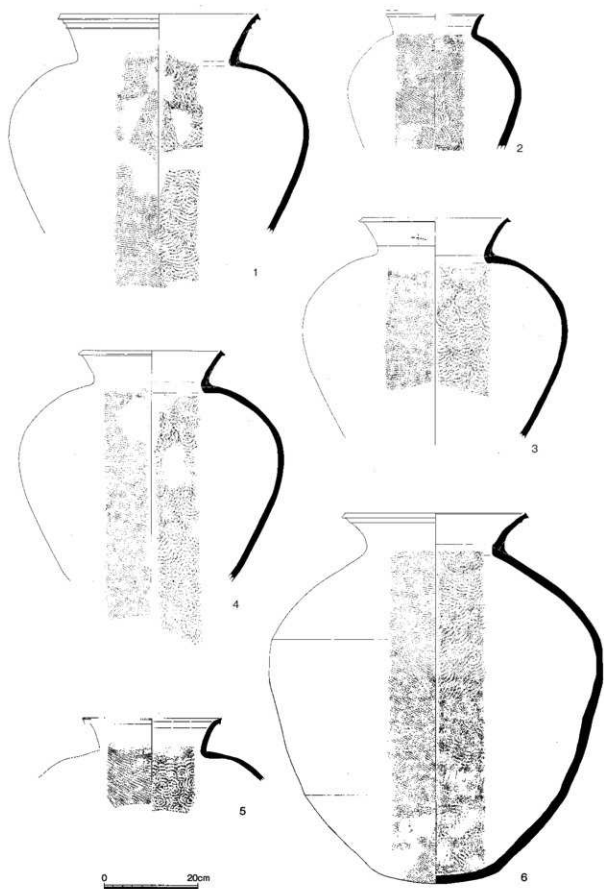
第50図 II地区 窟3出土須恵器実測図8 (縮尺1:4)



第51圖 II地区 窯3出土須恵器実測図9(縮尺1:4)



第52図 II地区 窯3出土須恵器実測図10(縮尺1:4)

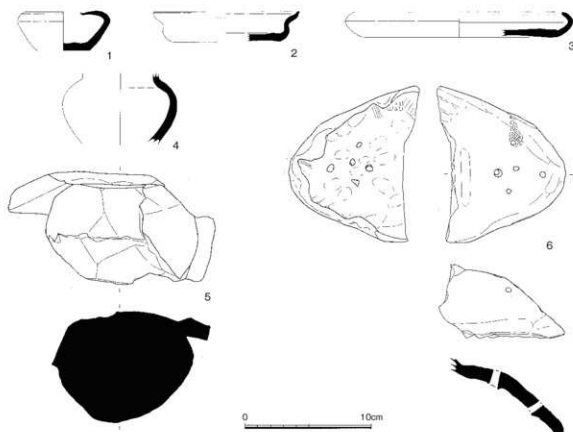


第53圖 II地区 窯3出土須恵器実測図11(縮尺1:8)

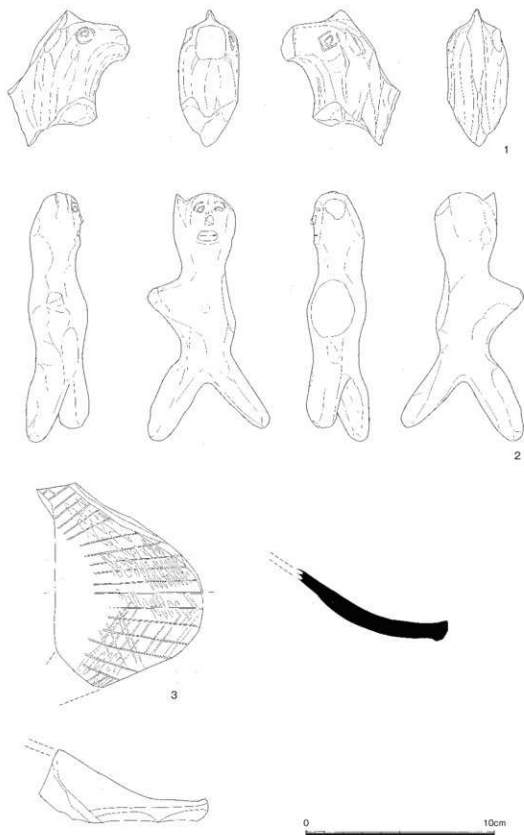
(6) 特殊品 (図版第4、第55図)

藤巻窯で確認できた特殊な製品をまとめて報告する。

1は、陶馬である。首から頭までしか残存していなかった。たてがみおよび鼻先を欠損している。ヘラによる面取りの後、たてがみが貼り付けられ、ナデによって仕上げられている。目の表現が線刻で施されているが、右が円形、左が方形と、左右で表現が異なる。耳も立体的に表現されていたようであるが、欠損している。灰原1・2で出土しており、破損したため、使用されることなく廃棄されたと推定される。2は、人形陶製品である。全長は13.1cmである。中実であり、棒状の粘土からひねり出して製作されている。仕上げはナデである。左腕部分を欠損している。鼻は立体的に作り出されているが、目、眉毛は線刻による。口は工具によるへこみで表現されている。耳は貼り付けで作られている。先端が尖っており、あるいは角と解釈する余地もありうる。性別に関する表現は観察できない。このような製品は、県内には類例がなく、全国的にみてもきわめて特殊である。灰原1・2で出土しており、本製品も廃棄されていたようである。3は、鳥形製品である。尾羽の部分と思われる表現が線刻されている。縦方向に直線を刻んだ後、格子や細かい波状の線刻を施している。欠損部分があるため、全容が把握できないので断言はできないが、鳥形の獣形硯の蓋と考えられる。灰原1・2で出土しており、本製品も廃棄された可能性が高い。



第55図 II地区 出土焼成器具実測図(縮尺1:3)



第55圖 II地区 灰原1・2出土特殊品実測図(縮尺1:2)

(7) 小結

須恵器報告の最後に、藤巻窯出土製品を時期的・技術系譜的に位置づけておくことにする。

藤巻窯生産品は、器種構成でも述べたように食膳具の比率が極めて高い。これは北陸全体で見られる8世紀中の生産傾向に対応するものであろう。坏Bでは、灰原1・2出土品に藤巻窯内で古相の特徴を示す製品が存在する。窯1～3を通して、盤状高杯が生産されている。埴類の生産は、窯1の最終操業で確認でき、窯3では一定量生産されている。耳付瓶も窯1の最終段階で少数生産されており、窯3で本格化している。

以上のような特徴から、窯1・2の生産は、8世紀の半ば過ぎに開始され、少なくとも後葉段階では窯1・2が同時に操業していたと推定される。また、窯3の生産品は、9世紀前葉までの特徴を備えている。

一方、技術系譜で考えていくと、土師器長胴壺を焼成しており、越前における基幹窯群である金津窯、丹生窯とは系譜的に異なる可能性が高い。こうした特徴は、南加賀窯群、越前では永平寺窯と共通する特徴である。瓶類に突帯付の例が存在するが、こうした特徴も東海地方、あるいは東海の影響を受けた南加賀以北の影響とも捉えうる。また、ヘラ記号についてほとんどふれることが出来なかったが、確認した限り、藤巻窯では一直線、もしくは「×」の2種類のみである。供給、需要にかかわらず、きわめて限定的な使用である。

問題が多岐にわたるため、これ以上は言及しないが、今後、藤巻窯出土製品の位置づけについては、詳細な検討を要するものと考えられる。(宮崎)

注

- 1) 完形に近い個体が存在するが、著しくタール等が付着しており、図化できなかった。
- 2) 重ね焼きの分類は北野1988による。

参考文献

- 北野博司 1988「古代の土器」[辰口町西部遺跡群 I] 石川県教育委員会
 本多達哉編 1995「舟場窯跡」福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 水村伸行 1997「越前国9世紀代の土器様相」[北陸古代土器研究] 6 北陸古代土器研究会
 望月精司編 1991「戸津古窯跡群 I」小松市教育委員会

II 中近世の土器 (図版第30・31、第56図)

II地区出土の中近世の土器は、遺構出土品はほとんどなく、表土や盛土から小片で少量出土した。その内訳は、16世紀後半の土師質皿と越前焼を中心とし、その他に国産陶磁器がわずかにある。輸入陶磁器は極めて少ない。以下、図化できたものに限って、種別ごとに説明を行う。

土師質皿 (第56図1~5)

1・4・5は平坦面3、2は平坦面4とともに表土から出土した。今回、図化できた土師質皿は小片のため口径等の法量は推定径である。1・2・4・5は「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告I」1)において分類されているD類と考えられるが、1についてはC類に属する可能性がある。2と5は口縁部に灯芯油痕が認められ、2は内面全体にも煤が付着している。4においては他の土師質皿の胎土と比べると肌理が細かく色調も灰白色で、いわゆる「白かわらけ」の様相を呈する。口径は推定径13.4cmを測る。3はまっすぐ外側に伸びる口縁部をもち、口縁端部も伸び上がるように調整が施されている。口径は推定径13.0cmを測る。

肥前系陶器 (第56図6)

碗 やや外側に開く高台を有し、灰軸を施す。釉薬は高台内面まで施軸し、畳付けには砂が若干付着している。高台径は4.0cmを測る。近世の所産である。

越前焼 (第56図7・8)

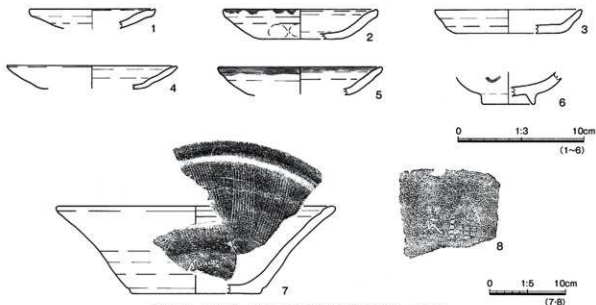
搦鉢 (7) 平坦面6の表土から出土した。口径約37.0cm、器高11.5cm、底径約17.4cmを測る。口縁端部は断面三角形を呈し、内面には一定間隔の搦目が下から上方向に施されている。内面底部に煤の付着が認められ、暖房用具類として再利用された可能性がある。

押印文 (8) 平坦面3の表土から出土した。正方形の格子目とその左側に凹文の「本」という文字が施されている。 (中川)

注

1) 以下の文献による。

小野正敏 1979「土師質土器」『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告I - 朝倉館跡の調査』福井県教育委員会



第56図 II地区 出土土器実測図 (縮尺1:3・1:5)

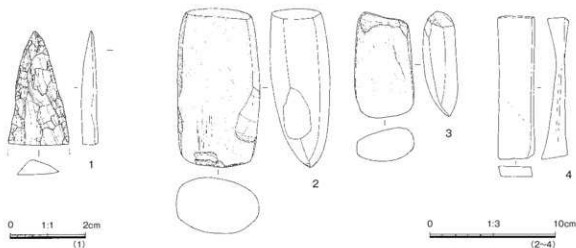
III 石器・石製品 (図版第31、第57図)

内訳は縄文時代の石器 (1~3)、中世の石製品 (4) となる。

1は灰原1・2、2は灰原3の自然流路内埋土から出土した。ともに流れ込みと考えられる。3は、礎石建物1の礎石1で周辺礫と混在して出土しており、二次的な移動を受けている。4は、平坦面1の表土から出土している。

1は、尖頭器。表面は粗く、裏面は平坦に、中央まで達する調整が施される。右側縁は両面、左側縁は表面に細部調整される。木葉形で、断面は台形となる。2と3は、磨製石斧。平らな基部をもち、側辺がほぼ平行する。側辺に不明瞭な面が作出され、断面は、2が扁平、3が楕円形となる。3は、両側辺上半に敲打痕が残る。また、表面下半に長軸方向の擦痕がみられる。4は、砥石。石質から中砥と考えられる。板状の長方形を呈し、側辺が湾曲して反る。上下端以外が砥面。両側面に長軸方向、上端面には短軸方向の成形痕がみられる。

(田中)



第57図 II地区 出土土器・石製品実測図 (縮尺1:1・1:3)

第7章 まとめ

ここでは、本遺跡で検出した遺構のうち、主要なものについて触れ、まとめとする。

第1節 須恵器窯

Ⅱ地区で検出した3基の須恵器窯は、従来、その存在が周知されておらず、新出であった。特に窯1・2は遺存状況が良好であり、一部重複するが3基に対応する灰原も検出し、貴重な資料を得ることができた。窯1・2は並存し、谷の入り口部に位置する。窯3はやや離れ、南東側の谷奥部に位置する。出土須恵器から、窯1・2は8世紀後葉に、窯3は9世紀初頭に位置づけられ、空白期を有さず、ほぼ連続して操業したと考える。また、この3基が立地する丘陵斜面の南東側にあたる調査区外には、落ち込みが確認できることから、さらに複数基の存在が予想される。窯1～3の立地が構築順に谷奥部へ移動する傾向から、この未検出の窯跡は9世紀初頭以降の時期が予想される。

以上のように、同一の丘陵斜面において、一定期間連続操業する複数基からなる窯跡群の検出から本窯跡は「藤巻窯跡群」として位置づけ得る。さらに、今回検出した窯1～3は、今後、「藤巻1～3号窯」と呼称すべきと考える。また、永平寺町内に所在する浅見金道口遺跡・浅見堂ノ北遺跡から出土する当該期の多量の須恵器は、肉眼観察による胎土・焼成が近似することからも、本窯跡群の生産品である可能性が非常に高い¹⁾。このため、現状では、少なくとも永平寺町内東部を供給域とすると推定される。

1～3号窯の構造においては、地下掘り抜き式である点で共通するものの、各部において若干の差異が認められる。操業開始時の1号窯が小規模である点、時期的に後出する3号窯において、舟底状ピットが小規模である点、焼成部境のくびれ部が明確化する点、焼成部傾斜度が緩化する点などをあげられる。構築・操業時期がほぼ連続する窯跡群に認められるこれら構造的な差異が、時期的差異を示し、傾向として一般化されるものか、周辺地域を含めた比較検証が必要となる。

他窯跡群との関係については、本窯跡群の構造が当該期においても地下掘り抜き式であることから、越前町丹生窯跡群とは異なる構造変化をたどる点も指摘される²⁾。近隣では、永平寺町西部で展開する「松岡永平寺窯跡群³⁾」、あるいは「永平寺窯⁴⁾」があり、その操業時期は6～10世紀とされる。しかし、本窯跡群の主体時期である8世紀後半～9世紀初頭の調査例がなく、窯構造および出土遺物も明確ではない。このため、両窯跡群の関連性、つまり、並存操業や時期的な操業拠点の移動といった点や、あるいは、生産規模や供給域の大きさを背景として、本窯跡群に「永平寺窯跡群」の支群的位置づけが与えられるのかといった点については、今後の課題となる。「一郡一窯の体制⁵⁾」の概念を含め、成立背景や窯構造、生産品や流通圏などによる総合的な検討が必要である。

第2節 中世遺構

I地区で検出した建物群は、各平坦面内に存在する。丘陵斜面に南北・東西の2方向をさざぎられた谷内部には、標高がもっとも高い谷奥部から、谷が開く西方に向かい、平坦面が離崖状に展開する状況がうかがえる。各平坦面の比高差から、調査区西側の削平部分を含めれば5・6段の平坦面の存在が推定できる。このように谷内部に建物敷地である平坦面が集中する形態は、規模の大小があるものの、白山平泉寺坊院跡⁷⁾で顕著に認められる。本遺跡周辺での調査事例がなく、一般的集落形態との比

較ができていないが、この形態の類似から、I地区は僧侶の宿舎である「坊院」・「坊」跡に関連するものとする。また、谷奥部の平坦面1を除くすべての平坦面は、遺構面が1面であり、建物の建て替えや整地による区画整備は顕著には認められない。このため、比較的短期間の存続が想定され、その時間幅は、I地区全体の出土遺物から、大略16世紀後半～17世紀初頭に求め得る。

II地区で検出した遺構は、調査区外に現存する土塁・堀を伴う「館」跡の関連施設である。調査区内は館縁辺部に推定され、平坦面や石垣などを検出したが、建物は検出できず、具体的な内部構造は把握できなかった。恒常的な居住施設ではないためか、出土遺物は極端に少なく、正確な時期比定は困難であるが、石垣2の造成土中から出土した遺物を下限として、II地区全体の出土遺物から、大略16世紀後半～17世紀初頭に求め得る。石垣1・2の断面形態が傾斜する点も、時間的に矛盾しない。

両地区の遺構群は存続時期が重なり、隣接して存在することから、強い関連を有していたと推測する。例えば、有事の際、I地区の住人（僧侶）を中心として、立て籠る場所がII地区であるといった想定も、安土・桃山時代の越前地方における武装化する宗教勢力の存在といった時代および地域的背景とあわせて、遺跡周辺で確認できる多数の館跡の存在などからも、一応の蓋然性を有すものと判断する。

以上から、I地区で想定した「坊」跡とII地区の「館」跡は、字名である「多珍坊」の由来となった「館」と「坊」である可能性が高く⁷⁾、平泉寺末坊の伝承⁸⁾とも深く係わるものと推察する。（山本）

注

- 1) 調査担当である鈴木篤英氏（浅見金道口遺跡）、宮崎認氏（浅見堂ノ北遺跡）のご教示を得た。
- 2) 望月2004。
- 3) 望月2004による呼称名。
- 4) 水村1997による呼称名。資料不足ではあるが、今後、概念等の整備を行ない、名称の統一化が望まれる。
- 5) 「一郡一窟の体制」の概念については、宇野1994による。
- 6) 松村英之2004による。
- 7) 水野和雄氏のご指摘による。
- 8) 上志比村1987による。

主要参考文献

- 天井康昭 1996 『奥乙ヶ谷遺跡第1次発掘調査・第2次試掘調査・堂谷窟跡発掘調査報告書』永平寺町教育委員会
- 宇野隆夫 1994 「一郡一窟の体制について」『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会
- 上志比村 1978 『上志比村史』
- 松村英之 2004 「越前・若狭8白山平泉寺旧境内」『掘立柱建物から礎石建物へ』第17回北陸中世考古学研究会資料集
北陸中世考古学研究会
- 水村伸行 1997 「越前国9世紀代の土器様相」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 望月精司 1997 「北陸における古代土器生産体制の変質と展開」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 望月精司 2004 「3. 信越・北陸 越前・若狭の須恵器窟」『須恵器窟構造資料集2』窟跡研究会
- 望月精司 2004 「第六章 飛鳥・奈良・平安時代」『八里向山遺跡群』石川県小松市教育委員会
- 吉岡泰英 2004 「掘立柱建物と礎石建物」『掘立柱建物から礎石建物へ』第17回北陸中世考古学研究会資料集
北陸中世考古学研究会

第2表 出土土器観察表1(須恵器)

種別 番号	遺物 番号	出土遺構	器別	器種	数量(個)	位置		形状		色澤	胎土	製造	備考	写真
						目録	図録	内面	外面					
3000	1	Ⅱ	須恵器	杯蓋	128	-	19	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	黄灰色(5F 0.5/1)	黄			5/10
3000	2	Ⅱ	須恵器	杯蓋	110	-	19	胴輪ナシ	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰色(10F 5/1)	黄			9/10
3000	3	Ⅱ	須恵器	杯蓋	119	-	25	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	灰色(10F 5/1)	黄			5/10
3000	4	Ⅱ	須恵器	杯蓋	121	-	26	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰色(10F 5/1)	黄			5/10
3000	5	Ⅱ	須恵器	杯蓋	142	-	25	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	灰色(10F 4/1)	黄			1/10
3000	6	Ⅱ	須恵器	杯蓋	110	-	13	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	灰色(7F 2.5/1)	黄	中々晩		5/10
3000	7	Ⅱ	須恵器	杯蓋	110	7.5	27	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ,唇上げナシ,ナテ	灰色(10F 0/1)	黄	短形高直。		5/10
3000	8	Ⅱ	須恵器	杯蓋	114	7.3	24	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	黄灰色(5F 0.5/1)	黄	短形高直。		5/10
3000	9	Ⅱ	須恵器	杯蓋	120	16.1	31	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	灰色(10F 0/1)	黄	短形高直。		5/10
3000	10	Ⅱ	須恵器	杯蓋	119	18.1	31	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰色(10F 1/1)	黄	短形高直。		5/10
3000	11	Ⅱ	須恵器	杯蓋	117	18.0	35	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	灰色(10F 0/1)	黄	短形高直。		5/10
3000	12	Ⅱ	須恵器	杯蓋	119	18.0	37	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	灰色(7F 2.5/1)	黄	短形高直。		5/10
3000	13	Ⅱ	須恵器	杯蓋	113.1	17.1	34	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	灰色(10F 0/1)	黄	短形高直。		4/10
3000	14	Ⅱ	須恵器	杯蓋	113.7	18.1	38	胴輪ナシ	胴輪ナシ	灰色(7F 2.5/1)	黄	短形高直。		4/10
3000	15	Ⅱ	須恵器	杯蓋	1126.1	18.1	39	胴輪ナシ	胴輪ナシ	灰褐色(12F 0.1)	黄	中々晩		5/10
3000	16	Ⅱ	須恵器	杯蓋	1120.1	19.1	39	胴輪ナシ,胴輪へう張り,唇上げナシ	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰色(10F 1/1)	黄	短形高直,底縁斜形底縁あり。		5/10
3000	17	Ⅱ	須恵器	杯蓋	1124.1	19.2	42	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	黄灰色(10F 0.5/1)	黄	短形高直。		5/10
3000	18	Ⅱ	須恵器	杯蓋	1142.1	19.0	49	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	黄灰色(10F 1.5/1)	黄	短形高直。		5/10
3000	19	Ⅱ	須恵器	杯蓋	1155.1	19.3	58	胴輪ナシ	胴輪ナシ	灰色(7F 2.5/1)	黄	短形高直。		5/10
3000	20	Ⅱ	須恵器	杯蓋	1124.1	19.1	30	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	灰色(10F 1.5/1)	黄	中々晩		5/10
3000	21	Ⅱ	須恵器	杯蓋	1122.1	18.0	30	胴輪ナシ,唇上げナシ	胴輪ナシ	灰色(10F 0/1)	黄	短形高直。		4/10
3000	22	Ⅱ	須恵器	杯蓋	1121.1	18.1	28	胴輪ナシ	胴輪ナシ	灰色(10F 1/1)	黄	短形高直。		2/10
3000	23	Ⅱ	須恵器	杯蓋	1129.1	18.1	32	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰色(10F 1/1)	黄	短形高直。		5/10
3000	24	Ⅱ	須恵器	杯蓋	1123.1	18.1	39	胴輪ナシ,胴輪へう張り,唇上げナシ	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰色(10F 0/1)	黄	中々晩	外縁部は,片割ナメキトナメキ底縁あり。	4/10
3000	25	Ⅱ	須恵器	杯蓋	1140.1	1180.1	43	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	黄灰色(10F 0.5/1)	黄	短形高直。		5/10
3000	26	Ⅱ	須恵器	蓋A	1140.1	1141.1	27	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰色(12F 1/1)	黄	底縁にスノコ直上あり。		5/10
3000	27	Ⅱ	須恵器	蓋A	1140.1	1141.1	22	胴輪ナシ,胴輪へう張り,唇上げナシ	胴輪ナシ	灰色(10F 1/1)	黄			5/10
3000	28	Ⅱ	須恵器	蓋A	1140.1	1141.1	23	胴輪ナシ,胴輪へう張り,唇上げナシ	胴輪ナシ	オリーブ灰色(12F 0.5/1)	黄			5/10
3000	29	Ⅱ	須恵器	蓋A	1140.1	1141.1	21	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	灰色(10F 1/1)	黄			5/10
3000	30	Ⅱ	須恵器	蓋A	1140.1	1141.1	19	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰色(10F 1/1)	黄			6/10
3000	31	Ⅱ	須恵器	蓋A	1150.1	1144.1	21	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰色(10F 0/1)	黄			5/10
3000	1	ⅡK1-1	須恵器	杯蓋	1123.1	-	29	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	灰色(7F 2.5/1)	黄			6/10
3000	2	Ⅱ	須恵器	杯蓋	1162.1	-	33	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	にじみ黄褐色(10F 1/1)	黄			1/10
3000	3	ⅡK1-2	須恵器	杯蓋	1171.1	-	32	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰色(10F 0/1)	黄			4/10
3000	4	2号区	須恵器	杯蓋	1170.1	-	33	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	灰色(7F 2.5/1)	黄			6/10
3000	5	ⅡK1-2	須恵器	杯蓋	118	7.8	43	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	黄褐色(10F 0/1)	黄			5/10
3000	6	ⅡK1-2	須恵器	杯蓋	1143.1	108	64	胴輪ナシ	胴輪ナシ	灰色(10F 5/1)	黄			5/10
3000	7	ⅡK1-2	須恵器	杯蓋	1144.1	1100.1	59	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	灰色(7F 2.5/1)	黄	中々晩		4/10
3000	8	ⅡK1-2	須恵器	杯蓋	1141.1	100.1	27	胴輪ナシ,胴輪へう張り,唇上げナシ	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰色(7F 2.5/1)	黄			4/10
3000	9	ⅡK1-2	土師器	ⅡA	1110.1	100.1	31	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	オリーブ灰色(10F 3/1)	黄			4/10
3000	10	ⅡK1-2	須恵器	ⅡA	1112.1	8.5	32	胴輪ナシ,胴輪へう張り,胴輪へう張り	胴輪ナシ	オリーブ灰色(7F 2.5/1)	黄	中々	内縁部黄褐色化している。	8/10
3000	11	Ⅱ	須恵器	ⅡA	1120.1	8.3	32	胴輪ナシ	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰色(10F 0/1)	黄			4/10
3000	12	Ⅱ	須恵器	ⅡA	1118.1	10.1	34	胴輪ナシ,胴輪へう張り,唇上げナシ	胴輪ナシ	黄灰色(10F 2.5/1)	黄			9/10
3000	13	Ⅱ	須恵器	ⅡA	1130.1	10.1	31	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	オリーブ灰色(9F 3/1)	黄			5/10
3000	14	ⅡK1-2	須恵器	ⅡA	1122.1	10.1	32	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	灰色(10F 0/1)	黄			5/10
3000	15	ⅡK1-2	須恵器	ⅡA	1129.1	10.1	29	胴輪ナシ,胴輪へう張り,唇上げナシ	胴輪ナシ	オリーブ灰色(10F 1/1)	黄			4/10
3000	16	ⅡK1-2	須恵器	ⅡA	1114.1	1101.1	33	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	灰色(10F 0/1)	黄	中々		4/10
3000	17	ⅡK1-2	須恵器	ⅡA	1126.1	10.1	36	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ,唇上げナシ	にじみ灰色(12F 0.5/1)	黄			4/10
3000	18	ⅡK1-2	須恵器	ⅡA	1129.1	10.1	37	胴輪ナシ,胴輪へう張り,唇上げナシ	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰色(10F 1/1)	黄			6/10
3000	19	ⅡK1-2	須恵器	ⅡA	111	9.1	35	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ,唇上げナシ	黄褐色(12F 1/1)	黄	中々晩		4/10
3000	20	ⅡK1-2	須恵器	ⅡA	110	7.7	37	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ	灰色(7F 2.5/1)	黄			5/10
3000	21	ⅡK1-2	須恵器	ⅡA	1174.1	1138.1	27	胴輪ナシ,胴輪へう張り,唇上げナシ	胴輪ナシ,唇上げナシ	黄褐色(12F 0.1)	黄			4/10
3000	22	ⅡK1-2	須恵器	ⅡA	163	113	29	胴輪ナシ,唇上げナシ	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰色(7F 2.5/1)	黄			2/10
3000	23	ⅡK1-2	須恵器	高野原産	-	1108	1108.1	胴輪ナシ	胴輪ナシ,底縁あり	灰褐色(12F 1/1)	黄			4/10
4000	1	ⅡK1-2	須恵器	須恵	1100.1	-	30	胴輪ナシ,胴輪へう張り	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰色(7F 2.5/1)	黄			5/10
4000	2	ⅡK1-2	須恵器	須恵	1111.1	-	35	胴輪ナシ	胴輪ナシ	灰色(10F 0/1)	黄			5/10
4000	3	ⅡK1-2	須恵器	須恵	1127.1	-	120	胴輪ナシ	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰色(12F 0.5/1)	黄			4/10
4000	4	ⅡK1-2	須恵器	須恵	-	45	109	胴輪ナシ,ナメキ,胴輪底縁あり	胴輪ナシ,唇上げナシ	灰褐色(10F 0.5/1)	黄			5/10
4000	5	ⅡK1-2	須恵器	須恵	1100.1	-	127	胴輪ナシ	胴輪ナシ,ナメキ	灰色(10F 0/1)	黄			5/10
4000	6	ⅡK1-2	須恵器	須恵	-	1143	112	胴輪ナシ	胴輪ナシ	灰色(12F 1/1)	黄			5/10

種別番号	通称番号	出上名称	部材	設備	設置位置(1:1000) (1:500)		成程・調整		名称	組上	備注	備考	費用
					日付	取組	取組	内容					
6200	6	303	調整器	棒金	131(2)	72	43	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ	灰色(1095-1)	並	底板内面に設置あり	6,300
6200	7	303	調整器	棒金	132(4)	92	44	調整ナブ	調整ナブ	灰色(1092-1)	並	調整ナブ,内面に設置あり,底面に調整器	5,300
6200	8	303	調整器	棒金	133(9)	100	49	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ	灰色(1064-0)	並	調整ナブ,棒金あり	5,300
6200	9	303	調整器	棒金	134(8)	103(4)	52	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ	灰色(1065-0)	並	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	5,300
6200	10	303	調整器	棒金	135(1)	102	50	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	灰色(1065-0)	並	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	6,500
6200	11	303	調整器	棒金	136(2)	110	55	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ	灰色(1065-0)	並	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	5,300
6200	12	303	調整器	棒金	-	100	53	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ,調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1065-0)	並	調整ナブ,調整ナブ,調整ナブ	6,300
6200	13	303	調整器	棒金	162	98	58	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ,調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	オリーブ黒色(25031-1)	並	調整ナブ,調整ナブ	5,300
6200	14	303	調整器	棒金	166(1)	104	54	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ	灰色(1065-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	9,300
6200	15	303	調整器	棒金	138(7)	108	60	調整ナブ,調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1065-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	6,300
6200	16	303	調整器	棒金	162(2)	112(2)	60	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ,調整ナブ	オリーブ灰色(25031-1)	並	調整ナブ	5,300
6200	17	303	調整器	棒金	138(8)	103	63	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ	灰色(1064-0)	並	調整ナブ	5,300
6200	18	303	調整器	棒金	135(5)	91	60	調整ナブ,調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1054-1)	並	調整ナブ,調整ナブ	5,300
6200	19	303	調整器	棒金	160(1)	116(1)	65	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1052-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	5,300
6200	20	303	調整器	棒金	162	102	62	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1055-0)	中々	調整ナブ,調整ナブ	6,500
6200	21	303	調整器	棒金	167	102	58	調整ナブ,調整ナブ	調整ナブ	灰色(1055-0)	並	調整ナブ	7,300
6200	22	303	調整器	棒金	165(4)	114(4)	68	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1052-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	6,300
6200	4	303	調整器	棒金	168(3)	132	39	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1054-0)	並	調整ナブ	6,300
6200	5	303	調整器	棒金	133(8)	74	51	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ,調整ナブ	調整ナブ	灰色(1015-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	6,300
6200	6	303	調整器	棒金	133(1)	80	57	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ	オリーブ黒色(25031-1)	並	調整ナブ,調整ナブ	7,300
6200	7	303	調整器	棒金	123	63	50	調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1055-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	6,300
6200	8	303	調整器	棒金	133(1)	72	51	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ	黒色(1015-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	5,300
6200	9	303	調整器	棒金	133(4)	77	58	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ	灰色(1054-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	5,300
6200	10	303	調整器	棒金	162	-	121	調整ナブ,調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1052-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	5,300
6200	11	303	調整器	棒金	168	-	130	調整ナブ,調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1055-0)	中々	調整ナブ,調整ナブ	5,300
6200	12	303	調整器	高圧調整	-	-	184	調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1055-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	1,300
6200	13	303	調整器	高圧調整	-	95	103	調整ナブ,調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1055-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	5,300
6200	14	303	調整器	高圧調整	-	-	133	調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1055-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	5,300
6200	15	303	調整器	高圧調整	-	108	110	調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1057-1)	並	調整ナブ,調整ナブ	8,300
6200	1	303	調整器	棒金	117	72	33	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ	灰色(1052-0)	並	調整ナブ	9,300
6200	2	303	調整器	棒金	124(1)	90	33	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ,調整ナブ	調整ナブ	オリーブ黒色(25031-1)	並	調整ナブ,調整ナブ	5,300
6200	3	303	調整器	棒金	122(2)	80	35	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ,調整ナブ	調整ナブ	灰色(1054-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	6,300
6200	4	303	調整器	棒金	130(6)	88	32	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ	灰色(1065-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	8,300
6200	5	303	調整器	棒金	131(3)	74	37	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ	黒色(10031-1)	並	調整ナブ	5,300
6200	6	303	調整器	棒金	134(9)	104	33	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ,調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1065-0)	中々	調整ナブ,調整ナブ	8,300
6200	7	303	調整器	棒金	132	104	30	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1052-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	9,300
6200	8	303	調整器	棒金	160	114	34	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1052-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	5,300
6200	9	303	調整器	棒金	-	105	120	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1065-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	6,300
6200	10	303	調整器	棒金	133(1)	112	26	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1065-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	5,300
6200	11	303	調整器	棒金	133(4)	116	19	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ,調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1064-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	6,300
6200	12	303	調整器	棒金	142	116	15	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ,調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1065-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	9,300
6200	13	303	調整器	棒金	151	122	18	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ,調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1055-1)	並	調整ナブ,調整ナブ	7,300
6200	14	303	調整器	棒金	133(1)	123	27	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ,調整ナブ	調整ナブ	灰色(1057-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	5,300
6200	15	303	調整器	棒金	160(1)	133	18	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ,調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1065-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	6,300
6200	16	303	調整器	棒金	168	124	24	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ,調整ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1065-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	6,300
6200	17	303	調整器	棒金	158	124	26	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1065-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	7,300
6200	18	303	調整器	棒金	158(1)	116	32	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ	灰色(1065-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	5,300
6200	19	303	調整器	棒金	162(1)	131	24	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ	灰色(1058-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	6,300
6200	20	303	調整器	棒金	165(1)	132	25	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ,調整ナブ	灰色(1052-1)	並	調整ナブ,調整ナブ	6,300
6200	21	303	調整器	棒金	153(1)	118	120	調整ナブ,調整ヘラ型ナブ	調整ナブ	灰色(1065-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	10,300
6200	1	303	調整器	棒金	120	-	129	調整ナブ	調整ナブ	灰色(1056-1)	並	調整ナブ,調整ナブ	6,300
6200	2	303	調整器	棒金	112	-	33	調整ナブ	調整ナブ	灰色(1055-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	7,300
6200	3	303	調整器	棒金	174	-	150	調整ナブ	調整ナブ	灰色(1055-0)	並	調整ナブ,調整ナブ	5,300

第4表 出土石器・石製品観察表

採掘 番号	遺物 番号	地区	出土遺構	器種	形態	石質	法量(cm)			遺存
							器長	器幅	器厚	
22回	1	I地区	平坦面1	砥石	表面に不定方向、右側面に斜行する擦痕。	凝灰岩	5.8	4.1	2.4	完形
22回	2	I地区	窪集中1	硯	上端に短軸方向や斜行する擦痕。	粘板岩	2.4	7.7	2.3	大半欠
22回	3	I地区	窪集中1	硯	縁部に線刻前の長軸方向擦痕。	粘板岩	6.6	5.8	2.1	大半欠
22回	4	I地区	窪集中1	バンドコ		磐谷石	15.6	14.0	6.8	大半欠
22回	5	I地区	平坦面1	バンドコ		磐谷石	12.6	11.4	3.1	右半欠
22回	6	I地区	窪集中1	バンドコ	縦格子の窓を四つもつ。	磐谷石	15.1	20.3	15.7	一部欠
57回	1	II地区	灰原1・2	尖頭器		安山岩	4.6	2.4	0.7	下半欠
57回	2	II地区	灰原3	磨製石斧		砂岩	8.4	4.8	2.8	完形
57回	3	II地区	礎石建物1礎石1	磨製石斧		安山岩	12.7	6.6	4.8	完形
57回	4	II地区	平坦面3	砥石	表裏に斜行する擦痕。	砂岩	11.3	3.1	2.1	完形

圖 版



(1) 遺跡遠景（西方上空から）



(2) 調査区全景（北西上空から）



(1) 竈1・2完掘状況(西方から)



(2) 竈1遺物出土状況(西方から)



(1) 窯1断ち割り状況（西方から）



(2) 窯3完掘状況（西方から）



(1) 灰原3出土遺物



(2) 灰原1・2出土特殊遺物



(1) 掘立柱建物1・2、礎石建物1検出状況(西方から)



(2) 掘立柱建物1検出状況(東方から)



(1) 礎石建物1検出状況(南方から)



(2) 平坦面5遺構検出状況(南方から)



(1) 礎石列1 検出状況 (西方から)



(2) 石列2 検出状況 (西方から)



(3) 掘立柱建物1 柱穴2 検出状況 (西方から)



(4) 掘立柱建物1・溝1 検出状況 (南方から)



(5) 溝1 土層堆積状況 (西方から)



(6) 溝1 土層堆積状況 (北方から)



(7) 土坑1 半截状況 (南方から)



(8) 土坑2 半截状況 (南方から)



(1) 土坑6確認状況(南方から)



(2) 掘立柱建物2 柱穴1半載状況(南方から)



(3) 掘立柱建物2 柱穴2半載状況(南方から)



(4) 掘立柱建物2 柱穴3半載状況(西方から)



(5) 掘立柱建物2 柱穴4半載状況(西方から)



(6) 掘立柱建物2 柱穴5半載状況(西方から)



(7) 掘立柱建物2 柱穴6半載状況(西方から)



(8) 掘立柱建物2 柱穴7半載状況(西方から)



(1) 掘立柱建物2 柱穴8半載状況(西方から)



(2) 掘立柱建物2 柱穴9・10半載状況(北方から)



(3) 掘立柱建物2 柱穴12半載状況(東方から)



(4) 掘立柱建物2 柱穴13半載状況(南方から)



(5) 掘立柱建物2 柱穴14半載状況(東方から)



(6) 掘立柱建物2 柱穴15半載状況(東方から)



(7) 掘立柱建物2 柱穴16半載状況(東方から)



(8) 溝2土層堆積状況(南方から)



(1) トレンチ3土層断面 (西方から)



(2) ビット列3 ビット16遺物出土状況 (東方から)



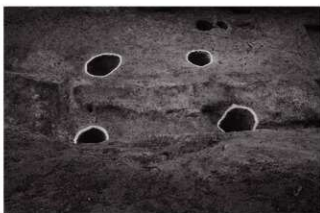
(3) ビット列3 ビット17遺物出土状況 (東方から)



(4) 礎石建物2 ビット13半載状況 (東方から)



(5) 礎石建物2 ビット14半載状況 (東方から)



(6) 柱穴列2・3検出状況 (南方から)



(7) 土坑7検出状況 (東方から)



(8) 土坑8検出状況 (北方から)



(1) 窟1・2確認状況(西方から)



(2) 窟1・2および灰原1・2完掘状況(南西方から)